

掠略を免れしめんための注意に外ならず、故に十日は、井上參謀の通知あり。其翌十一日には、軍司令官の名を以て、一篇の規則を公布せられたり。

近來戎器を弄して、人民を脅威するの聞えあるのみならず、現に敵兵と見認め難き者の刀劍に瘡を、を目撃せり。甚だ穩かならざる儀に有之候。又這回第四十三號を以て、雇役者携帶の戎器に關し、發令も有之候間、尙雇役者外の者と雖も、各部各隊に於て、相當の取締相成度、爲念此段及御通知一候也。

第四三號 雇役者携帶の戎器取締規則、

- 一 從軍馬丁人夫の輩は、一切戎器(刀劍仕込杖の類を)携帶する事を許さず。
- 一 前項輩、現に携帶する所の戎器は、十一月十二日中に、悉く其雇主、人夫組長、或は人夫頭に差出すべし。
- 一 雇主、人夫組長、或は人夫頭は、十一月十二日中に、其戎器を取纏め、姓名書目録を添へ、所屬軍師團混成旅團司令部、又は兵站監部に差出すべし。
- 一 前項の戎器は、其軍師團混成旅團司令部、又は兵站監部より、便宜本國に送還すべし、若し役務に於て、特に必要と認むるときは、軍司令部より下附することあるべし。

雇役者戎器取締

第二軍の行政廳

一 十二月十二日以後、許可なく、戎器を携帶するものあるときは、其雇主、人夫組長、人夫頭に對し、命令違犯となすの外、其本人を嚴重に處分すべし。但携帶せし戎器は沒收す。十二日金州城内に、占領地行政廳を置き、一等領事荒川已次を以て、知廳事に任じ、職務を執行せしむ。

金州城行政規則

- 第一條 金州城に行政廳を置き、金州城内及び、城外附近の各村落を以て管轄區域とす。
- 第二條 金州城行政廳の職權は、現に金州城附近を占領する日本帝國軍隊の交戰權に基く、者にして、第二軍司令官職權内に於て之を定む。
- 第三條 金州城の政廳に、知事一名、屬員若干名を置き、知事の官氏名は、軍司令部より、管内一般に之を公告す。
- 第四條 行政廳の守衛及び、巡邏勤務の爲め、憲兵若干を附屬す。
- 第五條 知事は、日本軍隊の利益を計る爲めに必要なる行政事務を執行し、其重大なる者は、軍司令官の指揮を請ひ、其兵站勤務と交渉するものは、兵站監と協議して之を執行す。
- 第六條 知事は、日本軍隊の利益を計る爲めに、管内清國民及び、外國人民に對して、萬事公

法の範圍内に於て刑罰を行ひ、其死刑に該る者は、軍司令官の制可を得て之を執行す。

第七條 知事は、日本帝國軍隊をして、占領地内に於て、總て非違不法ならしむる爲に、管内に在る日本帝國臣民を管理し、陸軍刑法・治罪法・懲罰令に依り、處分すべき事件は、師團又は兵站部理事に移牒して適當の處置を促し其他の事件は豫め軍司令官に經伺して定めたる軍律に依り處分すべし。

第八條 知事は管内人民の財産及び、營業を監査し、其實況を軍司令部に報告し、總て軍は師團旅團司令部及び、兵站部より行政廳の管内に在る清國臣民に向て發せんとする命令及び、處分に付通知を受け、意見を述べべし。

第九條 知事は、其職權に屬する行政及び、司法事務を補助せしむる爲め、清國臣民を使用し、必要の場合に於て、之に給料及び、褒賞を與ふる權を有す。

第十條 金州城行政廳の經費は、軍監督部より之を支辨す。

右の規則を發布すると同時に、清民に對し左の公告をなせり

大日本帝國軍本營示

所謂國家用兵以問罪、本軍施政以衛民、法之至善也、本軍陷金州城、以鎮撫爲先、漫

清民に對する告示

不加殺戮、是以兵勇愛惜不意枯抗者、現施治體養全好生之道、就中不干軍事、商賈老幼、打杖之日、不幸受傷、恐懼忍苦者、殊屬可憐、本軍救恤者、迄稟請寓舊金州廳內、專員及早治療、宜浴再生之恩、又聞死者無葬、隱蔽曠日、錯慮、迷聲亦請該府、設法措置以慰遊魂、死者瞑目、生者甘心、是一舉而兩得者矣、特示、

右諭通悉

明治二十七年十一月十二日

欽命大日本帝國陸軍大將伯爵大山示、現開政廳金州廳衙門、厚施仁政、公平聽訟、務法舊制、一從習俗、以便爾等有衆、應務一切事宜、飭大日本帝國領事荒川已次辦理、爾等有衆速來瞻、依不狎不恐、須浴德澤爲此特示、

右諭通悉

明治二十七年十一月十二日

此日聯合艦隊は、旗艦を松島に移し、司令長官も、亦陸上處々に左の告諭文を掲示せしむ。曰く、

大日本海軍示

本艦隊在此守備、敵艦來襲、事固屬國事、與爾等民衆無涉、但夜間船舶往來殊屬危險、

海軍の告示

因_レ此一到_ニ夜分_ニ禁_ニ各大小船舶出入_ニ一面益嚴_ニ防備_ニ二面保護_ニ爾等民衆_ニ若有_ニ任意違_ニ大日本軍一經_ニ查出_ニ立刻拏究_ニ不_ニ稍姑寬_ニ爲_レ此特曉諭_ニ爾等民衆一知體_ニ悉勿_ニ違_ニ特示_ニ右諭通悉

明治二十七年十一月十二日

我軍の撫_レ郵_レ既に此の如し。誰か此仁政に風靡せざらん、清民子來、日よ多くして、荒川知廳事を呼_レぶに荒_レ大人を以てし、我軍を稱するに、天兵を以てし、殆んど自ら我日本臣民を以て居るものあるに至りしと云ふ。

我軍將に
旅順に向
はん

第十六 旅順口の大攻撃

今や、我軍は旅順口に向はんとす、地は半島の南端にして、三面海に枕_レみ、山岳重疊、丘陵起伏し、登臨_ニ一瞥_ニの下、全灣の形勢收めて眼中に在り。海岸の守備と、陸上の砲臺と、各要地を占めて、首尾相應する常山の蛇の如く、専ら海口及び背面の防備たり。實に是れ敵が第一の軍港、堅_レ堡の名、久しく東西洋に轟けり。初我山地將軍の命を征清に奉ずるや、向ふ所實に此主眼點に在り。故に我軍は十一月八日以後、一は兵力を休養せんが爲め、而して一は第十二旅團の花圍口より至るを待たんが爲め、金州城外に屯せしが、十一日に至り、西少將の第二旅團は、三十里堡に進み、十三日には、長谷川少將の率ゐる混成十二旅團も、悉く金州に來り會せり。十六日、全軍は金州及び、其附近に宿營し、部署全く成る。曰く左翼縱隊、曰く右翼縱隊、曰く搜索騎兵、是なり。而して搜索騎兵と、右翼縱隊とは、旅順本道より進み、左翼縱隊は、我軍が新發見に係る第二道より、旅順に向へり。其詳細なる部署及び、行進の區分は左の如し。

軍隊區分

搜索騎兵、長秋山騎兵少佐、

旅順攻進
軍隊區分

騎兵第一大隊(三小隊半缺)、
騎兵第六大隊第二中隊(二小隊缺)、
左翼縦隊、長益滿歩兵中佐、
歩兵第十四聯隊(二大隊缺)、
騎兵第六大隊の一小隊、
砲兵第六聯隊の山砲一中隊、
工兵第六大隊第二中隊(一小隊缺)、
第六師團の衛生隊半部、
右翼縦隊、
第一師團(歩兵二大隊と、二中隊騎兵一中隊と、三小隊大小架橋縦列缺)、混成第十二旅
團(歩兵一聯隊騎兵三小隊半・山砲一中隊・工兵二小隊・衛生隊半部・糧食半縦列缺)、
攻城廠、

斯の如く區分して三となすと雖も、共に是れ軍司令部の直轄に屬するものとす。

行進區分

行進區分

初日(十一月十七日)、

搜索騎兵は、三十里堡に宿す、

右翼縦隊の内、第一師團は、三十里堡と、高家窪の間、

混成旅團は、金州近傍、

攻城廠は、柳樹屯、

左翼縦隊は、辛塞子、

第二日(十八日)、

搜索騎兵は、双臺溝、

第一師團は、双臺溝と、前後兩木城驛の間、

混成旅團と、攻城廠は、第一師團の宿衛地より、東方夏家屯に至る間、

第三日(十九日)、

搜索騎兵は、賈家山近傍、

第一師團は、賈家山と徐家窪の間、

混成旅團は、小火石山の北麓、

十八日及び十九日の兩日に於ては、左翼縱隊の宿營地を定むる能はず。但し岳溝盤道に通ずる道を経て前進す。

第四日(二十日)、

搜索騎兵は、前の如く宿營す、

第一師團は、賈家山近傍に開進す、

混成旅團は、太子山近傍に開進す、

左翼縱隊は、旅順口の東北方に開進す、

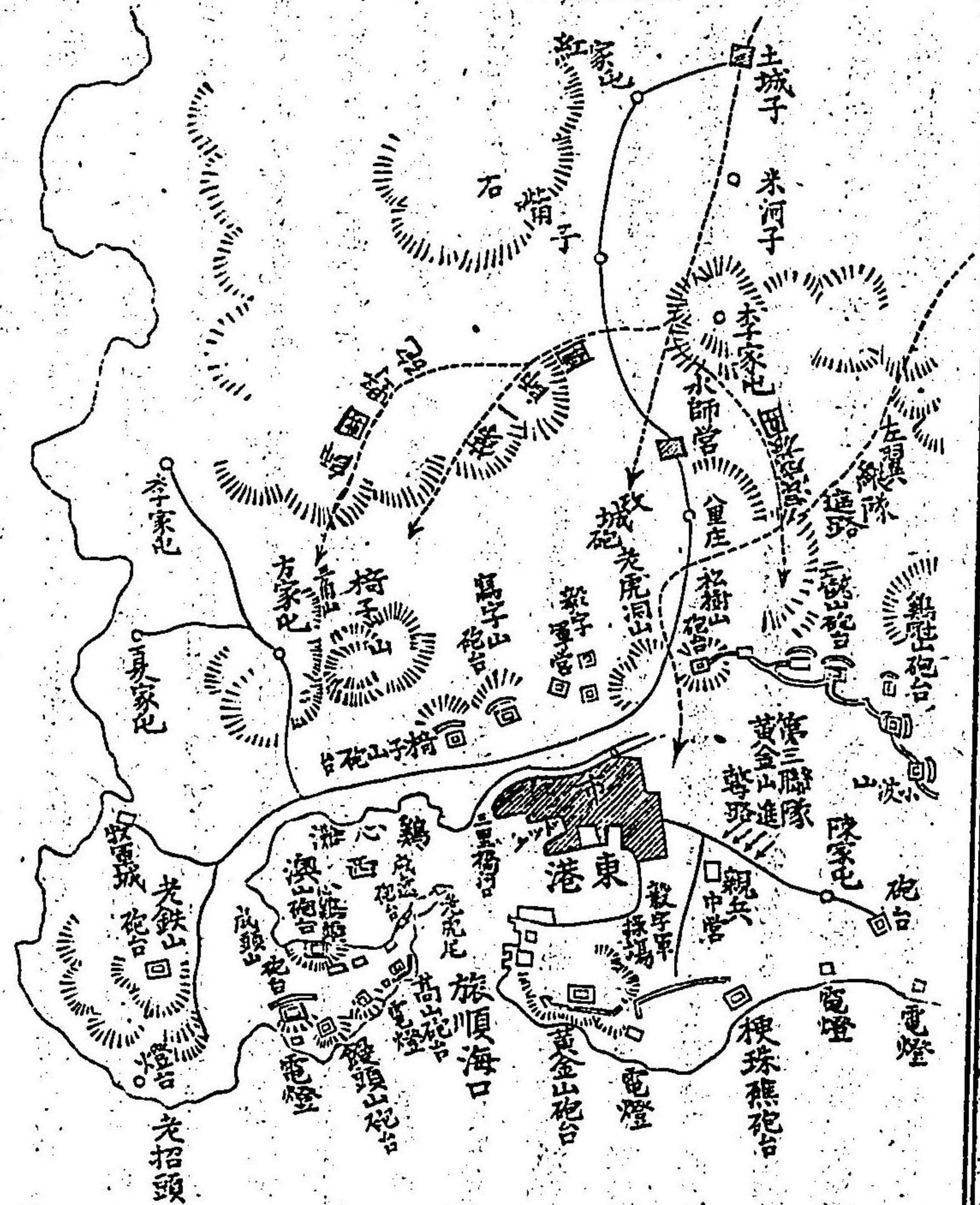
〔備考〕攻城廠は、出發第三日に於て軍の直轄に復し、長嶺子近傍に宿營、第四日李家屯の北方に集合せり。

第四日は、各隊開進の故を以て、軍の主力は旅順口の北方に在り、他の一小部分は、東北方に集り、即ち三道併進の我軍隊は、方に左の形となれり。

北方、〔主力、第一師團、混成旅團。〕 東北方、〔小部、左翼縱隊。即、中間山路軍隊。〕

この旅順の攻撃たる、實に征清戦局の消長に關するを以て、軍は是より先き、深く敵情及び、地勢の偵察に力を用ひたりき。秋山少佐は、偵察騎兵隊長となり、百難を冒して至危の地に入り、詳

旅順之圖



旅順攻撃に付秋山少佐の意見

に彼の情状を視察し、終に正確卓抜なる一の意見書を呈したり。其意に曰く、旅順攻撃に關して、最も簡單なる方策は、黎明に乘じ、旅順本道より水師營に輕軍の主力を率ゐて進み、迅速に旅順市内に侵入するに在り。假令其目的に達する能はざるも、水師營北方約三千米突の高地に於て、退却兵を安全に收容するを得べし。旅順後面砲臺の砲聲に依りて、想像するに、小口徑の砲多く、其砲彈の効力も、實見上極めて微力なり。且つ地に起伏多きを以て、多少攻撃隊の動作を隠蔽するを得べし。又他の一方策は、旅順練兵場の四方四百米突なる高地に在る三砲臺（松樹山）を、先づ占領するにあり。此方策を用ひんには、軍の主力を土城子より石嘴子を経て、水師營西方の地に進入せしめざるべからず。此攻撃法に就て、最大困難は、攻撃隊をして、五百米突餘ある高地を登攀せしむるにあり。又三十里堡附近より辛寨子沿溝を経て、旅順に通ずる山間の道路は、絶大の縦隊を前進せしむると困難なり。且つ車輛通せざるを以て、糧食の補給困難ならん。此縦隊の糧食補給法は、旅順本道上、前木城駟双臺溝、西長岑子等より、臨時の擔夫隊を編制して補給せしむる方、大に便ならん。敵は旅順を固守すること判然たるを以て、此山間を前進せしむる縦隊は、寡少となし、若し其増加を要する場合は、西長岑子附近より分進せしむるを可とす。是れ旅順本道は、物資に富み道路善良にして、糧食彈藥の補給頗る容易なればなりと。蓋し

我軍より旅順の敵將に送りし勸降書

旅順攻撃の部署、此意見を採用せしむる多しと云ふ。

斯の如く、我軍の戰團準備は、既に成れり。將に起たんとして、軍の參謀神尾歩兵少佐は、先づ勸降書を裁し清房二名をして、在旅順口なる敵將の許に送らしめたり。其文に曰く、

黃姜程張軍門、觀觀察麾下、久仰大名、未得接見、常以爲遺憾、弟嚮以使館武員、在燕京數年、往來津沽之間、親與其駐在諸統領、交吐露胸襟、常以厚兩國軍隊交情爲心、今者不幸相見於兵馬之間、亦無奈何也。頃者我軍一舉拔金州、將督其衆五萬、進逼旅順、聞閣下所統率兵數不多、且概係新募。以如是之兵、當我訓練素熟、戎器精銳之大衆、假令以閣下之智勇督戰、勝敗之數蓋可知也。嚮者貴國之師、一敗牙山、二敗平壤、三敗鴨綠江、乃至海戰、未嘗獲一利、是豈非天運乎、大勢所歸、可概見矣。當此時閣下固守無援之地、徒困無辜蒼生、蓋非良策也。我軍固以仁義動、苟敵我者、雖殲滅而不假借、至一旦棄兵器、投我、則毫不窮迫之、其將卒皆各從其官級、禮遇之、無敢加不敬、閣下幸信我言、而爲自處計、則不獨閣下之幸、抑亦貴國臣民之幸也。弟雖未親與閣下相見、已與閣下之諸知友相識、情義不能默默、因敢布腹心、閣下裁之、順請時安。

敵將は、乃ち之に復書して曰く、拜復、正に兵を交ふるの際に在て、忽ち來便に接す。尊書を捧讀

敵將の復書

して、始めて麾下嘗て公使に従ひ、燕京に駐劄し、天津、太沽の間に往來せしを知る。惜むらくは、弊鎮道等（鎮は總兵、道は道臺）均しく公命を奉じて外に在り、未だ一も芝眉に接して相周旋するを得ず。圖らざりき、今乃ち戎馬の間に於て、書を致して通問し、諭すに利害を以てし、且つ我が爲めに謀を授けらる。意誠に厚し。但貴書中、我前敵諸軍の敗状を歴陳し、貴軍の強盛を誇稱せらる、是れ則ち徒らに臆詞を逞うして、我中朝の權衡と、諸將の器量とに至ては、未だ熟審して周知する能はざるなり。抑往日牙山の一役は、本と韓國の請に應じ、兵を出して土寇を鎮壓するに係り、眞意の存する所は、巨魁を擒にして、脅従者を散じ、撫して勦せざるに在り。故に我朝未だ嘗て良將勁兵を調して、彼地に往かしめず。然るに、何ぞ料らん、貴國故なくして兵を加へ、既に人の亂に乗じ、且つ我と誓をなし、我葉提督をして、豫防に遑なく、居ら牙山の困を受くるを致す。退て平壤に至るに及では、則ち又別將機を失ふを以て誤りを貽す。此兩人の者は、今既に朝廷の嚴旨を奉じて、逮問す。若し當時主將人を得ば、勝敗未だ固より知るべからざるなり。最後鴨綠江の役に至ては、宋少保方さに重臣を以て邊疆に臨み、大兵未だ集らず、編將、裨將功を貪り、窮迫して遂に狡計に中り、反て勝を轉じて敗となすを致す。是れ亦交戰中、常に在る所の失なり。豈能く一時の利鈍を以て、遽かに兩國の強弱を定めんや。今麾下一勝を僥倖して、遂に我

を輕視す。則將たる者、一念驕矜なれば、衆心解弛す、古より今に及ぶまで歴々爽はす、敗徵既に兆す、吾竊に麾下の爲めに之を慮る。弊鎮等の如きは、束髮より軍に従ひ、武功を以て荐りに提鎮に昇る。燕齊吳楚の間に轉戦して、髮捻（長髮賊并に捻匪）の巨匪を平らげ、尋で又西の方關隴、新疆に至り、回教徒の亂を戡定す。皆身百戰を経るの餘、今則ち朝廷の委任を蒙り、我輩をして旅順を防守し、以て海疆を固めしむ。來書に云ふ、現に此地を守る者は、多く新軍に係るを、是れ未だ江淮曉健の士、訓練ありて早く既に勁旅を成すと知らざるの言なり。況や益すに、北洋の援卒、東省の濟師を以てす。旅順に駐防する者、既に三萬餘人。上は則ち諸將協和、下は則ち多士命を用ふ。且旅島の半面皆海を環らし、路の通るべきなきを知る。但死を誓ふの心ありて、生を倖ふの念なし。昔淮陰、趙を伐ち、背水を以て功をなす。所謂之を死地に致して、而して後生ける者、今日に於て殆ど明驗あり。抑左氏云へることあり、師は直を以て壯となし、曲を以て老と爲すと。中外通商より以來、我皇上一視同仁、貴國と嘗て嫌隙なし。朝鮮は我藩服たること二百餘年、列國共に之を知らざるなし。然るに、貴國故なくして盟に背き、兵を興して禍を構へ、既に韓地に據り、復た來りて我中原を侵す。其曲直固より明言を待たず。但來電、盛に精兵利器五萬の衆を擧げ來りて、旅順に迫るを稱す。願くは麾下豫め戰書を送り、明かに交戰の期を示せ。

弊鎮等自ら營に各部隊を驅りて、貴軍と一たび雌雄を決せんとす。進止但々連戦を望む。書意を盡さず。専ら此に布復し、並に時祺を候すと。蓋し清人井蛙の見のみ。我軍は斷乎として之より進み、彼と雌雄を決せざるべからず。

十一月十七日午前七時、我第二軍は二縱隊を作て金州を發し、旅順に向ふ。右縱隊は、金州より三十里堡・雙臺溝を、經て行進し、左縱隊は益満中佐之を率ひて午前七時蘇家屯を發し、三十里堡の手前より分れて、三道口・岑溝・盤道の諸部落に通ずる道路を經て、旅順の東北方に進まんとす。此日山地中將の率ゐる本隊は、行程四里、三十里堡に至り露營を張る。十八日午前七時三十分同地を發し、十二時過ぎ營城子に達するや、近距離に當り、銃聲の頻りに至るを聞く。是より於て中將を始め、幕僚の將校は、馬を止め雙眼鏡を取りて、其方位を觀察しつゝある間に、二騎馬を飛ばして來るあり。曰く先兵敵の歩兵と衝突し、今方々に激戦すと。參謀直ちに一鞭馬を驅り、三騎兵を隨へて急行したり。此日騎兵大隊長は、三個中隊を率ひ、先驅して搜索に従事し、午前十時頃徐家窩と、土城子との間に至るや、水師營方面より進み來る敵の歩騎兵若干に觸接せり。敵兵は次第に加はり、我搜索騎兵は、包圍の中に陥り、衆寡敵すべからざるの勢とはなりぬ。我兵は、縱横馳突し、銃劍を揮ひ、叱咤呼應し、一方には圍を衝き、一方には襲撃を行ひ、苦戦して一の血

旅順攻撃
先兵の衝

土城子の
戦

路を開き、雙臺溝附近の方面に退却し去る。是より先き、前衛なる歩兵第一大隊は、搜索騎兵の苦戦を聞くや、其一中隊を後援として、前進せしむ。後援兵は、今や退却地の半里前に於て、銃聲に向て馳せ、盛に射撃を行つて騎兵隊を掩護す。固より衆寡敵し難さを知ると雖も、群がる敵軍に割て入り、突進奮闘甚だ努めたり。敵兵は益増して三千許の大軍となり、漸々我中隊に迫て包圍せんとし、我歩兵も亦進退此に谷れり。中隊長淺川騎兵大尉は、斯くを見て、僅に二十四騎と、取て還し、敵の群がる眞唯中に突進し、刀を抜て、縱横奮撃瞬間に敵の三名を斫て落し、手を負はすること數知れず。敵の騎兵は、短劍の外に物なきを以て、我抜刀に對するに銃臺を以てし、之を無盡に振回して抵抗す、戦方に酣なり。我兵銃を放つに迫わらず、而て敵兵は裘衣綿服あれば、劍多く身に徹せず。然れども、我兵にして敵二名以上を殲するものなし。通譯官米津某なる者あり、亦善く戦ひ、敵を斫ること數人、身に一創を被らず。已にして、敵彈飛び來り、淺川大尉の左腕を傷け、馬より墮つ。大尉先きに右肩に負傷し、今又此傷を受けて、隻手意の如くなり。乃ち馬を棄て、戦ふ。敵の銃口大尉に集る、會々騎兵一等卒木村源松なる者亦胸部に負傷し、事甚だ輕からざりしが、大尉の落馬を見るや、直ちに馬を返し、之を扶け、自ら馬を下り、曰く乞ふ是を以て去れと。大尉即ち劍を杖さ之に騎る。而して操縱自由ならず。卒依て苦痛を忍び、自

米津通譯
官の勇
淺川大尉
の奮戦

木村一等
卒の義勇

中萬中尉
戦死

ら響を執り、大尉を逸し去らしめ、絶叫して曰く、吾意降ると。遂に其場に轉倒したり。嗚呼、此一場の悲劇以て永く兵士の龜鑑となすに足る。此役中萬歩兵中尉も、亦奮闘終に敵彈に仆る。下士以下死者十二名、負傷者二十九名を出し、我兵到底支へ難きを知り、騎兵と共に全部退却して、又双臺溝南部の高地に據る。時に正午十二時を過ぎたり。茲に前衛の大隊は、此銃聲を聞くや、後援兵に次で、急進せしが、敵恰も勢に乗じて我寡兵を塵にせんとするの時、大隊は逐次に開展して、敵兵を逸へ、咄嗟の間に雌雄を決せんとせり。敵兵は、之を見て急に陣列を布き、我陣地を距る約二千米突の高地に、四門の砲を備へ、其左右に現はれたる歩兵のみにても、三千有餘と見たり。午後一時に至り、我前兵大隊は、已に全く展開して進撃を始む。敵は忽ちにして勢を失じ、漸く退却の色あり。同一時我前衛本隊の砲兵、我陣地に達せし頃は、敵兵已に退却を始め、次で砲列を布かんとするときは、既に一里餘の後方に却さたり。時に午後二時三十分。是に於て、我軍は一時休戦を命じ、騎兵をして退兵を追撃せしむ。既にして日暮に會するを以て、追撃兵も亦退却したり。始め騎兵の支へずして双臺溝附近に退却するや、淺川大尉は直に馬を驅て大隊長に撤退を勸む。大隊長の命に曰く、此所要害の地點断じて撤退すべからず、若し其れ已む無くんば、即ち敵を逆撃せよと。此簡短なる一命令は、忽ち斯の如き大激戦を演せし者なり。

敵兵退却

野蠻的殘
忍なる敵
の行爲

又敵將の命に曰く、倭兵を防ぐ、必ず土城子に於てせよ、若し其れ能はずんば、退て而して後旅順を死守せんと。此命令は、後日一敵將の伴と寄りし者より洩らされたり。此戦に於て、最も記憶せざるべからざるの一事は、殘忍なる敵が、我戦死將卒の死屍に加へたる野蠻的行爲あり。彼等は中萬中尉の屍體をば、銃劍以て屠り、且首級を誅し、兩腕を断ち、其慘狀一見人をして悚然正視する能はざらしめたり、下士以下の戦死者、亦悉く然らざるはなく、尙其上に軍服戎器をも併せて掠奪し去り、裸跣の儘之を路上に放棄したり。殊に淺川大尉の愛馬津山の如きは、其肉を喰ひ盡くして、只骨と皮のみ遺したり。事將軍に報告せらるゝや、將軍以下、將校下士卒、皆切齒扼腕し、全軍一人として其報復を思はざるはなし。我兵氣是に至てますます振ふ。

我軍土城
子に向ふ

總攻撃の
前段

十九日、我右縦隊は、營城子を發して土城子に向ふの進路を取り、遂に右折して米河子に宿す。而して前衛尖兵は、本道に由り、李家屯を距る里前の一高地を占領し、遙かに水師營の敵壘と相對す。敵兵之を觀望して、頻りに發砲し、夜に至るも其聲を絶たず。我兵敢て應せず、以て翌朝に達す。軍司令官は、豫め命するに、二十一日未明全軍の總攻撃を爲すべきを以てす。故に作戦の機會一日も緩らすべからず。山地師團長は、二十日黎明を以て、全軍を米河子郊外に集合し、暫らく軍司令部の追及を俟ち、更に進で李家屯の西方高地に集合を命じ、軍司令官と會して、

敵の前進

軍機を論ず。午後一時に及ぶ比ひ、山地中將及び、參謀官は、軍の司令官と共に、敵營の状態を觀望しつゝありしに、遙かに敵の前進し來るを見る。漸く近くに及び、旌旗空を蔽ひ、砂塵高く揚りて壯觀比すべきなく、三縱隊を成し、隊伍整々威武を誇示するものに似たり。蓋し敵は、十八日の小勝に狎れて倭兵一蹴して潰すべしと思ふや、事此に至りしなり。午後二時に及び、敵は三方より行進して、我集合地、方向に前進し來るの狀態を明かなり。是に於て、山地師團長は、諸隊に命ずるに、緊急集合を以てし、全軍相戒めて、敵軍の適當距離に至るを待てり。既にして、敵兵進で我二聯隊の占領せし石嘴子南方の一高地に向ひ、三面より之を合圍せんとせり。我諸隊のは警備は既に成れり。砲兵は咄嗟一令の下に、高地に砲車を驅れり。放列は布かれたり。猛烈なる射撃は、起れり。轟々たる砲聲は、硝煙を捲て、天地を震撼せり。敵兵は我二瞰の下に陣睨せられ。進退既に谷まれり。而して今や猛烈なる射撃は、概ね命中し、彈片破裂、隊伍忽ちに破れ、旌旗狼藉、相争て逃る。此時既に日暮に會す。我が軍敢へて追撃せず、兵を勒して米河子に還る我兵負傷二名、敵の死傷は算なし、是を攻撃軍の第二戰と爲す。

是に至て我左縱隊たる混成旅團の行軍を觀るに、初め十七日微明、大和尚山下の陣地を發し、午

石坎子の衝突

ちて進む。前衛の司令官は、花岡少佐たり。而して益滿聯隊長は、本隊に在て進む。三十里堡に至て道兩邊に分る。右方の旅順に通する大街道たり。左方は則ち本縱隊の進行路たり。已に左すれば、大連灣左邊に當て開け、一碧鏡の如く、堡壘堅固、恰も城廓の如く、今は我の占領たり。軍艦及び、運送船を合せ、都て十九隻、黒煙を漲らして、快亦甚し。行くこと少許、地雷火を發掘したるの跡、歴々數個所に認む。是より海岸に沿ひ、道なきの所を横斷して進む。三道口を過ぐる比ひ、第一師團の騎兵將校十名、馬を驅て來り告げて曰く、是より五里、石坎子に於て、敵の防備線あり。一昨十五日我騎兵一小隊及び、歩兵一中隊同所に於て敵と衝突し、我兵負傷二名、遂に退却せり。而して敵は騎兵五十・歩兵一千許なりと。我兵之を聞て奮躍す。尙進む二里、辛塞子に至る。各村を偵察するも異狀なし。遂に此村に宿せり。十八日騎兵一分隊・歩兵一中隊の、敵兵搜索として、午前七時出發、本隊は即ち第九時を以て前進す。辛塞子を出で、僅にして道全く盡く、前面連山塞りて纒かに一棧の鳥道を通するのみ、即ち馬を下り、轡を執て上る。道幅一尺餘、紆回曲折、一面は谿にして、一面は崖巖たる角石山なり。馬は屢々蹶かんとし、人は甚だ歩行に艱む。下れば即ち碧流一帯、岑を繞て流れ、清流掬すべし。馬に飲うて休憩少時、歩兵は一列行進をなして進む。水に沿うて上るに磊嶧たる石礫馬蹄を噛み、歩すること遅々たり。願

鞍子嶺の敵勢

れば、毛道子峠、背後に登えて、右方緩傾斜の高地をなし、左方は即ち潺湲たる谿流なり。前面を望めば、金輪紅裳の騎兵一列となり、手綱を緩くして前進す。宛然一幅の畫圖たり。此日各兵皆戰鬪準備をなして進む。然れども、敵の二兵だに會せず。盤道を経て、谷溝に至るの時、方に午刻、偶々北方に當て砲聲を聞く。蓋本道右縦隊の敵と衝突せしなり。谷溝を稍々進み、敵情を偵察するに、敵兵は遠く鞍子嶺の頂上に在りて、此附近更に異状なし。已よして、村落露營の命至り、騎兵は歩兵と交替して、谷溝に返り、山腹の二舎に投宿す。夜、搜索騎兵歸り報じて曰く、鞍子嶺上一里有餘の間は、敵兵堅く守り、山上は宛から旗を以て蔽へり。滿州騎兵一小隊餘、我兵を見て逃逸し、敵の二兵小銃を以て發射したるものありしも、距離遠くして我に達せず。今夜我歩兵一小隊は敵と對峙して、彼地に露營す。此に於て稍々敵情を審にするを得たり。十九日尙茲に在り。聞く金州の敗兵此地を過ぎし時は、全村を掠奪して、殆ど遺す所なく、村民は他方に遁れ、家屋は支那兵の蹂躪に委し、家財糧食、一も完さを得ず、村民の強硬なる者は、忽ち敵せられ、所在伏屍の横はるを見たりと。二十日午前七時出發す。大嶽面に當て登ゆるものは、鞍子嶺なり。皆馬を曳て上るに、峻坂險絶尋常にあらず。頂に至れば、旅順一面眼中に在り。然れども、朝霧未だ開けず、敵の防備に就ては、尙は深く究むる能はざるなり。益滿聯隊長先づ至り、鞭

鞍子嶺を占む

を擧げて前面の一山を占領すべきを命ず。歩兵は直ちに前進し、騎兵は左翼の警戒として道を東南に取り、村落を搜索し、又は高山に登て監視す、歩兵は遂に一山を占領したるも、敵は敢へて出でず。我騎兵隊は、前進して龍頭の西南方なる高地に上れば、前夜海邊より進みし歩兵一中隊先づ此地に在り。言ふ、昨夜敵兵を却け、露營して以て此地を占む。茲に旅順の砲臺は、我正面に向て登え、其下胸壁あり、蜿蜒として連山を亘り其天險と、防備とは、頗る觀るべきものあり。我騎兵隊、馬を此高地に立つるや、彼の砲臺上三三の人影顯はれ、頻りに注視するもの、如し。我も亦馬を四所に移し、僅に頭部を出して望見すれば、忽ち白旗を立てたる一將歩兵、凡そ一大隊餘を率ひ、彼の砲臺下を西北に向て開進し、歩武整々、中央に紅色の大旗を擁す。既にして我歩哨六七名色然として走り來り、曰く敵兵迫ると。我兵疎林の中に入るや、早くも砲聲は起れり。我は一齊射撃をなし、彼は亂射を以て之に應ず。時に午後二時四十分なり。我騎兵小隊は、人家を楯とし丸を避く。須臾にして山上の我兵は退却せり。騎兵隊も亦退却せんとて、馬を進むれば、敵は早や背後の山上にあり。嚮に我歩兵隊の占領せし高地は、既に敵手に歸せり。依て歩兵隊は、退て他山を守り、騎兵隊は退くこと二三にして、一村に入り、人家を楯とし展望すれば、敵肯て追撃せず。我兵も亦山を守て進まず。敵遂に去る。是れ即ち前面に白旗を揚げた

右翼隊の
開戦

る一大隊の敵兵なりき。小戦漸く終りし後、我兵は宿舍を求めんとて、駐足もて、遙か敵の砲臺前を過ぎしに、彼れは我が頭上に向ひ、天を劈て發砲し來る。其距離五千米突許、六發の敵丸は、空しく砂塵を揚げて煙を捲ぬ。既にして無名の一村に至り、此夜の警急舎營となす武器も、馬具も、用意甚だ嚴重なり。歩兵砲兵、又各村に分れて合營せり。曩に我歩兵一中隊と、騎兵の數名は敵狀偵察として此地に來るや、忽ち敵の大兵と衝突し、我兵即死一名、負傷者數名を出し、其屍體今尙此村にありしが、目も鼻も、乃至は臍の如きも、悉く振り取り、全體の刀痕數ふべからず、衆憤慨此恨報せんことを思はざるはなし。先づ厚く之を埋葬したり。此日西北方に當りて、砲聲屢轟けり。蓋し右翼本隊の開戦なり。衆踴躍、以て明日の攻撃を遲しとせり。

旅順總攻
撃の當日

十一月二十一日、旅順堅壘の總攻撃は當日となれり。中外の觀望は繋りて此一戦に在り。而して我軍の進退も、亦洵に此二髮機微の間に存せり。前夜我右縦隊の李家屯附近より、米河子に退くや、夜半一時營を拔き、二時雙臺溝に集合を命じ、月光の下、各部隊共總攻撃の方面に向ふ。時に月白く、霜濃かに、夜氣森肅寒風面を拂ふ。而して我進撃軍の部署如何。曰く、

進撃の部
署

- 一 第一師團は、先づ椅子山砲臺を陥れ、次で松樹山砲臺に向ひ、
- 二 混成旅團は、二龍山砲臺に向ひ、

旅順の形
勢

- 三 獨立騎兵大隊は、第一師團の右側を警戒し、
 - 四 左縦隊は、旅順口の東北に敵を牽制し、
 - 五 攻城隊は、水師營の北に陣して、諸隊の攻撃を援助すべし、
 - 六 諸隊は、月明を假りて、各方面に向ひ、人馬枚を啣みて、敵の砲臺に肉薄すべし、
- 是に於て、先づ旅順口の形勢を略叙せざる可らず。旅順口は、渤海灣の咽喉なり。海口の西南端には、老鐵山の砲臺あり。海口の前面には一島横はり、饅頭山・雞頭山以下の諸砲臺相聯絡して峙つ。其右側海角に、黄金山の砲臺あり。更に海口の北方陸上に於て、椅子山の三砲臺相擁して立ち、松樹山・二龍山・雞冠山の諸砲臺を聯絡し、主として海口背面の防備に充つ。大小總て二十有餘の砲臺、首尾脈絡相貫通して、以て海口の全體と防備せり。兵營・操塲・武庫・船渠、何れも規模雄大、築造堅牢にして、軌道開通し、電燈相照らし、凡防備の利器斬新奇巧、整然として一缺點を見ず。海岸砲・野砲・山砲、亦皆然り。海口一帶の建設物を概算するも、三億圓を下らず。若し其れ全體の價値を積算すれば、六七億圓の巨額に達すと云。其雄偉の狀以て想ふべし。
- 次で又叙せざる可らざるものは、我軍の配備なり。第二軍司令官大山大將は、幕僚を率ひ、拂曉より水師營北方高地中、第一師團と混成旅團との中間に在りて全軍を指揮したり。師團は先づ

椅子山の
攻撃

全野砲を水師營の西北に亘る高地に進め、崎嶇峻阪、道なきに道を作り、轆轤々砲車を此に驅り、拂曉を待ちて砲撃を始めしむ。其陣地は、頗る懸絶するを以て、歩兵第二聯隊をして之を掩護せしめ、且つ進路の困難を慮り、豫め工兵を附して其布列を助けしむ。西少將は、歩兵第三聯隊及び、第二聯隊の一大隊、騎兵一小隊、山砲一大隊、工兵一縦列、衛生隊半部より成る攻撃隊を率ゐ、遠く西方を迂回して砲臺の側背に肉薄し、山地師團長は、師團の殘餘諸隊を引率して、攻撃隊の後方に續行す。此迂回たるや、殆ど半島の西方海岸に沿ひて數里の長途たり。月明に風寒し。天明の比ひ、既に各陣地に達し、椅子山砲臺の臺下に迫れり。東方漸く白むの頃、天はじめて霽れ風亦竭む。夜は全く明けたり。既に整備したる砲兵陣地より、最初の砲撃を放てり。恰も是れ敵兵の曉眠を覺破すべき警報の如く、相次で砲撃猛然として、天地も爲めに碎けんどす。此時に方り、西少將の引率せし歩兵第三聯隊の、先頭は忽焉として椅子山最西方砲臺の側背に現はれぬ。旭日正に微光を東天に揚げ、一碧青空爽氣人を襲ふ。山砲は次で椅子山の西に放列を布きぬ。攻城砲野砲・山砲・合せて四十門、一齊に打出す砲聲は、宛から千雷萬雷の一時に墮落し來るが如く、天は轟き、地は撼き凄まじかりし有様ありき。かゝりしかば、椅子山の三砲臺は、暫時にして碎かれぬ。然れども前面なる松樹山の砲臺は、氣脈相通じて盛に我陣列を砲撃し、海岸な

松樹山
砲臺の
向我

第三聯隊
の突貫

三砲臺全
く陥落

る黄金山の砲臺も、亦遙に其巨砲を回轉して我に向ふ。彼我の砲戰は方に酣なり。此時敵彈の我陣地に來るもの、多くは着發せず、之に反して我の砲丸は、一飛爆然空中に破裂し、彈片飛散して、百千萬の煙火を一度に放つに異ならず。斯の如くにして、彼我連發間斷なく、椅子山の砲撃は何時ともなしに歇みぬ。此瞬間に於て、呐喊の聲は四方に沸き、砲聲と和して山岳を動かし來る。是れ第三聯隊が急進して砲臺に發登するなり。一齊射撃、暫時にして息めば一號令は起り、進め、進め、中隊、の聲諸共に銃劍を揮て突貫、又突貫して土壘に上る。其勇敢猛烈の狀寫すに筆なし。是我日本男兒の特得、斯くして椅子山の三砲臺は、殆ど同時に陥落したり。其全く我手に落ちしは正に午前八時過ぎなり。

元來この三砲臺は、他の海岸砲臺に對して、陸上防備に充て以て旅順の背面防禦に備ふるものあり。其最東端の砲臺は、椅子山の絶頂に築造せられ、其上に立ちて、松樹山以下の諸砲臺は、悉く其側背を下瞰すべし。凡砲臺に在ては其側背を窺はるゝより苦痛なるはなし。側背一たび窺はるゝ之を個人に覺れば、其肺肝と看破せらるゝが如し。我軍の作戰大計、亦蓋し此に視るところあり、専ら重きを此砲臺に置き、攻撃隊の主力を擧げて、之に傾注せしめたり。而して之に一言すべし、第三聯隊が此の名譽ある地位に立ちし、前後の關係なり。曩日大連灣の役、第一

山地師團
長乃木少
將大寺
謀長

丸井少佐

四少將

聯隊は和尙島砲臺に向ひ、第二聯隊は、老龍山及び、黄山砲臺に向ひ、第十五聯隊は、徐家山に向ひ、各々特異の功績を収めたりしが、獨り第三聯隊のみは、當時旅順街道に於て、警備に任じたり。是に至て特に之を抽て全局の成敗を制すべき、此樞要なる椅子山砲臺の攻撃に當らしめたり。是に於てか、第一師團の各聯隊は、均しく戦功を立つることを得たるなり。初め第三聯隊の椅子山側背に突出するや、木村少佐は其先頭に將とし、攻撃甚だ力む。時に山地師團長・乃木少將及び、大寺參謀長等、椅子山西北の高山に登り、戦狀を視察し、戦方に耐なるや、松樹・黄金等の諸砲臺皆砲口を此地に集め、殊に黄金山の敵、我諸將の觀戦を知るや、頻りに此山上に向て砲發し、轟然爆然、我足下に着發して、土石爲めに飛ぶ。諸將泰然此を一微笑に附す。椅子山已に動くや、我兵呐喊、争て砲臺に迫る。就中第一大隊長丸井少佐は、前日雙臺溝の敗を怒るや、先頭第一を以て之を陷る。此時臺中萬歳の聲起る、師團長以下諸將又山上より之に和し、壯快絶快眞に此瞬間に在り。此大隊のうち、藤村少尉は即死し、高島中尉は負傷し、下士以下に數十名の死傷を出せり。敵も亦重きを此砲臺に置き、防戦至らざる所なかりしも、勇敢なる第三聯隊は、彈丸雨飛の間に出入し、戦死の屍を踏み、猛進遂に之を陥れたり。此陷落實に旅順の陷落を促したり。此日自ら兵を指揮して、椅子山を攻略したる、西少將に歌あり。曰く「海山も崩るゝ音や、唐

國の、無二のまもりを、我がものにして』と。その得意想ふべし。

是より先き、師團長の山砲陣地に進むに當り、乃木少將をして其東南麓なる教軍操練場を襲はしむ。椅子山砲臺を砲撃すること、正に酬にして、師團本隊は、漸く山砲陣地を去り、將に椅子山に移らんとし、馬を中間の谿谷に進むるや、銃砲連發、西南方家屯附近に起るを聞く。西南方には、會て我軍の向ひしものあらず、師團長以下疑訝安んせず、去て之に赴かんか、攻撃耐なる重險を奈何せん。若し西南方の銃聲を顧みざらんか、不虞の警を奈何せん。師團長、乃ち本隊に附隨せし、工兵一小隊を派して、之に赴かしむ。未だ幾ならざるに、椅子山の重險は我手に落ちぬ。而して方家屯附近の銃砲聲ハ、倍々熾に、山岳爲めに震動せり。乃ち傳騎を馳せて之を見せしむれば、乃木少將の第一聯隊なり、今や西方の血路を開て逃れんとする敵兵と會し、邀て之と戦ひつゝありしなり。敵兵は、無慮一千有餘、最後の勇を奮て、我に應戦したり。饅頭山の海岸砲臺は、巨礮を放ちて敵兵を援助し、其勢頗る猖獗なり。乃木少將は、陣頭に立ちて部下を指揮し、突撃して之を却け、北ぐるを追うて鴉戸嘴の方向に進む。時に旅順海上にありし我艦隊は、艦首を回らして西海岸に轉じ、海上より遙かに敵の退路を砲撃するに會す。敵兵狼狽爲す所を知らず、半島の絶端なる老鐵山砲臺の方面に向て逃路を一轉したり。此戦や、劇戦僅に二十分間、敵の死

第一聯隊
饅頭山砲
臺

旅順海上
の我艦隊

老鐵山砲
臺

左翼縦隊の活動

傷數を知らず。是に至て椅子山砲臺及び、方家屯附近の砲聲は、全く熄みぬ。我野砲兵は、更に進で我側面を瞰下せし、松樹山の砲臺を砲撃すべき、適當の位置に陣地を擇べり。されば、第二の我砲臺は、松樹山の兩砲臺より始められたり。椅子山砲臺の、已に陥るや、以下の諸砲臺は、固より將に戦はざるに潰えんとす。而して我熟練なる砲兵の射撃は、着々として虛丸なく、曳火彈丸數發は、確に兩砲臺上に命中し、兩砲臺は、我歩兵の突撃を待たずして忽ちに我手に歸したり。翻つて我左翼縦隊の活動を見るに、此日午前第一時、福家庄の陣地を發し、枚を啣みて旅順の東北面に迫る。前衛は、花岡少佐之が司令官となり、斥候を放て敵を搜索し、其進むこと甚だ遅々たり。一軍は煙草を禁せられ、高聲を戒めらる。蓋し其夜敵壘よりは、電燈を照して、普く我兵の進行を視察したり。日出で、より四面暴露、敵も亦警戒を怠る。遂に一高山の麓に至り、軍を潜む。我騎兵隊は、本隊に附屬して益満中佐の指揮を受け、同じく此山麓に留まる。前衛司令官、花岡少佐先づ歩兵一大隊を率ひ、進で野頭に出で、天明を待つ。而して此山麓に潜む者は、歩兵一大隊・砲兵一中隊・工兵一中隊、騎兵一小隊及び、衛生隊の半部と、小行李なり。而して右翼縦隊の長谷川旅團長は、二十日の午後十時、趙家屯の宿營を發し、歩兵第二十四聯隊第三大隊の露營地なる、幡龍山附近の村落に達し、天明を待つ。其第一大隊は、豫備隊として旅團長の指

右翼縦隊

二龍山砲臺

揮下に屬せり。既にして月色漸く薄くして、東天稍白し。正に是れ午前第六時頃なり。轟然一發砲聲響き、我攻城廠に向て敵彈は飛び來る。第一師團砲兵第一聯隊は、直に之に應戰して、天地は砲聲の裏に埋められたり。此攻城廠と、本縦隊との距離は、稍遠くして砲丸の飛來する由もなし。初めは餘所の戰爭として見物せしに、今や忽ち我頭上に向て爆發を始めたり。此時既に第一師團兵は、最西砲臺椅子山を乗つ取たり。同時に、又我混成旅團も、運動を始め、茲に此砲臺を受けしなり。時に午前八時二十分なり。右翼縦隊は、歩兵第三大隊を以て、先頭となし、安田歩兵少佐之を率ひ、次に第一大隊の二個中隊を出し、中村歩兵少佐之に將とし、其一中隊は、豫備兵として、長谷川旅團長の下に附屬せしめ、更に其餘の一中隊を出して、前兵に加はらしめたり。此時や、敵の砲聲最も甚し。各兵色稍々沮む。長谷川旅團長勵聲して曰く、九州男兒、物に畏るる勿れ、こゝぞ、乃ち君國の爲めなりと。衆争て奮進し、其勢宛ながら猛獅の荒れたるが如く、又豪猪の勇むに似たり。其機械砲射擊圈内を超えて、遠く前進するや、敵彈に斃る者、前後相繼げり。砲臺は、西より東に向て蜿蜒連亘其堅固なること、鐵壁も管ならず、最西なるは椅子山、次は松樹山、次は二龍山、二龍山は、實に混成旅團の、命を帯びて攻撃する所なり。之に續て東に亘るものは尙幾個なるを知らず、正面より見得る限りは、七八個なり。堡壘の下平野開豁、稍高低

窪地ありと雖も、概して砲臺よりは、瞰射の地位に立てり。其形勢の當り難き、聞く所に勝る十倍、況んや十五珊「クルップ」海岸砲及び、速射砲等、敵の防備至れるをや。我歩兵の之に向て進ひは、自ら死地に赴くものなり。其中央最高峰と、敵の號令臺とも覺え、三個の大旗を建て、指揮命令せり。更に砲臺下に建る胸壁も亦堅固にして、彼の萬里の長城も、斯くやと思ふ計りなり。時しも午前十時頃、益滿聯隊長は、戰場より潜伏地に來り、急に進撃命令を傳ふ。一軍肅々として聲なく、衛生隊は急に假紉帶所を設け、擔架卒は、負傷者救護の用意をなす。此時各兵は背囊を結び輕進に便にす。益滿聯隊長は從卒を呼び、握飯を包み、自ら之を負ひ、山を左に繞りて、今や愈々戰團線に入れり。此大隊を率ひしは、即ち島野歩兵少佐とす。山の右方は、花岡少佐の大隊、是も同時に進撃を始めたり。獨り騎兵隊は、衛生隊及び、小行李の掩護として此山麓に留り、砲兵一中隊も、工兵一中隊も、亦同時に開進したり。只見る兵は大野に撒開して、恰も蜘蛛の兒を散すが如く、窪地に就ては休息し、又走りては敵壘に迫る。是に至るも、我兵は未だ嘗て小銃の一發だに放たざるなり。而して敵壘より來る砲彈は、宛然雨の如く、敵の如く、大なるの雷に似、小なるは鳥の飛ぶに似たり。爆然地に落ちて轟發すれば、方二十間の處は、土砂を揚ぐ。其物凄き有様、譬へんに言なければ、兵は一步として後には引かず、愈々奮進して敵壘に

各道併進
二龍山に
向ふ

長谷川旅
團長

迫る。各道併進今や二龍山に向ふと雖も、松樹山側面の攻撃急にして戰漸く不利なり。是に於て二個大隊を以て、先づ松樹山に迫る。此砲臺は本と是れ第一師團と協力以て之を攻撃すべき約なりしも、事此に至て、復た奈何ともすべからず。遂に殆ど此混成旅團の獨力以て之に當らざるべからざるの勢となりぬ。此時攻城隊は、位置を轉するの時なりしも、我歩兵の急を見るや、急に松樹山に發砲して、我を掩護したり。其餘の三個大隊は、真正面より二龍山に馳せ向ひ、奮前又突進せしも、今度は東側の敵壘より猛撃せられて、不便甚し。已むを得ずして又更に一個大隊を割て、之に當らしめたるも、尙其東砲臺の勢力逞しく、是に至て我歩兵の苦戦は、苦戦中の苦戦となり、更に兵を分て、又之に當り、遂に我五個大隊を以て敵の四個砲臺に迫るの勢とはなれり。其距離凡我一里、乃ち四千米突許の平地を直前し、岷々たる堅壘に向て仰ぎ攻む。誰か之れを易々の業と謂はん、然るに、今や敵壘を望めば、敵の歩兵は急に外廓に出で、我本部を逆撃せんする勢なり。重見參謀之を憂ひて、施すべきの良策なく、只豫備隊として、旅團長の下、僅かに一中隊の歩兵あるのみ。長谷川旅團長、悠々然として曰く、勢ひ若し不可ならば、吾惟敵の俘たらんのみと、更に動せず。

既にして、各兵は次第に敵壘に近き、一千米突許の距離に達するや、爰に始めて小銃を發して應

二龍山外廓の地雷火の爆發

戦し、且つ射且つ進み、或は小銃は一發だも發せず、背囊を野に棄て、一直線に敵壘目懸けて迫るもあり、或は七間餘の長梯子を肩にして、急に前兵を送るもあり、或は擔架を運びて、負傷者を拾ふもあり、衛生隊は、腕に綱帶木綿を結び、砲彈の間を潜りて進み、負傷者を保護する等、滿野は宛ながら蜂房の破裂せるが如く、頗る混擾を極む。今や我兵は敵壘近く肉薄せり。吶喊の聲は早や、山を揺かしぬ。二龍山砲臺は、其位置の良好なると、第一砲臺の敗兵加はりしとに因り、我兵の進撃一層困難となれり。然れども退生を辱とする皇國男兒、吶喊、又吶喊聲裏に、斯る堅固の二龍山も、遂には我手に抜かれたり。敵は狼狽云はん方なく、自ら松樹山の砲臺を燒きて逃る。此時や白煙天に漲り、四邊晦昧たるもの、再び、又二龍山外廓の下にては、五個の地雷火爆發し、二十四聯隊の長屋第一大隊長は、之が爲めに土石を被りしも、幸に負傷せず。兵士も亦一人として其禍に罹らず。二龍山砲臺の既に陥るや、第四第五の砲臺も、同じく我兵の侵入する所となり、敵は餘儀なく東方指して北げにけり。是に於て、我騎兵隊は、轡を揃へて砲臺に向ふ。途に一將校の敵彈に斃るゝを見る、何ぞ料らん是ぞ即ち我前衛司令官花岡少佐ならんとは。松永副官自ら綱帶を取て巻く、流血迸り出て、副官を染めて滿身紅なり、少佐の傷甚だ重く丸痕尤も大なり。少佐は神色自若たりと雖も、傷は右臂より左に打貫かれ、中甚だ痛に堪へざるもの如

花岡少佐の重傷

萬歳と御目出度

し、急に衛生隊を壓さ、四兵をして之を擔架せしめ、野戰病院に送る。敵は最東の砲臺より、海岸に下り、隊を成して北ぐ。而して砲臺は、全く我兵の手に落ちたり。斯て騎兵隊の至るや、恰も好し。天皇陛下萬歳三唱の時に際會したり。相共に之に和し、覺えず身をば躍らせたり。會する者、知るも知らぬも、皆互に會釋して(御目出度)と云ふ。猶は新年の慶賀の如し。歩兵は濁して或は水筒を傾け、或は衣を緩めて汗を拭ふもあり。其勇悍只感嘆の外なし。各將校石に踞して曰く、今日の進撃、殆ど機動演習の如し、只復舊の號令なきを異りとするのみ。以て第六師團の勇猛を知ると。蓋し機動演習に際し、猛進の極、此號令あるなり。此日外國將校、則ち英・露等の公使館附武官及び、外國新聞記者等、七八名は軍司令官に近く附隨して傍觀せしが、我兵奮戰勇闘、戰友死するも、其屍を乗り超えて敵壘に迫るの状を見るに及び、驚嘆して曰く、強勇士内無比なりと。砲兵大隊は、初め此日午前五時十分土城子より、旅順に通ずる大街道の東方高地に砲列を布き、以て敵の本道上に顯はるゝを待てり。而して九時四十分、更に前進して二龍山の砲臺に向て砲撃し、尙前進して敵の砲臺を距る僅に一千四百米突の地に進み、二龍山東方第三番目なる砲臺に向て、砲撃するを認めたり。砲丸は皆敵壘の頂上に於て砲裂し、恰も我打揚花火の如し。然れども、敵の「グループ」砲撃に比しては、砲力大に劣れり。彼の攻城廠の如き、此方

大山司令官
山地師團長

面に向ては、比較的其射撃の少きを覺えたり。此の砲兵大隊の長を石井少佐と爲す。少佐頗る此混成旅團の攻撃を援助したるものなり。此戦は正午頃に至り全く熄み而して我軍下士以下死傷七十餘名に及べり。二龍山は、椅子山を距る凡一千百米突許、二龍山の陥るや、局部猶敗兵を射撃せる銃砲の聲裏に、大山司令官は幕僚を率ひ、松樹山西麓を疾驅し、椅子山東方に在る殺軍操練場に進み、附近の諸將を會し、樂隊をして君が代を奏せしむ。次で日本帝國萬歳の聲は、天地に振盪したり。山地師團長も椅子山に在りて、遙に其銃鎗閃々突撃占領の狀を望み、一同踴躍萬歳と連呼したりと云ふ。

黄金山砲臺

斯くの如くにして、旅順陸上各方面の砲臺は、僅かに午前の中六時間内外にして悉く我手に落ちたり。されば、午後の時間は、進で海岸諸砲臺の攻撃に費さるべからず。海岸砲臺中、最も妨害を我に與へたるものは、黄金山なりとす。此砲臺は、觀望最も自在の地に立てるを以て、我の椅子山・松樹山砲臺を攻撃するに際し、盛に援助を敵兵に與へしのみならず、又遠距離を延長して、我砲兵の陣地をも砲撃し、其上に設備したる大口徑の海岸砲は、三百六十度の回轉を以て四方を自在に砲撃すべし。故に海岸砲臺を陥れんには、先づ黄金山より始めざるべからず。而して午前の劇戦に稍餘銳を蓄ふる者は獨り、砲兵掩護の任務を以て、其後方に留まりし第二聯隊あるの

野砲兵の功

二十有餘の砲臺我に歸す

み。師團長も、乃ち諸隊に擡て此隊を遣はし、急行黄金山に向はしむ。斯て第二聯隊は伊瀬知聯隊長指揮の下に、先づ旅順の市街地に入り、各戸に潜伏せし敵兵を搜索して、之を屠り、進で黄金山を占領せしむ、時は午後五時過ぎ也。我野砲兵は曉來莫大なる戦功を奏し、殆ど休養の瞬間を有せず。險坂峻路を踏破せしに拘らず、黄金山砲臺砲撃の命に接するや、急進砲車を駕し、旅順東北の高地に陣地を布き、第二聯隊の攻撃を助くるに至れり。其精銳と熟練とは、軍中の驚嘆する所となれり。蓋し我軍砲器、砲術上の進歩は、實に歐米各國を凌駕するものあるは、軍人社會の噴々する所、今に於て、始めて其自負にあらざるを知るなり。海岸の第一砲臺、既に陥る。殘す所は黄金山の東西兩方面に當る數個の砲臺あるのみ。然れども、時既に日暮に會するのみならず。敵は往々潰走せしを以て、攻撃を中止せり。翌二十二日拂曉我が攻撃隊の此砲臺に向ひし頃は、既に敵の隻影を留めず。是に至て旅順半島に碁布對峙せる大小二十有餘の諸砲臺は、僅かに一日の攻撃を以て、悉く我帝國威武の下に歸したり。是れ偏に天祐を享け給ひし我大元帥大皇帝陛下の稜威に因ると雖も、亦我出征將校士卒の忠勇絶倫を稱せざるべからざるなり。此戦に當て、我が野砲及び攻城砲の効力亦多し。故に今其一節の特記なかるべからず。野砲は、二大隊、即ち四中隊砲二十門より成る、其第一大隊は、永嶺少佐、其第二大隊は、松永少佐之に

長たり。二十一日拂曉、第三聯隊行進の後方に於て、放列を布かんとせしに、地は一面の平野にして、更に掩蔽物なく、極めて不利の位置たりしかば、乃ち工兵に肩牆を結構せしめ、第二中隊より、順次左方に砲列を布き、午前六時半、工兵の成功と同時に、椅子山に向て先づ一發を放ちたり。敵は直に之に應じて猛射を行ふに、能く地理及び、距離に熟するを以て、其狙ひ誤らず、常に我陣地の近傍に着弾し、殊に藤室大尉の引率せる第四中隊へは、各砲臺の砲口を集められ、第一小隊長田村中尉と、第二小隊長菱田少尉との間に、一彈着發し危険云ふ許りなりしも、幸に人に中らずして、只馬を傷けたりしのみ。我軍倍々奮闘猛撃、永嶺・松本の兩隊長は勿論、各將校共悉く砲術の達人なれば、我彈着は、着々命中し、恰も敵壘の頭上に轟爆の花をば咲せたり。斯て敵の慌擾する所を見濟し、我歩兵は機に乗じて突撃呐喊、第一壘先づ陥り、次て第二第三西壘破れ、敵の遁逃相繼げり。是に於て我は更に陣地を進めて、第一第二の中隊は、前面の高地に砲列を移し、更に左方の諸砲臺に向ひ、第三第四の中隊は、右方に移りて陣地を占め、敗走の敵を砲撃せり。此時黄金山の砲臺を始め、各海岸の敵壘より、甚しき砲撃を被りしも、尙は援助の力をば、歩兵に貸したり。歩兵は此援護に由り、力を伸ぶることを得たり。此野砲隊は、先頃先づ金州城攻の時其効力を確め、今又茲に於て特異の功を收めたり。而して攻城廠は、同じく六時半野

長嶺松本
兩隊長

攻城砲

砲と共に發射を試み、其十五珊の巨彈は、先づ敵腹を寒からしめたり。其砲聲轟々、迅雷の如く、空を掠め去り、既に臺上に至るや、般々として爆發し、焔煙敵壘を包裹し、敵をして耳聾し目眩せしむるを致せり。此攻城砲なるものは、今回經驗の初め、曾て久しく其効力は疑似の中に徨たりしものなり。夫の金州陥るの後、旅順攻撃迄に日數を費したるは、一は諸偵察の爲めなりと雖も、一は此の攻城砲の到着を待ちしなり。而して攻城砲の大連灣に着し、旅順に向ふや、道路悪しき爲め、運搬に非常の困難を極め、之をして豫定の攻撃に參與せしめんが爲め、該隊徹夜行進する二夜、叱咤督促の爲め、該隊將校は、悉く、聲音を枯らせりといふ。而して、此の實驗によりて曰大なる彼れが砲體は、運搬に不容易なること及び、從て射距離の延長に不自由なる事を感じしめ、隨て其効用に幾分の遺憾を覺せしめたりと云ふ。

是より先き、我海軍は敵を威海衛に誘うて彼れ出です。滿艦の壯士憾を吞で、空しく大連灣に歸航したりしは、月の十八日なり。翌けて十九日、此鬱懷を排すべき命令は下れり。白く旅順攻撃の我陸軍に援助すべしと、是なり。旅順は東洋無比の要港、水雷は布かれたり、砲臺も堅固なり、殊に、又外人も其中にありと聞く。定めて是れ一與ならんと、乃ち命令書を一閱讀下すれば、曰く。

海軍への
命令

一 十一月十九日午後、八重山は本地を發し、二十日午前威海衛沖に至り、敵情を偵察し、同日午後三時頃、同地を發し、二十一日午前五時より、六時の間に於て本隊に合し、之を報する事。但本隊は二十一日午前六時頃、旅順沖に至るべし。

二 十一月二十一日午前一時、本隊第一遊撃隊・第二遊撃隊及、筑紫・大島・鳥海・赤城は順次本地を發し、左の隊列を以て旅順沖に至り、陸軍に應援をなす事、

本隊・第一遊撃隊・第二遊撃隊・第四遊撃隊

三 筑紫・大島・鳥海・赤城は、小濱島沖に至れば、本隊を放れ、陸岸に沿うて進み、(午前五時頃)適宜の距離に至れば、左翼砲臺、即ち老蠟・北山・兩嘴地砲臺を砲撃。

但砲撃の目的たるや、該砲臺旋回砲臺なる故、背面に散在する我陸兵を砲撃するの恐あるを以て、海面より之を牽制砲撃せん爲めなり。砲撃の時、恰も陸兵水師營附近に散在するを以て、砲撃は西方に向てするを要す。

四 右砲臺を占領したるときは、陸軍は直に日章旗を該砲臺に建る筈に付、之を認めたる時は即時砲撃を止め、而して筑紫は、小蒸氣船を陸岸に遣はし、陸軍に連絡を通ずる事。

五 第一水雷艇・第三水雷艇及、山城丸は二十日本地を發し、小濱島附近に至りて、二十一日午

前六時本隊に合する事。

六 第三遊撃隊及、摩耶・天城・近江及第二水雷艇は、本地に留まる事。

十一月十九日

伊東聯合艦隊司令長官

我艦隊の戦略は、斯の如く定まれり。然るに、翌二十日午後二時に至り、吉野・高千穂の兩艦は、急に旅順に向て駛行せざるべからざるの必要は起りたり。是れ昨夜急に敵の砲撃止み、且つ旅順口より汽船の出づるを認めたるにより、之を探知せんが爲めなり。既にして兩艦は動きぬ、煙霧模糊の陸岸を、右舷に眺めつゝ、時々山上に砲火の爆發し、砲聲の轟くを聞く。其旅順に着せし頃は、既に黄昏なり、而して港口別に異狀なし。日暮れ、夜色暗澹たるに至り、敵は絶えず電氣燈を以て、港外を照し、警戒をさくゝ怠りなし。兩艦は其夜沖合に在り。大連灣の我艦は、準備既に整ふ上は、今や只々出發の片時も早かれと祈るのみ。願れば滿艦の兵氣は、凜として刷新す。二十一日午前一時耳を劈く一聲の喇叭に、我艦は奮然と起てば、曉風は肌を刺して寒く、北斗の光は燦として中天に輝けり。「ホエスル」の音は、激しく號令の聲は厲なり、機軸たる滑車の響につれて、艦は既に歩武を進む。正に是れ悲壯數聲動、壯士慘不驕の概あり。見渡せば、四艦隊二十有餘隻、隊伍肅々白波を蹴る。天未だ明けず、時針正に六時を指すの頃、本隊及び遊撃隊は、一

旅順攻撃
の光景
前夜海上

艦隊發砲

列に開きて、旅順の港を掩ふ。吉野・高千穂の兩艦亦來り會す。砲門開けて將士各々配置に就く。此時や、朝暉^{あさひ}の光を洩らし、淡雲^{たんぐん}連山を罩^こむる所、陸上の砲聲最も烈しく、砲火盛に閃々として電雷の如し。想見る我山地獨眼龍將軍、叱咤^{しつか}激厲、陣頭に躍るの下、乃木・長谷川・西の虎賁^{こひ}諸將、颯然^{さつぜん}奮進三軍風の如く捲て、山岳爲めに震撼^{しんかん}するの機頭ならん。日暖かに、風噪^{かぜ}がさるも、陣氛^{じんぷん}天を掩うて大空曠々たり。我筑紫・赤城・鳥海・大島四艦深く入て陸岸を摩せん。老嫗^{らうにん}嘴^{くちばし}・牧猪^{ぼくぢう}の兩砲臺、震雷烈火を噴て來るの時、我艦既に數發を放つ。我艦隊は、又陸兵と違ひ、砲とし云へば二十一砲乃至二十四砲なり。一射一發轟々として海岳も宛ながら破壊せんかと疑はれ、或は海面に落ちて水煙を立て、或は岩礁^{がんせう}に觸れて土砂と飛ばす。折柄敵は背面防禦の急切迫せしと見えて、黄金山・盤子營・饅頭山等、海岸の各砲臺は、専ら我陸兵の防禦に全力を傾注し、翻て背面に砲口を轉じ、劇戰^{げつせん}數刻、午前八時頃に至り、砲聲漸く衰ふ。是に至て艦隊は單縱陣にて、本隊及び第一・第二遊撃と續きて、東より西に港外を横ぎりしに、谷間は砲煙濃霧の如く、鏖戰^{あうせん}として一物をも辨せざりしが、山上は峰々見ゆる限りは、或は天幕を張り、或は旗を立て、敵は此所彼所に駐屯して、防禦に努むるもの如く、我陸軍の苦戰の程も、亦思ひ知られたり。午前十時半頃、北西に當りて、一株の黒煙天に柱するを見る、疑もなき敵の汽船、其航路に就て察す

敵の汽船
追はる

るに、甚だ不審の状態あり。かくと見る我第一遊撃は、直に之に馳せ向ふ、彼れ初めの程は我に向て進航し來りしが、忽ち針路を轉じて鳩灣^{きゆうわん}目懸けて逃込むを、愈々追窮せしに、彼れは小蒸氣船にて吃水淺さを利して、灣内深く潜みけり。茲に吉野の、信號にて水雷艇を呼び、彼の小汽船を引致せよ、若し命を拒まば、直に撃沈すべしと命令したり。既にして、水雷艇は之を引致し來りしに、初めは船旗も見えざりしを、今や彼は英國旗を掲げ居れり。我旗艦は、端艇^{たんてい}を卸して之を檢す。又此日朝來英艦「アーチャー」近傍に泊して、戰狀を觀察し居りしが、之を見るや、亦來り旗艦の傍に至り、端艇を卸して訪問せり。而して彼の小汽船は、證據不十分の理由を以て解放せらる。此鳩灣の方面にも、敵の背面防禦怠りなきものと見えて、山上處々に旗を立て、砲烟時々空を焦して、我陸兵と對するもの、如し。千代田は、吃水淺さを以て、灣内に深入し、陸上に向て砲撃數發の後歸り來り、艦隊と共に港外に向ふ。千代田曰く、我砲撃敵を散亂し、我陸兵、灣の左岸を占領せりと。

陸軍より
信號

既にして艦隊は再び港外を横ぎる、時に港内火煙盛に起りて火災の如し。依て我陸兵の間近に攻寄せしものと推測す。午後三時四十五分に至り、陸上より信號を以て、右側の砲臺は、我兵占領し、敵の東に向て逃走せり。左側は、我騎兵攻撃中なりとの報知あり。かくて艦隊は、港外に

敵の逃走

漂泊しありしに、突然龍頭山・蟹子營の兩砲臺より、我に向て砲撃すること十數發、彈着我に及ばずして、空しく水煙を揚げたり。我艦更に之に應せず。悠々然として之を觀望したり。蓋し誤て我陸兵を傷くるを慮るなり。四時四十五分、又信號あり。曰く、我陸軍背面防禦の一部を陥る。今明日中、海岸砲臺を攻撃すべきを以て、海軍の砲撃は止められたしと。既にして、黄昏一隻の小蒸氣船あり、旅順口より出で來り、西を指して疾走す。是れ必定敵の逃走ならんと、我は直に水雷艇及び、金剛・高雄の兩艦を出し、急に之を追ひ、且發砲したり。後信號あり、彼は果して敵、我引致の命を拒ぐ、我之を砲撃せしに、彼は急遽、船は海岸の淺瀬に乗り揚げ、人は船を棄て、遁逃せしと云ふ。此時に當て陸上砲撃復た起り、敵の抵抗容易に減退せざるもの、如し。會々日没に際し、我艦隊は遂に沖合に出づ。而して旅順を顧れば、夜色暗闇の中、炎燭天を焦すを見る。蓋し晝間の火災、未だ滅せざるなり。此夜は老鐵山角の砲臺も、點火を見ず、四方暗黒、一點の星光なく、凄然として掻き曇れる空合なり。八時頃より、北風俄に吹き起り、狂瀾怒濤は、山の如く、烈風劍の如く、艦隊動搖、架橋皆鳴る。第四遊撃水雷艦山城丸、并に水雷艇の九隻は、一時近傍に之を避け、艦隊は一旦引揚げて、翌二十二日拂曉大連灣に歸着せり。

戦の既に終れり。爰に旅順港市の形勢を叙せざるべからず。旅順の形勢は、海陸共に自然の天

旅順港の形勢

險にして、軍港としては、數十百の鐵艦を安全に港内に集合するに足り、要塞としては、一夫險に據れば、萬夫過ぐるを得ず、山は山と連り、谷は谷と接し、其山、其谷、一望展然として樹林叢焉の觀望を遮断するものあらず。衆岳圍繞の中に、海潮を通じ、水深測るべからず、港門狭き所は、數十町、天斧を假りて兩崖を削断したるが如し。海岸起伏の地を畫して、諸種の建物を建設し、石屋瓦壁相櫛比して立ち、其數、千を下らず。港市の中民屋として見るべきもの、其三分の二に充たす。他は公司にあらざれば、官廠、而して今回兩國戰爭以來、海陸の防備一層の嚴重を加へ、凡港市の民屋商家一として兵勇を留めざるものなきの跡、各戸に散乱する武器銃劔に見るも、歴々たり。萬餘の兵勇遂に港市に容るゝに足らず、山腹陰蔽間々天幕を張りて之を休養せしものに似たり。而して海陸防備の砲臺、築造堅固、形勝雄偉なりしは、既に前記の如く、之に備ふる所の大小百有餘門の礮種は、悉く歐州新式に取り、其多くは光緒の年號と、金陵機器局の銘を鑄、一見外客をして國富の度を思はしむ。船渠の規模に至りては、更に其整備に驚かざるを得ず。如何に不遜の碧眼兒をして、之を觀せしむるも、嗟嘆之を久うせざるもの幾ぞ。砲臺には既に我守備兵を配置して不虞を警戒し、船渠には、海陸兩軍の衛兵を出して出入を嚴にせり。次で宏壯を極めたるものは、兵營と操練場なり。兵營には、毅軍營あり、慶軍營あり、親軍營あり、各處に散在

旅順の兵營と操練場

敵營内に
我兵士の
死屍あり

するもの、其數五六にして足らず。其築造は、土壘高四五間、厚六七尺、嚴然たる壘壁を繞らし、概ね方形をなし、壁上四宇を連ねて、方十餘間に亘る。横門あり、天主様の檣臺あり、總て閑雅にして、畫中の趣あり。門を入れれば、長屋左右に並立し、合壁室を分つこと、譬へば我國の長屋に異ならず。正面に當り巨屋あり、磬を布き、卓を置き、寢室あり正庭あり、蓋統領の居る所なり。其長屋は、兵士の起臥する所と見ゆ。我軍椅子山の砲臺を抜き、次て一帶の諸壘を陥れ、進で山を下り、敵軍左營を襲ふや、營内既に隻影なく、偏く各室を搜索して、我兵士の屍體と、背囊銃劔數個を得たり。屍體は、鹹りて碧血已に凝結せり。腹背數ヶ所を屠りて、殊亦推裏に投棄したり。而して其背囊と、銃劔とは、之を分捕品として装置せり。蓋し去る十八日の會戦に、獲來りしものか、其他各營に於て我騎兵の騎馬及び、戎器を發見せしもの尠からず。此恨已に骨髓に徹せり。報復踵を回さずして至る、亦快ならずや。而して各室散せる所の器具中、賭博具、婦人の寫眞、若くは衣服等、概ね之なきはなし。其素養も、亦以て知るべきのみ。操練場は、廣大、敵軍左營の下にあるものを推す。號して敵軍操場と云ふ。場長方形にして、長十餘町に亘る。又繞らすに土壘を以てす。然れども、甚だ短なり、馬を躍らして超越すべし。而して場内には、他の障害物なく、大地を築て坦々平板の如くす。廣潤優に我一師團の兵を容るべし。二十一日、我第二聯隊の

旅順市街
の搜索

敵の總數

首として市街地に入るや、時正に薄暮に會するに拘はらず、黄金山の砲臺を陥れんが爲めに、伊瀬地聯隊長の指揮の下に急行して同地向へり。山は旅順市の前面に峙つ故に、此砲臺に迫らんには、必らず市街地を通過せざるべからず、聯隊の市街地に入るや、第一大隊、先づ過ぎ、次で第二大隊の行進に會す。偶々側邊の家屋内より發銃するものあり。兵卒稍逡巡す。茲に忽ち家屋の搜索は起れり。各戸の戸壁は破壊せられぬ。兵士は闖入して、搜索至らざる所なし。壁蔭室隅、各戸概ね敵兵あり。依て我兵は、獲るに隨て之を斬斫したり。敵兵の逃ぐるに巧ざる、戰鬥利あらざるを見れば、直に軍服を脱して常服を着け、庶民に扮して知らざる爲すること其常なり。是に於て兵民の區別明ならざるものあり。然れども、之が爲めに、若し彼等に寸時を假さば、直に却て彼に乗せらる。故に略兵勇と思はる者、我は已むなく之を屠戮せざるべからず、從軍の外人等、事を詳にせず。誤り傳へて、旅順口の塵殺と爲し、ものこれなり。旅順の守備に任せし敵の總數は、實に一萬四千百人にして、内親慶軍八營四千人・桂字軍四營二千人・和字軍三營一千五百人・成字軍五營二千五百人・營務處即道臺兵一營五百人(此外に向若干の騎兵あれども、其數未詳)、之に金州の敗兵なる懷字軍六營一千八百人・拱衛營一千二百人・同騎兵一營二百人・銘字軍六哨四百人を合して、各所の配備に充てたり。而して親慶軍の、海面の

敵の死者
及俘虜

防禦に當り、黃仕林・張光前の指揮に屬し、各四營宛東西南岸の諸砲臺を守備し、桂字軍は、姜桂題の指揮に屬し、背後堡壘線の東半部、即ち旅順金州本街道以東の線を守備し、和字軍は、程允和之を督し、背後堡壘線の西半部、即ち旅順金州本街道以西の線及び、東方の二部に當り、成字軍は、衛汝成之を督し、白玉山東北下狹隘の入口を守備せり。敵の死者は、無慮四千人にして、捕虜は三百五十人、而して死者の多くは、斬殺にあらざれば、銃殺なり。斯くの如く多數の死者を出ししは、日清開戦以來、未だ嘗て無き所、要するに我兵の追窮甚だ嚴にして、苟も降るにあらざれば、必ずや之を殺せしを以てあり。歩兵第二聯隊第二大隊第六中隊のみにて、其隊長莊司大尉の調査に據れば、我兵一人にして十名以上の敵を斬殺せし者、十一人あり。即ち一等卒佐久間覺次郎(斬二十)・上等兵山口嘉作(二十)・一等卒安西定七(十七)・上等兵小松澤進(十五)・一等卒高木種次郎(十四)・上等兵中村彦八(十三)・二等卒池谷幾藏(十三)・二等卒伊東三平(十三)・一等卒渡邊龜吉(十二)・二等卒大木清五郎(十)・一等卒細田徳四郎(十)・是なり。此例を以て推すとせば、他の各隊とも、尙此類多かるべし。又捕虜の中に、一英人あり。其名を「ハート」と云ふ。自ら「ルートル」新聞記者と稱す。我軍司令部は、之に諭して曰く、汝の證明顯著せば、去就は汝の意に一任すべし。留て従軍せんと欲せば、外國新聞記者たるの待遇を與へん、若し去て他國に行かんか、是亦

我兵一人
にして敵
数を殺せし

捕虜中の
一英人

此役の戦
利品

可なり。然れども、汝は我軍作戦の初計を知る者なるに因り、此計策を完うするの日にあらずば、我國より去らしむる能はずと。既にして「ルートル」に電照すれば、彼れは全く詐言を吐けり。依て遂に我軍に拘禁すと云ふ。其他敵の降れるものは、多く許して之を寛典に處せり。而して我戦利品は、實に莫大にして、一言之を掩へば、軍に旅順口なりと云ふに外なし。殊に其砲臺は、最大最要の獲得と云はざるべからず。各臺總砲数は平時に在ては七十六門あれども、今回我手に落ちしものは百數十門。其他旅順港内に繋ぎある小汽船六隻及び、各官衙・兵器製造所・船渠等、悉く我有に歸せり。尙軍銃小銃、并に雜品は實に無數なりと云ふ。

此役に於て、我軍の死傷者、各所通計二百八十三人にして、内將校に死者二名・負傷者十三名・下士以下死者三十六名・負傷者は二百三十二名なり。今我將校の死傷者姓名を擧ぐれば、即ち左の如し。

陸軍歩兵中尉 中 萬 徳 次

同 藤 村 平 三

以上戦死

陸軍歩兵少佐 花 岡 正 貞 (前日死去)

同負傷者

我將校の
戦死者

- 同 大尉 沼田 尙庸
- 同 同 別 役 良 顯
- 同 同 松 下 綱 業 (即夜死去)
- 同 同 中 野 能 介
- 同 同 肥 後 正 奇
- 同 同 豊 崎 信
- 同 同 里 原 祐 吉
- 陸軍騎兵大尉 淺 川 敏 靖
- 陸軍歩兵中尉 松 浦 靖
- 同 同 市 島 友 武
- 同 同 平 岡 八 郎
- 陸軍歩兵少尉 早 川 新 太 郎

以上負傷

前頭中、中萬中尉は、十八日の奮戦に斃る、其屍體は、一旦敵の爲めに奪はれしが、我軍の進で救

中萬中尉の首

花岡少佐の遺言

可兒大尉の憤死

赤司大尉の奮進の雄戦

大庭軍曹の雄戦
猛卒浦上直次郎
同松崎澄次郎

軍左營に入るや、偶々其首を統領の居室なる一架上に見る。敵は頗る之を珍重したりと見ゆて、其下には酒器散乱、一祝宴を開きたるの跡歴然たり。其他大尉の携帶品は、概ね架上に排列せり。我兵之を得て、驚喜措く所を知らず。直ちに之を擁して、第三聯隊長に献す。後厚く之を葬る。又花岡少佐も負傷、入院の翌日遂に逝く。其將に逝かんとするや、隊長益満中佐之を見て、遺言を問ふ。少佐曰く、砲臺既に陥る、余更に遺憾なし、只願はくは、老母の健在と、子女の教育の十分ならんことをと。言畢て瞑す。可兒大尉は、第二十四聯隊附の中隊長たり、其二龍山に向ふや、砲臺の陥落最早眼前に迫る、中隊長會々病苦再發、任に堪へず、去て療養に就く。既にして二龍山果して陥る、中隊長聞て、憤恨自ら禁せず、後(同月二日)二龍山に登りて自殺す。遺書あり曰く、『此所まで前進、病氣の爲め停止、敵の砲臺は既に陥落するを以て安意、一時休憩せしは生涯の誤り、後日の名譽を回復する爲め、一書を留む』と。烈丈夫と謂ふべし。而して戦争の當日、二十四聯隊(混成旅團中)の右翼隊(混成旅團中)攻撃甚だ力め、苦戦尤も多し。赤司中尉は、呐喊急進の際を以て、自ら士卒に先んじ、先登第一を以て砲臺に突入し、大庭軍曹は股間に丸せられ、流血淋漓、尙敵壘に入て奮闘し、殆ど傷を知らざるもの、如し。隊下二猛卒あり曰浦上直次郎・曰松崎澄次郎、澄次郎時に一腕銃傷を受け、自ら綱帶を施し、敵壘に進み、曰く後れたり。悔恨之を欠らす。直次郎も亦同じく

長谷川混成旅團の奮闘

一腕貫かる、乃ち片手、銃を支へて進み、既に砲臺に上るや、銃臺を腕にし、尙敵を追撃して已まざりしと云ふ。此方面初め我兵の呐喊突進は、凡一千五六百米突よりす。其間隨時集開を行ひしと雖も、常時の演習に比すれば、非常の急走たり。稍々敵壘に接近するに及び、頻りに悶聲を揚げ、或は又鏘々罷士を呼で進む。而して既に七八十米突の距離に至るも、敵は尙依然として射撃し、我兵の漸く急進するを見て、始めて退走したり。以て敵の如何に頑抗せしかを見るべし。又混成旅團は、僅かに五個大隊を以て、九個の砲壘を陥る。中に有名なる松樹山及び、二龍山の砲臺をも含めり。而して其作戰の法を問へば、實に簡單なるものにして、只平地を平押しに押したるに過ぎず。然るに、敵彈は海上を射撃するものを以て、直ちに之を陸上に應用したることゝて、其猛烈は固より言を俟たず。斯く雨注し來る彈丸の下を、我兵は夷然として進撃し、爲めに負傷者多かりしも、又莫大の功を奏せり。一言以て之を評せば、只々壯烈猛烈と云ふの外なし。大山大將は、最初水師營北方高地にありし後、混成旅團奮闘の時、進で水師營東端小銃彈射程内に進み、親しく全線を指揮せしが、戦後長谷川混成旅團長に向ひ、感動に謝辭を述べて曰く、今回は寔に無理なる命令を出し、混成旅團をして非常に困難なる地位に陥らしめたり。然るに、其將校及び下士卒の勇悍なる、數時にして盡く能く敵壘を陥る。是れ深く本官の謝する所なりと。

大山大將の謝辭

第三聯隊の某中隊の激闘

第二聯隊の勇強

混成旅團、亦以て面目ありと謂ふべし。椅子山も、亦敵壘中主腦の砲臺、其攻撃の困難想ふべし。就中我第三聯隊なる某中隊の如は、其士卒の死狀續進の諸隊をして、興奮覺ゆる、屍を超えて突進せしめたり。其様、下士は拔劔柄を握り右臂を前方に延ばして殞れ、兵士は銃劔を突出したるまゝ、手敢て之を放たず。其屍は悉く地に伏したり。以て其奮進の狀を察すべし。而して其第二聯隊は、砲兵拔護に當り、敵彈飛亂、屢々隊列を襲ふと雖も、而かも攻撃隊にあらざるが故に、一步を移すを得ず。肅然列を守りて、其任を全うしたり。一彈其陣地に破碎せしとさの如きは、十六名の負傷者を出せしも、尙自若として其本據を保てり。此苦境、傍觀者皆て知り得ず。要するに、總攻撃の當日我諸隊の配備、一々肯綮に當り。些の遺算あることなし。故に隊に逸隊なく、伍に逸伍なく、部下一兵卒に至るまで、戦闘に従事せざる者なし。作戰の圓滿、戦術の充實此役の如きもの、多く求むべからず。宜なる哉、東洋第一の堅壘、唯一唾手の下に陥落せること。茲に又總攻撃當日の朝軍司令官は、我陸海兩軍の聯絡を通せんとし、根津砲兵大尉及び、飯田海軍大尉を召して曰く、我陸軍今や旅順を攻撃す、念ふに、又我海軍も之を援助せんとなす。而して兩軍爰に氣脈を通せざれば、互に其餘勢に傷けられんことを恐る。卿等乃ち往き、陥落と同時に之を海軍に報じて、其砲撃を止めしめよと。二人謹諾傳騎一名を隨へ、辞して起ち、混成旅團の

根津砲兵大尉及飯田海軍大尉の聯絡を命ぜらるる

陣地尖石山の西麓に至り、戦状を觀望したり。午前八時半、椅子山の陥るや、三騎相携へて其後方趙家屯より、左翼縦隊に就き、若干の兵士を假らんとせしに、料らざるに、縦隊は早くも進撃したり。されば兵士は、要なし三騎にして足れりと、馬に鞭して一躍東海の岸に出でたり。見渡せば、海遠く並びたる我第四遊撃隊幾隻の軍艦は、恰も城の如く山の如く、今しも嶮嶮(老嶮山)の砲臺に向て、勇しく大砲を發するの時なり。蓋軍艦は、筑紫號なり。是に於て飯田大尉は、波打つ際に進み、幾度か信號旗を揮へども、我艦隊は更に觸目せざるもの、如し。根津大尉は、固より支那語を解せり、乃ち漁家に入りて舟を問ふ。漁者一隻數人を容るべき長方形の一舟を示し、曰く、唯此一あるのみと三騎搭載漁者を促がして漕かしむ。漕くこと凡二三町、鳥海艦之を望見し、端艇を卸して來らしむ。一行因て司令官の命令を致すことを得たり。端艇を辞し去り、柳王塘に上陸し、漁者に金を酬いて還らしむ。一行之より海岸に沿ひ、辿り行くこと三町許、前面山上人馬二三百疑ふべくもならず、敵の敗兵なり。乃ち岩背に潜み、敵の通過を待つ、事頗る危険に屬す。相議して曰く、陸路困厄測り難し、寧ろ海軍に托せんと、因て歸り去り、前の漁者を叩き、其馬を海岸に留め、獨り鞍を載せて、再び軍艦に向ふ、顧みれば、敗兵海岸に立て我を望むもの、如し。而して銃を發せず。會々風雨交々至り、今迄鏡の如き海上、俄かに白馬を走らす

大尉等の
一行敗兵
に違ふ

に、さらば、いづこの岸なりとも漕き着けよと命せしに、漁者は波を恐れてともしれば、又本の岸邊として還戻さんとす。大尉漁者に謂て曰く、他所に漕げ、余は汝に二十兩を與へんと。二十兩の威力は、木の葉の如く舟を走らせて、漸く進で小平島に至る。至れば、波あらく、岩多く、日は暮れて咫尺を辨せず、詮方なく故意に淺瀬に乗上げて、夜の明くるを待てば、手足は凍え肌膚は斬らるゝ許の寒さに堪へず。三人乃ち舟を出で、風雨の中を事ともせず、鳥羽玉の暗路を辿れり。一人は谷に墮ち、一人は泥に陥りたれども、幸にして共に負傷なし。午後十一時頃、一民家に至り、嚮導者を雇ひ、隨て行く。既にして楊樹溝に至る比ひ、何時しか嚮導者は逃げぬ。一行茫然往く、所を知らず。乃ち路傍の人家を叩き、一夜を明さんと見回せば、家に人なし、唯燈下に一兒あるを見る。年十歳未滿。小兒と共に夜を明し、東天稍白む頃。該家を出で、地圖を案じて硝子口に至り、遂に三十里堡に出づるを得たり。是に於て、軍司令部に向ひ、任務を卒へて無事なる旨を飛電したり。三十里堡より、臭水に至れば、敵の敗兵と誤認せられ、我兵の爲めに撃たれんとす。幸くして柳樹屯に至り、其夜一泊、翌二三日軍艦八重山に搭じ、土城子の西方より上陸して、再び旅順に歸營したり。而して我海軍は、二十二日事なく大連灣内に在り。二十三日風波漸く止むを以て、午前五時第一遊撃は、直に錨を拔て、旅順口に向ふ。此時早くも筑紫・

旅順の掃海

赤城・大島・鳥海の諸艦は、既に礮臺下の砲臺下まで、平然として接近しつゝありき。乃ち吉野は、筑紫に向ひ信號して曰く、模様如何にと。筑紫よりは信號して、占領せりと答ふ。是に於て港口近く進みしに、一昨日我水雷艇に窮迫せられたる小蒸汽は、城頭山砲臺下の淺瀬に乗上げあり、又黄金山の砲臺には、日章旗副々として風に翻り居れり。午後に至り、各艦より例に依り小蒸汽を出し、水雷取除のために掃海をなしたり。午後二時頃北西に當り、煤煙見ゆ、其數三四隻、是必然敵艦ならんと。本隊及び第一第二の遊撃隊共に之に向ひしが、漸く近くに及び之を見れば、實は一隻の小蒸汽、蓋し風の煤煙を吹靡かし、より、かく多數とは見えしならん。而して彼れは我艦の向ふを見るや。何くともなく形を隠しけり。思ふに、未だ旅順の陥落を知らず、太沽或は山海關邊より通信船として來りしものなり。夕刻に至りて、二隻の我運送船もまた來りしが、唯港内の掃海未だ終らず、水雷爆炸の恐れあるを以て、港内に入るを得ず。艦隊と共に港外に在り。翌二十四日早朝、米國の旗艦「バルチモア」及び、英艦「リオン」の二隻來り、例に依り、十五發の祝砲を發せり。是より外艦の來るもの我艦の入るもの日に多く、港内股賑なり。是に至りて海陸始めて相通せり。

旅順の行政
通ず

我軍の既に旅順を略取するや、同地に行政廳を設置し、元在北京公使館二等書記官たりし鄭永昌

行政管理規則

を擧げて、知事に任じ、又左の規則を制定し、十二月十六日を以て施行期限とせり。

旅順口行政署行政管理規則

- 第一條 旅順口行政署の管轄區域は、後各鎮堡・泡子窪・沙家子・楊樹溝以西とす。
- 第二條 本署管轄首要の村驛及び、口港には村長各一名を置き、諸般の取締を任せしめ、相當の手當金を給與す。其村驛は實況調査の上之を定む。
- 第三條 本署の諭達告示は、各村驛の要所に貼附するの外、特に指名者をして、其趣旨を各戸に口達せしむ。
- 第四條 外國人は、大本營の許可を得たる者を除く外、總て本署の管轄内に入るを禁ず。
- 第五條 凡そ管轄内人民、外國人の犯法者は、本署に於て之を逮捕し、戰時公法に據り之を處分す。
- 第六條 本港頭及び、市街の要區に憲兵、若くは其補助兵員を駐屯せしめ、又管轄地内には、憲兵若くは、其補助兵員を巡行按檢せしめ、其警察事務を執行せしむ。
- 第七條 管轄内人民は、之に對する各部隊徵發事務執行に關しては、憲兵若くは其補助員をして、之を監視せしむ。
- 第八條 管轄内人民にして、兵器を密藏し、敵兵若くは其間諜を隠匿する者あることを知る者は、速に左の場所の一に報告すべし。
- 行政廳 各團 部隊 巡回官吏 憲兵 憲兵補助兵員
- 第九條 土人の不正、若くは凶惡の所爲に依り、損害を受けたりとする日本人民、又は他の

土人は何時なりとも、書面若くは口頭を以て行政署に申出、處分を請ふことを得。

第十條 兵站司令監、若くは合營司令監の許可を得ざれば、我軍人軍屬は、猥りに本署管轄の家屋を使用し、又は立入るを許さず、土人に在りては、行政署の許可なくして、猥りに他人の家屋を使用するを許さず。

第十一條 避難人民の歸來して、正業に就かんことを請ふときは、本署に於て、其住所姓名年齢及び、家の人民を取調べ、我が命令を遵奉すべきことを誓言せしめたる後之を許可す。

第十二條 管内人民より、租税若くは手数料等の徴收を要するときは、率を定めて、本署より豫め之を告達す。

第十三條 本署の行政官、其職權に屬する行政事務を補助せしむる爲め、必要の場合に於ては、人民を使用す。然るときは、相當の給料及び報償を與ふるべし。

第十四條 道路橋梁溝渠等の破壊、又汚物の淤滞に依り、通行若くは衛生上に大なる妨害ありと認むるときは、村驛費、又は官費を以て修繕疏通せしむることあるべし。

第十五條 罹病者・負傷者あるときは、本署に申出で、救護施療を受くべし。

第十六條 旅順口市街の地に施米場を設け、別紙施米細則に従ひ、憑るなきの窮民を賑恤す、其老幼男女にして、奉養人なく、又養育人なきものは、便宜の家屋に住居せしめ食器を給與す。

第十七條 日本貨幣を以て通貨本位とし、日本貨幣一圓は老錢一錠二百五十文と交換す。

施米細則

別紙施米規則左の如し。

旅順口施米細則

第一條 本港市街適當の場所に施米所を設け、三十日間窮民を賑恤す。其間に各自産業に就き、自活を謀るべし。

第二條 施米は、窮民救護の仁恤に出るを以て、誑詐欺罔の事あるべからず、故に一戸毎に、姓名年齢家族人員、其年齢を記入したる紙票を付與す。

第三條 紙票は、行政廳に於て、貧窮者に相違なきを確認したる後附與す。

第四條 施米は、一人一日四合づゝとす。但三歳以下の小兒には給與せず。

第五條 施米は毎日午前九時より正午迄とし、施與前に於て紙票に日付を記入したる後、現物を下付す。

第六條 紙票を携帶せざるものは、施米をなすず。

第七條 施米場には、憲兵雜役者若干名を置き、其事務を整理せしむ。

是に於て、旅順行政署長官鄭永昌は、清人劉雨田なる者を擧げて、備吏となし、大に招商撫民の事を計畫せしむ。雨田は、慷慨憤世の人なり。盛京省普蘭店の東五里許、泡子西崖の豪族、父の名は振之、子は即ち雨田なり。濼波或は癸山と號す。其先山西太原府、交城縣の人、劉父子富巨萬を積み、貨舖を復州・普蘭店・金州・貔子窩の四所に開けり。初め鄭永昌の第二軍に従ひ、貔子窩

清人劉雨田の備に擧げらる

に入るや、清人をして我用たらしめんと欲し、周旋頗る勉む。我兵站部附近に、金榮喜なる者あり。年少にして才氣あり、曾て仕官を求め、天津に赴き科第を試む。然れども賭博の力によらざれば、其の目的を達する能はざるを察し、去て商業に従事せしが、常に清朝の腐敗を慨き、悲憤自ら禁せず、一日近傍に於て、公應と人民との間に訴訟起りし時、直は人民に在りて、而して公應勝と制す。榮喜其不法を憤り、更に之を高等の官衙に提出し、自費を抛て之を助け、爲めに家産を蕩盡したり。榮喜身賤と雖も、實に支那の民権家たり。鄭氏之を聞き、訪て其家に至る、榮喜欣然鄭氏を延て曰く、公の姓名清人に近し、或は今次日本軍に降る無きを得んか。鄭氏笑て曰く、否、足下彼の鄭成功なる者を知らずや、成功の實に余が祖先たり。往時、明朝、清の呑滅する所となり、我祖其粟を食ふを欲せず、飄然去て日本に歸化す。今王師海を渡り、滿清の無禮を膺懲す。余も亦從軍涯分を盡して清を討滅し、以て大に先志を伸べんと欲す。足下若し意あらば、請ふ爲めに一臂の勞を吝む勿れと。榮喜之を聞き、案を拍て曰く、之ある哉。清は倒すべく、明は復すべし。然れども生の微力、以て此盛舉を援くるに足らず。請ふ一人を擧げんと。鄭氏其人を問ふ。答て曰く、此を距る一里許、泡子西崖に劉雨田なる者あり。今茲二十有四、才氣用ふべし、請ふ公の爲めに之を招かんと。乃ち急に馬を呼び、一鞭して其家に至り、劉父子を説て俱に共に來

我鄭永昌
清少年
金榮喜
の問答

る。鄭氏、劉父子に向ひ、諄々として説くに、順逆を以てす。劉父子慨然として曰く、公と生と、同じく是れ明朝の人。何爲ぞ其義を見て死せざらんやと。感奮踴躍共に相結托して、明の遺業を克復せんことを誓ふ。談夜半に及ぶ、鄭氏曰く、余は近日將に金州城に入らんとす。足下等幸に其言を食ますんば、請ふ急に金州に來れと。父子曰く、生等明日復州に到り、家小を老虎山に隠し、四所の貨鋪を收め、直に公に金州に従はんと。遂に相別る。かくて、鄭氏は十一月十六日を以て、金州城に入りしが、劉父子は、二十日朝約を守りて城門に到り、刺を通す。衛兵之を行政廳に導きて鄭氏に通す。翌日清兵復州より來り、金州を襲ふに會す。雨田請うて、老虎山に至り、家族を率ひ、金州城に入り、行政廳の保護を仰がんことを言ふ。振之、雨田を叱責して曰く、否々大丈夫身を殺して、王事に勤む、家小何を顧みるに足らんと。終に亦家事を言はず。雨田、幼時より博物、地理の學を好み、敢て科擧に應ずるの志なし。鄭氏に謂て曰く、王師今や南旅順に向ふ。請ふ嚮導となり、以て地理を語らん。旅順の地勢は、生の特に意を致して調査せし所なりと。鄭氏其志を嘉みして、而して其請を容れず。翻て問て曰く、王師若し北京を陥れ、明朝茲に興復せば、足下は且何の官に上らんとすと。雨田喜ばずして曰く、官吏となり、新朝に立つ、余の固より欲せざる所、事若し此に至らば、願くは日本に航し、深く博物・地理の學を講せんとす。

朝政は王師によりて回復せらるれば、余が父子の志以て酬ゆ何ぞ其の他を望まんやと。時に金榮喜も亦鄭氏の跡を追うて金州に來り、將に城門に入らんとす。衛兵の爲めに誰何せられて、遂に其之く所を知らず。雨田屢々之を求めんと請ふ。鄭氏曰く、金は義士、求めざるも自ら來る者と。議遂に已む。既にして我軍旅順を陥れ、將に軍政を布かんとし、先づ鄭氏を招く。鄭氏乃ち劉父子を紹介して、二十五日を以て大山大將に謁せしむ。父子献するに、金州城の精圖一冊、黄金五百兩を以せり。此に至て、行政署に擢任せらる。雨田我邦人を送るの詩あり。曰く旗鼓喧天動地來。東洋山岳毓英才。武臣慈善如人意。文士風流契我懷。事喜陶朱心管樂。性耽淡白志鹽梅。送君南浦凝神久。波浪飛花萬里開。と。其文辞甚だ雅ならずと雖も、其至誠嘉すべし。雨田議論多く孔夫子を稱すれども、又西洋の學に志あるもの、如しと云ふ。

越えて二十八日の朝、清國商招局汽船圖南號は、清の國旗赤十字旗、並に白旗を掲げ颯然として旅順口に來れり、今や旅順は、既に我に歸したることなれば、我軍艦は奇異の思をなし、士官を派し之を臨檢せしめしに、船には五六の西洋人あり。之に來意を問へば、曰く、余等は新に天津に設置したる私立赤十字社員なり。今回の戦争に負傷したる清兵を申受け、天津に還り之を治療せんが爲めに來ると。各其所屬國領事の證明書及び、彼等が願に對する李鴻章が指令書を出

劉父子大山大將に謁す

清國商招局汽船圖南號旅順に來る

し、我臨檢士官に向ひ、其願意を聴かれんことを請へり。是に於て、我艦は彼等が證明書類を以て、之を軍司令部に致す。大山司令官は、之に答へて曰く、余ハ貴下等が我交戰國の負傷者を、交戰國の一地に運ばんとする慈善博愛の心に感ず。然れども、敵の負傷者は、捕虜と同一あること、余の喋々を待たざる所とす。故に之を交戰國の一地に運ぶことは、縱令中立國の媒介を以てするも、残念ながら拒絶せざるを得ざる義に有之、又我軍に於ては、傷者は彼我の別なく治療を施すを法とす。現に清國の傷者は、皆我野戰病院にありて、治療を施しつゝあり。故に此點に於ては、更に懸念を要せざる義と承知ありたし。貴下等の乗る所の汽船圖南號は、十一月三十日午後六時迄に、旅順半島近海を離れしむることを、伊東聯合艦隊司令長官に通報せり。貴下等、之を領せよと。而して其提出したる證明書の、左の如し。

證明書

此の證を所持する者は、英國陸軍大尉「キャレンヂェスト」にして、「スーヂェヤン、スタッフ、コール」に屬する大尉「ポーウエー」並に「サージョン、メイジョー」(二等軍)と共に、汽船圖南號に、乗込み、旅順口に向け進發するものなることを證明す。
千八百九十四年

天津にて

英國領事 ヘンリー、ビー、ブリストタウ

證明書

下文に擧ぐる四名の、英國の臣民にして、天津赤十字社に屬し、今回清國負傷者を、天津に引取らんが爲め、汽船圖南號に乗込み、旅順口に向け進發するものなることを證明す。

軍醫

ジー、ビー、スミス

サージョン、キャプテン(一等軍醫)

ヒーストン

同

アール、エル、ソムソン

醫師

アイ、エム、ヤング

千八百九十四年十一月二十五日

天津にて

英國領事 ヘンリー、ビー、ブリストウ

證明書

丁抹大領事「ヒコラス、ラプテウ」は、清國商船圖南號が天津に於ける、私立赤十字社員の需めに應じ、其の管理に屬して旅順口に向ひ、清國負傷兵を載せ歸り、天津に於ける右の社に於て治療をなさしめんが爲め、進發するものなることを證明す。

又赤十字社員の一にて、右圖南號に乗込みたる丁抹の臣民「エフ、ライダム」に對し、自由と出來得る丈の保護とを興へられ、彼れの天職を全うし得る様は御世話なし被下度、天津に於ける丁抹領事より、御依頼に及ぶ。

千八百九十四年十一月二十六日

丁抹國大領事

エチ、ラプテウ

證明書

余は「イー、デー、テニス」君が、天津赤十字社の書記兼會計にして、天津に於ける合衆國副領事なることを證明す。旅順口に進發せんとする圖南號は、同君管理の下に屬すれば、充分の便益を興へられ、同港へ廻航の目的を全うせしめ、其本分を盡させ給はんことを御依頼す。

千八百九十四年十一月二十六日

天津にて

合衆國領事 シェリダム、ビー、リード

李鴻章公文(意譯)

今般米國副領事「ランチャロー」イ、ヤロー、醫官「アウシトエン、スウミートー、アトヨローウエ」等より、赤十字社慈善會を組織し、都て負傷兵病兵は、本會治療掛りに於て西國公法に従ひ、衣服に赤十字徽章を縫ひ付候は、外人の妨害をなす能はざる義に付き、汽船圖南號に乗込み、旅順口に赴き、清兵の負傷して未だ全治に至らざる者を調査し、速に之を天津病院へ送還し、以て生命を全くせしめ度旨照會有之、右副領事及び、醫官等の發意は尤も博愛慈善の美事に屬し、本大臣も甚だ同感を表し候に付、速に該地に赴かしめ、諸事不都合無之様取計ふべし、此旨相達し候事。

光緒二十年十月二十九日

欽差大臣辦理通商事宜太子太傅文華殿大學士兵部尚書直隸總督部堂一等肅毅伯

李

是に於て、外人等は我回答の至當なるに辭なく、然らば已むを得ざるなり。幸に此品を傷者に贈

り給へと菓子四箱を呈し。遂に我命令の如く、旅順を去れり。
茲に旅順口占領後の整理を示さん爲め、十二月二日大山大將發の報告を載せん。是れ其最も要
領を得たるものなればなり。曰く、

大山大將
の報告

旅順口の整理、概ね其緒に就きしを以て、軍司令部と十二月一日より、旅順を出發し、同日柳
樹屯に着し、二日金州に赴かんとす、依りて今整理の概況左に報告致候。

一 旅順の海正面に備ふる大口徑の架砲は、五十七門なり、是等の架砲は之を利用し、旅順
の守備に充てんとす。旅順の陸正面に備へありし小口徑の架砲は、六十三門なり、其他小
銃及び彈丸等の我に利用すべからざるもの、其數甚だ多し。

一 右架砲及び、彈藥等は、軍砲兵部長、並に攻城廠長に命じ、爲し得る限り之を整理せしめ
つゝあり、然れども其保存修理等は、専門の人にあらざれば、十分に之を爲す能はず、故に
此事を擔任するに必要なる人員材料を送附するの準備ありたし。委細は近日稅所砲兵少
佐を大本營に差遣し、具申せしむ。

一 金州及び、旅順に軍政廳を置き、此各所に高等武官各一名を置き、軍司令官の令下に在
りて、行政を執行せしむ。

一 此占領地疆を奥水三十里堡に通ずる線に依りて、東西の二警備管區に分つ。

一 貔子窩及び、普蘭店に軍(或は郡か)廳を置き、兵站司令官をして之を兼任せしむる筈。

一 旅順の軍港は、聯合艦隊に引渡せり。

一 監順には、臭水三十里堡に通ずる以西に在る地疆内に於て、古川兵站官と協議し、其區
内の安寧秩序を維持すべきこと、並に砲臺及び軍港の警備に關し、海陸兩軍の交渉の任に
就ては、三浦海軍大佐と協議すべきことを命せり。

一 電線は、旅順と金州、金州、柳樹屯及び、金州、貔子窩は全通しあり。但し金州貔子窩間
は、破損の個所あるを以て、目下修理を加へつゝあり、送附ありし電信材料、十一月三十
日柳樹屯より到着せり。

一 金州以西、並に貔子窩附近の人民安堵し、至て靜謐なり。

十二月二日

大 山 司 令 官

大 本 營 宛

占領後の旅順口には、知港事としては、元佐世保鎮守府の知港事たりし、山城丸艦長三浦海軍大
佐を擧げ、海軍根據地司令長官としては、第二遊撃艦隊司令官坪井海軍少將を擢で、又同參謀長

占領後の
旅順港

軍機通信

には、佐世保鎮守府參謀長植村海軍大佐、參謀として玉利海軍大尉を任用したり。其他尙海兵團長・造船部長・監督部長等の職員を置かる。而して其船渠工場等に要する各職員には、元山丸・石川丸等の技師以下重なる各員を以て之に充て、尙職工は横須賀より送れる者三百人許、其外派遣の官吏・水夫等を併せて、總計數千人に上ると云ふ。因に記す、我邦は今回開戦の初めより、從軍者の便利は勿論、軍機通信の重要な關係あるを以て、朝鮮及び、敵地に於て我軍の進行と共に、其區域を擴張し、隨地に電信及び郵便を開設したり。而して今や釜山線路なる野戰郵便は、延びて第一軍占領の鳳凰城に至り、又第二軍の方面は、金州半島に向て延長し、日々に各方に分岐せらるゝを見る。今此要地に於ける本局・支局並に集配地等を列記すれば、先づ釜山の普通郵便局より、洛東野戰郵便局に至る、其路程四十八里十八町にして、其間に龜津・忽禁店・三浪津・密陽・清道郡・大邱・多富驛・海平の八集配所あり。而して洛東野戰郵便局より、龍山野戰郵便局に至る五十二里十八町の間には、臺封・聞慶・安保・忠州・可興・長湖院・利川・昆池岩・烏峴・松坡鎮の十集配所あり。又龍山より平壤野戰郵便局に至る間は、五十八里卅町にして、十一ヶ所の集配所を置かる。即ち高陽・坡州・長湍・開城・金川・慈秀・瑞興・劔水・鳳山・黃州・中和是なり。更に平壤より、安州に至る其間十七里廿八町の中には、順安・肅川の二集配所を設け。安州より進み、義州野

戰郵便局に至る路程三十三里十八町、其間には、嘉山・定州・雲興・鴉馬街・宣川・清江站・西林鎮堂後洞・所串館の九集配所あり。而して清江站より、所串館に至る所に分岐線あり。其間に鐵山・化川洞・龍山の三集配所を置き、龍山集配所より更に分れて、耳湖浦に至る線路あり。耳湖浦より我宇品に至る里程の七百九十海里なり。又義州より白馬山城に至る一線は、其長が二里十二町、義州より九連城の集配所を経て、鳳凰城野戰郵便局に達する本線は、十八里三十一町なり。尙九連城より安東集配所に至る一分岐線あり。其間二里十二町。鳳凰城は即ち釜山郵便線の終點にして此延長里數實に二百三十三里三十三町の延長なりとす。(但分岐線の二十里十二町及び、龍山仁川間の線路は、此外なり。)而して金州半島には、初め花園口に野戰郵便局を設け、漸次延長して坎子底下及び、王家店に支局を置き、更に進で本局を沙家屯并に、金州に設けられしが、既にして十一月十三日花園口の本局及び、坎子底下、王家店の支局を廢すると同時に、本局野戰郵便局を大連灣頭の柳樹屯に新設したり。故に金州半島に於ける當時の郵便線路は、貔子窩の支局より、柳樹屯の本局に至る凡十八里二十四町なりしに、後我軍の旅順を指して南する電線郵便も、亦之に隨て延長せしこと、即上記司令官の報告の如く、又漸次北進して大孤山、大連灣を経て、安東に接続し、遂に第一軍と連絡を通ずるに至れり。

十一月二十六日優渥なる 詔勅は、第二軍に降り。有栖川參謀總長宮殿下は、飛電之を第二軍大山司令官に傳達せらる。即ち最初の捷報達したる其日なり。

勅語

旅順は渤海の關門敵國の恃みて鎖鑰となす所今汝等一舉之を抜く朕深く其功勞を嘉賞す漸次天寒く前途猶遠し汝等其れ各自愛奮勵せよ

又 皇后陛下の御令旨には、

我が第二軍に於て、旅順口占領の趣、 皇后陛下聞召され、頗る御滿悅、特に將校下士卒の忠勇なるを、深く御感賞の旨、御沙汰あらせられたり。

右の趣第二軍へ傳送ありたし。

香川皇后宮太夫

大本營宛

又兩陛下より海軍への御沙汰には、

勅語

海軍へ賜
はりし勅
語

卿等の忠勇なる能く百般の困難を排斥し第二軍の上陸を完うせしめ遂に大連灣旅順口を占領せり朕深く其功勞を嘉賞す時漸く沍寒に向ふ卿等其れ自愛し前途の成功を期せよ

令旨

第二軍を援護し、敵國に上陸を完うせしめ、大連灣及旅順口を占領の趣 皇后陛下聞召され、頗る御滿悅、特に將校下士卒の忠勇なるを深く御感賞の旨、御沙汰あらせられたり。

我軍敵の
戦死者を
祭る

此戦や、前記の如く、我軍已むを得ざるに敵を殺傷すると甚だ多く、爲めに外人の情を知らざる者、頗る酷評を試みたり。故に終に臨んで、特に我軍義侠の事實を擧げて、之を雪冤し、以て我の敵に對する仁至り義盡せることを明にせんとす、とは、即ち我軍に抵抗したりし敵の戦死者の爲めに、祭祀を行ひ法會を営みたる一事、是なり、是れ一は迷魂を慰するが爲め、一は我軍膺懲の盛意を知らしめんが爲なり。茲に我行政署、並に歩兵第十二旅團に於ては、憲兵、兵士、及び人夫をして、各地に散乱せる敵の死屍、千三百餘を収めて、之を火葬せし上、行政署ハ、日本佛教各宗より派遣せる慰問僧の到着を待ち、之が追吊會を行はんとし、先づ其由を一般土人に諭告して參拜

せしめ、且つ之を金州城に報知して、清國僧侶をも招きたり。其式場は旅順の東北を距る約五丁許なる、一小丘と定め、當日(二十八年一月十八日)午後三時に至りて、各々準備を整へ、行政署の門前に整列し、清國の僧侶、先づ出棺の讀經を始め、終つて順次、墓地に向て行進せり、最先には大日本佛教慰問使安正立國會等と書したる紅白四旒を樹て、次に日本僧は、各々紫色の法衣を纏ひ、蜀紅の錦、或は金襴七條の袈裟を着け、次に清國僧、各樂器を携へて、行々鐃鉢を打鳴らし、次に白木の香爐、燭臺、生花、菓子、佛飯、清淨水、次に遺骨を納めたる棺槨、次に陸軍將校・行政署員・憲兵等、威儀肅々として、既に墓地に達するや、日本慰問僧の計畫に係る、約八寸角の白木四面に、種々の梵字と、左の如く、

寶塔有爲清國人亡魂離苦得樂也

經曰一切有爲法如夢幻泡影如露亦如電應作如是觀

偈曰劍樹刀山飛鳥縱砲煙彈雨打空鐘個中何別親兼冤旭日長輝老鐵峯

露

南無多寶如來經曰我聞大乘教度脫苦衆生

南無釋迦文佛經曰唯我一人能爲救護

大日本帝國眞言臨濟眞宗特派僧建焉

記したる塔婆とを、式場の中央に樹て前面には白木の卓を按し、供養の品々を陳列し、香烟芳芬の間に、日清十八名の僧侶は、熱心に讀經す、此間、各僧を始め、陸軍將校・行政署員・憲兵等、順次焼香をも了れり、此日四方より會葬せる數多の土人は、各感涙を浮べ、香を手向て、九泉の幽魂を慰するの情、眞に滿面に溢れ、三拜九拜して壇前を退く、彼等が暗涙は、實に大日本の徳政に感泣せし熱涙なりき、此時、一天俄に雪を催し、飛雪紛々として降り、山野濛昧、全く式を了りしは、午後六時なりしと云ふ。因に記す、前日、清兵戦死者發掘の際、拾ひ得たる銀塊・銀飾・珠玉等は、之を相當の代價にて賣拂ひ、以て清兵墓標の費用に充てたりと云ふ。亦以て我軍眞意のある所を知るべし、外評豈に之を齒牙にかくるに足らんや。

嗚呼、渤海灣の關門、敵國の鎖鑰、今や既に破れたり、彼れの狼狽、果して如何ぞや。

第十七 金州城の逆襲及復州の占領

第二軍の
根本地

初め我第二軍の金州城を抜くや、此を根本の地と定めたり。其旅順進撃の舉るに及び、歩兵第十五聯隊の二個大隊を留めて、之れが守備とし、其隊長には、河野大佐之に當る。十一月十五日、之に騎兵第一大隊の一小隊を附す、翌けて十六日、守備隊の部署を定め、州城南門外十餘町の所、即ち銘軍軍械に歩兵一小隊を出し、其西南方にゐる騎兵營及び、砲兵營に監視兵を配置し、歩兵一小隊を徐家山の砲臺より、更に歩兵の一小隊を徐家山下の五箇兵營に、又歩兵の一小隊を蘇家屯及び、毛家營に配備し、各々其所を堅守せしめ、別に歩兵一中隊・騎兵一小隊を復州街道なる、三里臺子に出して、同方面を監視せしむ。又歩兵一小隊を、金州街道なる石門子より派遣し、魏子窩方面并に同兵站線路を警戒せしめ、而して歩兵一中隊を、城内に留めて、之が整備に充てたり。部署既に畢るや、毎日三里臺子監視の第五中隊長奥田大尉に、騎兵斥候を命じ、復州路なる、五十里堡に至り、其附近に於て敵情を探しめたるに、更に得る所なし。同十八日、騎兵一小隊を附し、同街道普蘭店に向て搜索を遂しめたるに、陣家堡附近に、數多の敵兵の屯集するを認めたり。彼、我を認め、一部の歩騎兵を以て、我斥候を追躡し來れり。我斥候因て退き、三十里堡に

我斥候敵
の掩撃に
會ふ

河野金州
守備隊長
の命令

至る。此事翌十九日午前二時、金州に達せり。而して同斥候の歩騎兩小隊は、尙止りて敵情を搜索し、同日正午歸り告げて曰く、敵兵敢て進來の狀なしと。是に於て更に一層の詳情を悉さんと欲し、尙停止斥候を五十里堡に出し、騎兵下士一名・上等兵以下四名を附し、同日午後零時三十分、三里臺子より派遣したり。既にして、同斥候の午後三時頃、復州路なる龍口に至るや、敵の歩兵一聯隊許を見る。我斥候は、敵の騎兵五十騎の掩撃する所となり、下士及び兵卒二名は、馬倒れて走ること能はず、生死不明となり、他の上等兵一名・兵卒一名は、復州街道の東方山間に駆入り、山又山を回り魏子窩街道、劉家店附近に出で、辛うじて午後二十分、金州城西方なる聯隊本部に至りて急報せり。是に至て始めて敵兵の漸次前進し來らんとするの狀況を知れり。其他敵の歩騎兵數十名、魏子窩街道附近及び、復州街道の西方に出没せる報告を得るも、小數にして後續部隊の在るを認めず。要するに、敵の主力は、復州街道の方に集まれり。されば、我軍は同二十日未明より、各大隊の豫定防禦陣地に防禦工事を施し、午前十一時四十分に至り完成し、敵の來襲を待てり。同日午後二時に至り、河野守備隊長は、左の命令を下したり。

- 一 敵の歩騎兵三十里堡及び、其西方に出没せり。
- 二 歩兵第一大隊(第三中隊を欠く)は、西門外の村落に露營し、其一中隊を以て、前面の高地

(金州城北の赤山)を守備し、別に歩兵一小隊を以て、西海岸街道を監視せしむ。

三 歩兵第二大隊(第二中隊を欠く)は、北門外に村落露營し、石門子三里庄に前哨を置き、魏子窩街道及、復州街道を監視せしむべし。

四 本官は、北門外聯隊本部に在り。

此命令の下るや、各大隊は、尙當面の地形を綿密に偵察し、各々其配備及び、宿舍に就く。時に午後五時なり。同七時河野大佐は、更に命令を發して曰く、

同再命令

一 其後敵情を得ず。

二 當聯隊は、明日此地に在て、敵を防守せんとす。

三 各大隊は、明日午前六時運動し得る如く、準備し宿營地に在るべし。

四 本官は、明日聯隊本部に在り。

同日午後十一時四十分、十三里臺子に派遣せし歩兵中隊及び、騎兵一小隊は、歸り告げて曰く、敵の歩騎兵益々近接し、其一部は、已に十三里臺子の西方山間に進來し、復州街道に出沒し、金州城と十三里臺子との交通を遮断するに至れりと。因て各大隊に警戒し、明早朝豫定の防禦地に就くべきの命令を發したり。

敵魏子窩街道に逆襲し來る

是時に當て、敵は二手に分れ、一は魏子窩街道に向ひ、此間にある我軍用電線を切斷し、所在の野

戰病院を襲ひ、併せて魏子窩の兵站司令部を擾たし、尙其勢に乗じて、金州城に攻め寄せ、一は一

直線に復州路より金州城に迫り、互に勢を合して、我に肉薄せんとす、二十日には、其兵已に三十

里堡の附近に至りぬ。我軍急を大連灣に傳へ、同地碇泊中の我艦隊より、海軍陸戰隊三百人の援

助を請ふ。明くれば、廿一日、恰も我大軍が旅順口總攻撃の當日なり。然るに、敵は豫て金州に

留守する我軍の寡少なるを知るや同日復州街道と、魏子窩街道よりする者と同時に勢を合せて、

金州城へと迫り來れり。時に午前八時頃なり。其魏子窩より來る者は、大和尚山の右翼攻撃に

備へ、東門を措て、直に北門に迫る。其兵數は詳ならざれども、歩兵は二千に内外し、騎兵は二百

左右と見ゆ。我守備兵は、固より覺悟の事とは云へ、守禦の方面撤潤にして、見兵以て應ずるに

足らず、司令の、即ち命を傳へたり。電信工夫・兵站人夫・皆兵器を取て固守すべしと。而して

壘に本城占領の際、一旦收めたる銃砲刀劍を、悉く出して之を附與したり。かくて我軍は城外

に於て之を防ぐ。此時東門には、八珊の『グループ』砲二門、北門には同様二門を備付けありし

も、我守備隊の内、砲兵としては一人もなかりしに、幸にも金州行政廳の屬吏中、休職の砲兵一人あ

りて、豫て敵兵の襲來するを知り、此兩三日前より、二三の歩兵をして、發砲の法を習はしめしか

電信工夫・兵站人夫・皆兵器を取る

逆襲の砲兵

ば、當日は發砲自在にして、敵兵には完全の大砲なきに乗じ、我この速成の砲兵を以て、大和尚山左翼の敵を攻撃し、大に其効を奏せり。偶々敵の一人、彼處に在て信號する者を見る。之を目掛けて一發轟然發射しけるに、恰も適中して之を斃したり。是に於て左翼の敵兵は、走りて右翼の兵に合し、更に北門の攻撃に向へり。我速成砲兵も、亦北門に走り至る。然るに此砲兵等は、固より二三日間速成のこゝて、發砲の方法は、縦かに會得したるも、未だ砲の掃除法を知らざれば、爲めに發砲の後、火氣の尙は殘留せる者に、重ねて彈藥を裝入したりし故、砲は忽ち破裂して、無殘にもこの速成砲兵三人及び、歩兵五人、都合八人の負傷者を出せしより、金州城裏復た一人の砲兵なきに至れり。此日午後二時頃に至り、敵は金州城の抜くべからざるを察したりけん、漸次に退却をば始めける。我兵之を追撃せしに、敵は復州街道に向て逃る。此日我兵の即死は五名にして、負傷者は六十餘名に及び、我平野少尉は、力戰して丸に斃る。而して敵の死傷は、三百餘名に上れり。

二十二日午後三時、旅順街道より敵の敗兵數千來りて、又金州城を襲ふ。金州の我守備隊は、南門の外にある二小隊の兵を殘し、之に當らしめんとす。既にして、敵は敗へて金州城に迫らずして、城の西方、即ち金州灣に沿うて復州に向ふ。我一部隊之を要撃せしに、敵兵今は逃るゝこと

砲の破裂
砲兵の負傷

彼我の死傷

敗兵再金州城に襲ひ來る

軍夫鯨波
を擧げて
敵に當る

葛城艦乗員
の手記

能はず、窮鼠却て猫を噛むの譬に違はず、彼等は再び後方に向て旅順街道を指し、金州城を距ること二三町の所より、俄然勢を揃へて城に迫り來る。門外の二小隊は、之を逆へ撃ち、防戦甚だ努むと雖も、彼れは數千の大軍なり、我は見兵僅かに二小隊なり。固より遂に敵すべくもあらずして、退て南門内に入り、城壁に嬰りて一齊に射撃を行ひ、以て之を防禦したり。此時や城内八十名の我軍夫等は、危急此時なりと、得物得物を手にし、天地も崩るゝばかりの鯨波を作り、南門より一時に躍り出でけるに、敵は之を見て、軍夫とは夢にも知らず、悉く是れ日兵なりと思惟するや、忽ち南門の攻撃を止め、又々復州街道指して逃げ行かんと、各々西門の前を斜に通過せしかば、我守備隊も、今は悉く西門の一邊に集まり、壁上より烈しく、彼等に射撃を加へたり。されば、敵の銃殺せられたる者、茲は三四百名を生じたりしも、我に一人の斃れし者なし。此敗兵は、遂に又復州に逃る。而して我援助として、上陸したる海軍陸戰隊は、敗兵既に去るを以て、此戦に及はざりき。葛城艦乗員士官栗田伸樹は、能く其事情を寫せり。曰く、

旅順攻撃は、始まりたり。我陸軍は、二十一日には鋭を悉して旅順を攻撃しつゝある處へ、敵は我虚に乗じ、復州より八千餘の大兵を發して來襲し、我兵の金州城にあるもの、衰れや、忽ち之が爲めに重圍に陥り、金州の東西、即ち東方の華園・皮子窩、西の方は大連・旅順と

連絡は敵のために杜絶せられたり。此報を得て、陸軍大佐古川兵站監は、大に驚き、急使を發して右『ヘント』灣(編者云旅順攻撃の際、葛城艦の部署は、外敷艦と共にヘント灣に入りて、敵の)にある我葛城外敷艦に向て、之が應援を求めたり。我々此報に接し、如何にか猶豫すべき、時こそ來れ、葛城艦の功を顯はす此時にありと、直に陸戦隊を上陸せしむるの準備をなす。それ彈藥は幾許、糧食は幾許、草鞋わらじを着けよ、日本刀を帶せよ、水筒には水を満たせ、下着は充分に重ね着よ、醫療具はよいか、擔架をかつげ、士官は皆地圖を持つたか、双眼鏡そうがんきょうを忘るゝな、用意とりくくなる中に、天龍の端舟たんりゅうは、はや其用意を終り、葛城の艦尾に集まりたり。大和の艇も、亦揃へり。斯る處に陸戦隊員整列の喇叭は吹奏せられたり。陸戦隊の指揮官は、本艦の副長大塚少佐なり。徐々と上甲板に來り、最も沈着に部下將校士卒に必要な告諭をなし、喧々囂々たる間に在て、尙ほ頗る靜肅に、且つ悠々として端艇に乗りたり。同少佐の端艇に乘るや、一齊に萬歳を唱へ、陸戦隊員も、亦之に和す。其聲の壯烈なる、四邊に鳴り渡りたり。此時或者は、帽をかざし、或者は手巾を振り、或は戰勝を祈ると云ふものあり。御機嫌能うと呼ぶ者あり、老つかり遣てこいと叫ぶ者あり。我々は、此壯烈なる祝聲に勵まされ、勇みに勇んで橈さかを漕ぎ忽ちにして陸岸に達し、直ちに金州城を指して進み行く。此夜寒風

陸戦隊の指揮官

吹きしきり、寒威凜烈りんれつあれども、固より途に宿るべき家のあるべき様なく、山間に野營をなす。寒暖計は、氷點以下八度に下り、口鬚くちげは凍結して、つらゝをなし、鼻水も亦流れながら氷りて玉をなす。水筒の水は、氷りて飲むべからず。風は強吹して號令通せず。僅に手眞似をなして、漸く解す。彼用意せし辨當り、二日分の『ビスケット』と、二回分の握飯にぎいめなり。其後は陸軍の兵站部より、支給せられたり。此兵站部より送る處の握飯は、凍結してばろく乎たり。聞く所によれば、陸軍兵は鍋・藥罐等の用意ある由なれども、我々海軍兵は、此の如き用意のあるべき様なし。漸く火を焚き水筒の水を溶かして之を飲む。寒氣斯の如く甚しければ、此夜哨兵に立すして、野營に休止する者と雖も、一睡の夢を結ぶもの一人もなし。唯だ腕かいたを握り足を動かし、體温たいおんを發して寒威に抵抗せり。斯る寒威に遭遇するも、士卒の志氣毫も屈撓くつたがすることなく、意氣激昂す時も早く、金州城の圍を解きて、城内の兵を援んことを企圖せり。

明れば、二十二日なり。飛報あり、敵金州の東北より續々來り、城兵之と戦うて死傷六十名に達し、平野少尉之に死すと。此報に接し、勇氣勃々はつはつ禁する能はず。直に進軍の準備をなし、是より道路の險を冒し、益々奮進す。我軍は之を二隊に分ち、先鋒隊の内半隊を以て斥

候となす。我陸軍兵も亦同じく、騎兵二十騎を出して、斥候に宛てたり。午後二時頃、此騎兵歸り來り、敵は蘇家屯近傍に充滿する事を傳ふ。海軍斥候兵は、飽く迄も敵地に深入し、殆ど金州城を距る一里の處に至りたる時、遙に敵の方に向て、四人の斥候兵らしきものを見る。彼我の距離八百米突許なり。我海軍兵は、早くも其姿を認めれば、それ敵の斥候が顯はれたぞ、打てやといふあり、まてく、彼は黒衣を着けたり、味方あるやも知るべからずと、互に濫發を警めつゝ、暫く近寄るを見居たるに、彼等は種々の暗號をなしたれども、我海軍兵は元來陸軍の暗號に慣れず、双方互に注視しつゝ、遂に四百米突の近距離に達し、是に初めて互に味方なることを知り得たり。然れども彼の陸軍兵は、我海軍兵の上陸し居ることとは、夢にも知らざりし事なれば、彼等の我々を見るや、其服装の味方陸軍兵と異なるを以て、已にも射撃せんとして、數々銃をかざしたれども、我々は種々暗號をかして、其味方なることを示せり。彼是する内、右四名の陸軍兵は、段々に接近し來り、我々の全く味方なることを悟るや、喜ぶこと限りなく、且つ告げて曰く、我等は金州守備隊の分遣隊にして、第十四聯隊に屬し、今は僅かに十三名を以て、此蘇家屯ある兵營を守備し居りしに、數日前より敵兵四方に集屯し、退て金州に至らんとするも、四面皆敵、加之ならず、昨日來旅順より遁れ來

海兵と陸兵との會合

蘇家屯の守備兵に對して海軍の援を請ふ

る敵兵も、亦之に合し、數々來襲するの徴あれば、斯許の寡兵を以て、如何ともすること能はざるの境遇に達し居りしなり、と。今我々の來援を聞き、其喜び言はん方なし。乃ち我々は、此四名の嚮導にて、遂に蘇家屯の兵營に至る。營内の兵皆不審の内に、我々の全く味方軍兵にして、應援のために來りたることを知り、夢かと許りに思ひつゝ、喜び勇んで我々を迎へたり。此時互の喜悅の情は、實に筆紙のよく悉くすべき限りにあらず。彼等は我々の爲めに萬死を出でたりとて、懇々我々に向て其勞を謝し、我々も亦其無事を喜び、共に萬歳を唱へたり。此時我指揮官大塚少佐は、彼等兵士の内、先任者たる福田二等軍曹に向て、其勞苦を慰め、且つ戦況を問ひたるも、彼は嗚咽嗚咽し、涙下り語る能はず。漸くにして口を開き、自分等は已に全く敵の重圍に陥り、僅々たる兵を以て數千の兵に對し、彈盡さ食盡さ、如何とも策の施すべきなく、唯だ此上は屑く門外に突進して、死を決せんと期したりと言ひも了らぬに、自餘の兵士、口々に自分共の隊長小山中尉は、我々を援ひ出さんとして、已に二回迄も金州より突進し來りたれども、城外の敵兵は其數一萬に垂んとし、激しき抵抗を受け、二回共に其効を奏せず、斯る有様なれば、當蘇家屯の運命已に旦夕に迫りたる處へ、今此來援に遇ふ。是實に神助なりとて、皆々涙ながらに之を語る。實に左こそと思はれたれ(中

海兵分捕
砲を操縦す

蘇家屯大
連間連絡す

略)。蘇家屯にて分捕たる野砲は、長八珣砲にて、其數十餘門あり、此頃歐州より届きたるものと見え、最新の銃器なり。其内數門は、尙箱内に納めありたり。然れども、元と此陸軍兵は、歩兵なるを以て、之れが操法を解せず。金州城にても、此種の砲を使用せんとして、過て一人の砲手を失へり。因て、我海軍兵は、一々其機械部を分解し、充分の手入を施して之を發射するに、工合最も妙なり。乃ち之れが使用方を陸軍兵に教示したるに、彼等忽にして之れに慣れ、是れより此兵營より猛烈に銃砲を放ちたるに金州城に居る味方の兵も初めて蘇家屯に援兵到着したるを悟り、大に勢を得て同城よりも、亦同じく應發す。其勢頗る猛にして、忽ち東は金州・蘇家屯の間、西は蘇家屯・大連に至る間の聯絡を復するに至れり。斯く聯絡出來れば、蘇家屯よりは、直に二名の兵士をして、大連なる本營に報せしむ。本營に於ては、是に因て直に残りの海軍兵を、悉く出發せしめたり。是等海軍兵の着してより、蘇家屯の我兵勢益々強盛となり、相合して敵を射撃す。此時我々の敵を殺したるは、實に無數にて、旅順より來る萬餘名の敵兵は、恰も蟻の這ふ如く、山腹に黒線をなして、先になり後になり、争うて此地に來り、又復州より攻め來りたる敵兵も、相合して我々に向はんとするを、我々は金州並に蘇家屯より、烈しく射撃したるため、彼等は遁るゝに道なく、遂に金州灣を渡

敵屍續々
水上に浮ぶ

海兵敵銃
を拾て便
用す

敵の不働

らんとして、半身を水中に投じつゝ、泥中を徒渉するもの引きも切らず。之を射撃すれば、死屍累々として波上に浮ぶ。其壯快云ふ可らず。水兵等皆曰く、斯る面白き事には、未だ嘗て遭遇せずと。我々は携帶する百發の彈丸、已に盡くれば、分捕の銃器山の如く堆積す、直に取て之を用ふるに、其命中の正確にして、機械部の工合のよき事は、中々我海軍兵が、使用する『マーチニー』銃の比にあらず。就中連發銃の如きは、最新のものにして、我々の未だ見ざるの良銃なり。故に後には、尙ほ自己の彈藥あるに拘らず、却て敵の銃器を取て、之を使用するに至れり。而して此等分捕品は、敵の乗る所の馬匹を取て、之を運びたり。獵獲實に山の如し。

豚尾奴の働きを叙せんに、彼等は、八百『メートル』の遠距離に於ては、盛に射撃をなし、四百『メートル』に於ては遁走を始め、五十『メートル』に於ては銃を投じ、彈藥を脱し、躊躇し、合掌して助命を乞ふ。故に彼と戦ふには、近距離に利ありて、遠距離に不利なり。佐野少主計は、劍術の達人なり。氏は、此戦こそ大に其妙技を試みるの時なれと楽しみたるも、彼の豚尾奴は、接戦に至れば、忽ち合掌して助命を乞ふ。窮鳥懐に入れば、獵師も之れを殺さずと云へり。如何に血氣にはやる我々と雖も、合掌さるれば、流石に打ちも、斬られもされぬ

ものなり。斯かる有様なれば、氏も僅かに一人を斬りたる迄にして、失望の程思遣られたり。鹿兒島武士に對してこそ、抜刀隊の必要もありたれ。此豚尾奴を攻むるに、抜刀隊も其必要を見ざるなり。無煙火藥等も無効なり。寧ろ厭ふべき板橋製の二號火藥の如き、少しにても音の-high 火藥を利ありと思考するなり。又是等豚尾奴を生擒る事は、甚だ易き事なれども、出發の際兼て陸軍兵站部より、成る可く生擒は御免被下度との獻申もありたれば、僅かに七十三名を生擒りたるのみ。銃器を取り上げ、放免したるものも亦多し。小山田海軍少尉は、山路の險難を物の數ともせず、縦横無盡に奮戦せることなるが、同小隊にて捕へたる一人の支那人は、瀟洒たる美少年にて、身には黒絹を着け、頗る花やかに扮装して、美麗なる連發銃を携へり。必ず良家の愛見なる可し。銃を擬すること再三にして、衆之を殺すに忍びず。此際誰なりけん、花の敷盛を殺すなど叫ぶ者あり。躊躇するの際、小山田少尉は、將校なるを認めて、大喝一聲、唯汝等誤る勿れ、雜兵は逃すも、將校は逃すなど。衆意を決して之を射れば、忽ちにして倒れけり。又合掌する一人あり、免して分捕の武器を運ばしむ。彼れ喜で役に就く。其餓餓に迫り居るを知り、一人の水兵少しく食を分て之に遣はしたるに、彼低頭再三、大に其恩義に感じたる様子にて、暫く其水兵を注視して佇立せり。斯

小山田海軍少尉

分捕中の
最良銃

る有様なれば、騎兵馬匹、或は銃器の如きは、彼處此處に堆積して山となす。僅かに手を觸るの勞を費せば、直に自己の有たるべし。然れども、我々は遠路を持行くの便なれば、僅に五百餘挺を分捕り、悉く陸軍兵に托せり。是等の銃器は、彼の平壤に分捕りたるものと異にして、悉く皆善良の品なり。却て我々の使用する『マーチニー』銃に優る數等なり。弓矢、若しくは古式の武器の如きもの、一も之を見ず。中には我々の嘗て見ざる最新の連發銃三挺あり。我陸軍將校も、其製造の巧なるを賞し、是非にと所望せられ、二挺を譲り、一挺は之を海軍省に上納する爲めに持歸れり。

我半小隊の斥候は、斯く種々の困難を経て、二十二日午前十一時、蘇家屯兵營に達す。時に大塚少佐は本營にあり。報を得、乃ち各隊に令して、進軍の準備をなさしめ、此地を發したるは、二十二日午後九時なり。夜暗くして咫尺を辨せず、之に加ふるに、寒風は強烈にて、身體も吹き去られんとする程なり。元來此盛京省一帶は、樹木もさし沙漠たる廣野にして、道なく亦家畜し。或は田畑を横ぎり、或は峻坂を攀ぢ、進むこと二里餘。百方蘇家屯の兵營を尋ねると雖も、之を見出す能はず、此際最も困難を感じたるは、士卒は谿谷を上下することを得るも、馱馬は共に進行すること能はず。偶々少佐は東奔西走の際、輜重の所在を失す。之を搜

しつゝ、又本隊と相失す。而して號笛を用ひんとすれば、却て敵の認識する所となるのみ。此時少佐の一行は、富士川候補生、外六名なり。是に於て少佐は同行を集めて謂て曰く、我々は斯く敵中に彷徨するの境遇に陥れり。今則ち諸士の決心は如何と。衆皆曰く、一旦本營に引返すの安全に若かずと。少佐色を作して曰く、今金州の運命己に旦夕に迫る、金州にして敵の陥る所とならば、敵勢を増長する、果して幾何ぞや、今我四面敵を蒙る、我の進むと退くと、其危険一のみと。其聲風に和して判然聞取る能はず。偶々一人の策を述ぶる者あり、曰く、我々は決して退くと云ふにわらず、只進むに付ての策を述ぶるのみ。今我一行僅かに田口兵曹一人の携銃者あるのみ。今夜本營に至り、陸軍に乞て嚮導を得、且幾何かの兵員を引率して、再び來進するの優れるを云ふのみと。少佐之に従ひ、直に駈足にて本營に向ふ。其本營に達したるは、實に二十三日午前二時なり。是に於て少佐は再び大連の兵一分隊を率ゐて、同午前五時本營を發し、先づ蘇家屯に向ふ。將に蘇家屯に達せんとするや、敵の騎兵數十騎、歩兵八百餘人、前路を遮る、且つ諸方より同少佐の二隊を認めて來進し、猛烈に少佐に向て、狙撃をなす。少佐は身を岩石の間に蔽ふこと數次、忽ち刀を抜き、獅子奮迅の勢を以て突進し、漸く一方の血路を開きたり。是に於て、少佐は其傳令富士川候補生に

小隊長を命じて、敵中に突進せしむ。富士川候補生は、僅に十人の手兵を率ゐて進む。敵は殆んど幾百人なるや、識別し得ざるの大勢なれば、吶喊するも、其益なきを信じ、之に一齊射撃を行ふ。然れども、敵は大勢なれば、數人を斃さるゝも少しも痛痒を感せざるもの、如く、却て我兵の背後に迂回し來り、將に取圍まんとする有様ありて、少し退かんとするや、大塚少佐之を見て、二尺三寸の秋水を閃めかしつゝ、駈け來り、同候補生に向て追窮すべしと令す。因て同候補生は敵の右翼に向て吶喊し遂に之を兩分せり。是に於て敵兵の多くは、徐家山の方に向ひ、右翼百餘名は、旅順の方に向はんとす。同候補生は、すかさず之を追窮す。敵は進退谷りて谿間に遁れ、地物に依りて狙撃を行ふ。此時我兵、彈を蒙ること雨の如きも、益々進で之に迫り、遂に之を斃せり。亦快と云ふべし。此内一人の將校あり、美麗なる連發銃を携ふ。同候補生、直に之を奪ひ取り、之を用ひつゝ、尙は益奮闘し、遂に大塚少佐と共に、蘇家屯に達す。蘇家屯、金州邊に來襲せし敵兵は、或は殺され、或は逃れて、茲に東西の連絡全く相通するに至りたり。我海軍兵は、尙は金州方面に進入せんとせしも、旅順にある我陸軍は、味方の急を聞き、一大隊を以て來援する事となりければ、最早此方面に於ては、我海軍の援護を要せざるを以て、我々は去る二十四日午後二時、蘇家屯を出で、午後五時三

十分本艦に歸りたり(原文)。

我海軍一面の援護は、斯くの如く、又他の一面は、陸軍の旅順より來り援くるに會せり。是より先き、金州の警報旅順に至るや、大山大將は驟起使を馳せて、乃木少將を召し、命令を傳へて曰く、貴下は歩兵第十五聯隊の第三大隊、騎兵半小隊、山砲兵第六中隊を率ゐ、金州に向ひて急行し、以て其守備隊を援助すべしと。時に二十一日午後五時、旅順の大戦未だ全く終らず、準備未だ全く整はざるを以て、即日赴き援くることを果さず。因て翌二十二日の天明を俟て途に上る。行く／＼旅順の敗兵を破り、一陣の軍馬疾風の如く、金州に向ふ。其先鋒栗屋少佐は、途中軍司令部に向て急電し曰く、途中敵の敗兵を撃ち、又撃攘ひ進行中と。曩に我軍の旅順に向ふや、三日險を越え、三日敵と戦ひ、一息未だ次がざるに、今又十里敵に向ふ。而して其勇健斯の如し。既にして蘇家屯の營に達す。營内肅々として漫に語を發する者なし。少將は徐に大塚海軍少佐の手を執て、其勞を謝せられたり。辭し去り、進で難過嶺に及び、敵の數百と會し、幾之を盡して過ぎ、金州城の郊外に近づけば、軍と城との中間に一旒の白旗は、颯と靡き、旗の下より二百三十八名の敵は、忽ち軍門に降れり。我軍は、即之を容れて州城に達す。後に見れば、少將右手の手套は、鮮血斑々たり、以て其叱咤敵を斫るの狀を想見すべし。少將乃ち入て金州守備隊の司

大山大將の應援を命ずるに命ず

乃木少將大塚海軍少佐の勞を謝す難過嶺に敵を斫るに降兵二百餘人

河野金州守備隊長の報告

令官となれり。時に二十四日午後一時なり。初め金州城に來襲したりし敵は、即宗慶の部下にして、南、旅順口の清軍と約し、廿一日我虛に乗じて、金州城を夾撃するの策、蓋し李鴻章の命介に由るなり。旅順口陥るの日、軍は官文書を搜索して、其命令書を得。曰く、日兵旅順に向ふと聞かば、乃ち金州の虛を衝くべしと。是李が宋に與へたるもの、以て我旅順攻撃の力を割かんとせしを見るべし。

今又左に於て金州城守備隊長河野大佐が、報告書の要を掲げて、此戦況の詳悉を示さんとす(前略)。

二十一日、各大隊は未明より防禦陣地に就き、當面に斥候を派遣し、敵の來襲を搜索するに尤も力めたり。同午前十一時二十分、敵の歩騎兵數多群集し、前方に數旒の旗を併列し、三里臺子の南方高地上に顯れ、漸次に進み來る。同十一時三十分、三里庄前方高地に出せし小哨之に向て、一齊射撃數回を施したり。是に於てか、敵は二部に分れ、其一部は、復州街道の西方に、他の一部は其東方高地より前進し來れり。

爰に我守備隊の防禦配備を述べんに、金州城の北方高地に第一大隊を配布す、該大隊は、第一・第四・第三・第二中隊の順序に、之を山上に配布し、左側の金州灣の海岸に依托せり。之

を我左翼とす。第二大隊は、金州城東北の高地より、復州街道に至るの間、第五・第八・第七中隊の順序に配布し、其第六中隊は、金州城内に在て、専ら守備の任務に充つ。故に第二大隊の戦線にある者は、三中隊に過ぎず。而して第一大隊も、亦二中隊半は、徐家山砲臺、其他に守備の爲め分遣しあるを以て、殆ど一中隊の兵力を缺けり。如此寡少の兵を以て、四千米突以上の面を守備す、實に危殆の守備線なり。然れども、最早他に依るべきの兵力なく、只死守するの外手段なきあり。是より先き、金州城東北隅及び、東門上に、去る六日敵の遺棄せし八珊の古肩布野砲各二門ありしを以て、兩三日來萬一の用に供する爲め、城内守備隊の一部をして、砲煩使用を數回演習せしめ置きたり。正午十二時過ぎ、敵兵益々前進し來る、城内の守備隊、野砲を發して、其勢を挫かんとす。暫時にして敵兵の本道にあるものは、敢て近接せず、兵力を右左に分ち、金州城北方の高地と、東北方の高地とを目標として猛進し來る。我左翼第一大隊の線に向ひ來るものは、十三里臺子よりするもの、外、海岸及び、其東方の山を越來るの二縱隊あり、敵の行進法を見るに、縱隊及び、横隊の如きものを見ず。錯雜なる散兵と、側面縱隊とを以て進入し、其正面は、六千米突後方、四五米突間、山となく野となく、白馬の騎兵五十、若くは百騎群をなして、東奔西走するあり、實に壯觀警ふる

にものなし、我左翼に向ふもの、歩兵四千を下らず、我右翼に向ふもの三千に下らず、而して騎兵は三百騎以上ならんと概算せり。

是より先き、石門子の小哨たりし平野少尉は、第七中隊の一小隊を率ゐ、我右翼に歸り、第五中隊に合して防戦す。我右翼に進み來る敵兵は、我射撃するをも顧みず、又暴進して、漸次我右側の高地に攀登し來る、平野少尉防戦大に力め、遂に爰に敵彈に斃る。第五中隊も、亦防戦尤も力む。是に於て第八中隊一小隊を増援として、右翼高地に至り、第五中隊に協力せしむ。時に城内にある野砲は、此敵を目標として劇射す。其効力頗る顯はれ、敵勢を挫くを得たり。我右翼の戦尤も熾なりしは、此時にして、午後一時二十分なり。或は敵の一部隊、徐家山方面に突進せんも計り難き景況あるを以て、城内守備隊たる第六中隊に、四門の衛兵のみを残し、餘の二小队を以て、右側の高地にある敵に向て前進せしむ。

午後二時三十分、旅順陥りたるの風評をなすものあり、士氣大に振ふ。第五中隊及び、第七中隊の一小隊、第八中隊の一小隊は、勇を鼓して奮闘し、第六中隊の進み來るに協力し、遂に高地にある敵を撃退することを得たり。敵兵一度高地を失ふや、最早支ふること能はずして退却を始む。是に於て第八中隊、他の一小隊をして、側背より追撃せしむ、時に午後三時

十五分なり。

我左翼第一大隊の當面より來りしものは、行進餘り快速ならず、旌旗堂々として、徐々我線に迫る。我各中隊は、山上防禦陸地の内斜面に在り、成るべく之を隱匿し、敵の近接を待たしむ。其近接に従ひ、或は一齊射撃をなし、或は撰拔射手をして狙撃を爲さしむ。其四百米突の距離に接近し來るや、俄かに全線をして射撃を開始せしむ。敵兵驚き、前進を止め、各地物に據て應射す。然れども、山上に在りて瞰射する射撃の効力著しく、暫時にして隊伍動搖す。此時恰も我右翼に迫るの敵兵退却し始む。是に於て、我兵勇氣を倍し、猛烈なる射撃をなす。敵兵遂に退却す、仍て總射撃之を追撃す、時に午後三時三十分なり。

前項の如く、復州街道より進出したる敵兵は、全く目的を達すること能はずして敗退せり。仍て五個小隊をして、二三千米突前進追撃を爲さしむ、敵は悉く十三里窪子に向て退却し、午後四時過ぎ、戦全く止む。間もなく日没に至れり。然るに我左翼に向ひ、海岸より來りしもの(三千餘名)は、日没に至るも、尙退却せず、然れども我兵寡少なる爲め、之を撃退すること能はず、夜半に至り、彼自ら退却せり。

本日の戦、豫備歩兵少尉平野永次の率たる第七中隊の一小隊は、頗る苦戦し、終に小隊長

は戦死するに至れり、他の第五中隊及び、第八中隊の一小隊(永田中尉)は、戦闘尤も力じ、而して其死傷全數左の如し。

戦死 士官 一名、 下士卒 八名、

負傷 士官 — 下士卒 四十六名、

敵の死傷者は、無數にして其遺棄せし死體五百餘を目撃せり。

聯隊に附屬せし騎兵小隊は、此日終始金州東門外に在て、我右側の監視及び、偵察を爲せり。

金州城内外の守備隊は、歩兵二大隊と、騎兵一小隊とにして、其中徐家山砲臺の守備、城内、其他軍用建物の衛兵等にあるもの四小隊餘、乃ち歩兵一中隊半を欠けり。大元帥陛下の御稜威に因るにわらずんば、何ぞ能く此僅少の兵を以て、我に七八倍する大敵を撃退することを得んや、獨り遺憾なるは、目前敗退の敵を見るも、已に使用すべき豫備隊なく、追撃の効を逞うすること能はざりしの一事なり、日没に至り、左の命令を下す。

(十一月二十一日午後四時於金州城北門外)

一 前面の敵は、敗走せり。聯隊は進撃を止めよ。

命令

二 第一大隊は、信地に露營し、其方面の敵を監視せよ。
三 第二大隊(第六中隊欠く)は、其一個中隊を三里庄に、一個中隊を東門外に、一個中隊を北門外に置き、各自其前方を監視せよ。

四 城内守備隊たる第六中隊は、城内に復歸し事務に復せよ。

五 騎兵小隊は、徐家山方向搜索の後、東門外に宿營せしむ。

六 本官は、北門外聯隊本部に在り、午後九時命令受領者を出せ。

茲に又大山大將は、旅順口に在りて善後策に汲々として、惟れ日も足らざる有様なりしが、其整理も略ぼ緒に着きたるより、十二月二日を以て、再び金州に還り、切りに占領地撫循の計畫及び、將來の運動上に於ける畫策を講じたり。而して金州廳は、荒川領事の來りて、行政事務を執るの日、尙淺しと雖も、其措置各々宜しきを得て、清民の脱服大方ならず、今其大略を記せば。

一 行政區域、金州市街を東西南北の四區に分ち、其一區に區長(清人)の如き者を置き、其區内人民の取締となさしむ。但清國官吏の賄賂を貪り苞苴を徵するは、古今一轍の弊、故に右區長は、單に其監督の任を委するのみにして、一も事を決し物を處するの權を與へず、即ち司法行政警察の事を處決するは、總て知事の權限に屬す、是れ全く賄賂苞苴の弊

大山大將
金州城に
還る

金州行政
廳の事務

資を壅塞するに在り。

一 戶籍調査、市街村落の戶籍を調査するは、行政上最も必要の事なれども、當行政廳は、第二軍司令部の到着後、即ち十一月十二日を以て創設し、吏員を集め、文具を備へ、僅に廳を開くや、本軍は同月十七十八の兩日を以て、旅順征討の途に就き、金州は守備隊を以て、四邊を警戒せしめたりしに、其の廿日に於て、復州兵の襲撃を受け、爾後兩三日晝夜砲聲絶え間なく、殆ど行政事務を實施するの暇を得ず。然れども其、向の概算に依れば、戶數凡三千五百、人口は一萬八千を超ゆるべし。現に屬員を督して、家屋番號を調査しつゝ、あれば、之を戸毎に貼附する事とし、而して後其戶口の正確なる數を確かめんとす。

一 行政の方針、當時清官は、悉く逃竄して舊政を聞知するに由なし。假令今之を聞知するも、其採るに足らざるや明なり、故に悉く新規新則を立て、以て之を支配せんとす。然れども此方針たるや、敢て周密無限のものにわらず、先づ衆民をして、各自其職業に安んじ、盜賊横行、眠食を廢するが如き困難を脱せしむるにあり、蓋し之を統轄する上に於て、漸次多少の法律規則を制定すべからざるも、要するに、新占領地に於ける日本帝國政府の行政事務として、歐洲諸國人の非難を受けざるを目的とするにあり。其普通政治を施行するの

日は、尙ほ局面を一變するを期するも、今日に在ては、寧ろ取締法の一部の實施と云ふに過ぎず。

一 開市の方法 市を開き諸物貨を鬻賣せん事を請ふ者あり然れども時機尙ほ早くして徒らに紛擾を益さん事を慮り其期の孰するを俟ちつゝありしに今や相互の人氣稍々平和に歸し之を開くも敢て弊害あらざるべきを認む因て日時を定め北門及び東門の街衢を畫して市場に充て開市を許すの結構なり但し許可の證として其商業及び住所姓名を記したる鑑札を附與すべきなり是れ其取締上に必要なり又他日課税調査の事あるに當り一應の便利に資せんとするに在り。

一 盜賊の取締、變亂に乗じて、強盜を働くの支那人、多きは固よりなり、是等は既に充分の取締をなしつゝあるも、彼の空屋杯にある家財を持去るものは、我が憲兵等の目より見る時は、其家の主人なるや、家人なるや、又其眞個の盜兒なるや、之を判別する能はざるに就き、此の邪魔ものを攘ふ爲め、二三の支那人を選んで、其監察役たらしめ、以て之を發見し、之を拿捕せしむるの考案中に在り。早く此方法を實行せざれば、彼れ遁竄者の歸宅せし曉、正廉潔白なる我兵士等が、あらぬ嫌疑を被るべきやも知るべからず、是れ最も苦

心する處なり。

一 諸物品の價格、需用供給の權衡を得ざれば、其物貨の價格に甚しき高低を生ずるは、又勢の免れざる所、今や俄然無慮三萬餘の軍勢を駐屯せしめられたれば、金州市街は、殆ど百貨絶滅の運に際したり。されば、其の物貨の高價なることは、又是自然の數と云はざるべからず。併し之が爲め相互の感情を害し、店頭に、路上に、口論格闘をなすが如き、惡態あらんことを虞り、二三の小賣店に、日々憲兵を派し、以て其買賣上の監督をなさしめたり。尤も此等の煩累を除去するも、蓋し近日の中にあらん。

右は荒川知事の談話に係る。蓋し其用意施設の如何に周到なるかを見るに足る。知事は尙彼我通貨の取引に就き、一面に非常の煩累を極め。一面には非常の不便を感じたりしが、竟に彼我折衷秤量の上、即ち彼の一兩を一二二圓二十錢とし、我の一圓を七〇(七十錢)と定め、以て其取引の便路を開きたり。而して尙ほ之を兩、韓錢若くは、墨銀に引替へんことを欲するものは、何時にても我が金櫃部に於て、之れが交換に應ずることとし、即日左の告示を發したり。

大日本帝國一等領事官金州行政廳知事荒川示、

懋遷所^ニ以裕^ニ民生、而貨幣所^ニ以便^ニ懋遷^ニ也、茲^ニ以^ニ大日本國通貨價位、比^ニ照清國銅錢、開^ニ列

通貨に就
ての告示

干後、以示行情、但是茲以大日本國銀貨、或銅貨、換銀兩若銅錢者、隨時來稟請行政廳、照市交給不錯、

大日本通寶價位

- 一圓銀貨 換清國銅錢一千一百四十個
- 一五十錢銀貨 以二個換一圓(以下換錢照前)
- 一二十錢銀貨 以五個換一圓 一十錢銀貨 以十個換一圓
- 一五錢銀貨 以二十個換一圓 一五錢白銅貨 以三十個換一圓
- 一二錢銅貨 以五十個換一圓 一一錢銅貨 以百個換一圓

又我軍旅順を陥落せし時、金州行政廳の告示に曰く、

凱切曉諭事、照得、昨夕我軍全得旅順、所有北山一帶、清兵不過數千、昨日經戰、全軍敗北、既挫其鋒、何足爲虞、我軍復由旅順派兵、再來速行剪除、再闢郡商民等、各宜安堵、勿庸驚慌、切々特示、(明治二十七年十一月二十二日)

旅順陥落
後金州府
の告示

更に我軍旅順より復歸するに就き、同廳の告示に曰く。

凱切曉諭事、照得、我軍自旅順回城人馬輻輳雖有空房、兵營寥寥無多、實係不敷、駐紮熟思至再派暫借民房、不足濟事、須知我軍法律極嚴到處秋毫不侵、在在皆以保護商

民爲心無微不至汝商民等須與我軍親洽互相保衛以免驚擾爲此出示曉諭爾商民人等各宜體棚房間勻便借住凡房內婦女湊集一室房主各守門戶不無不擾勿相疑慮倘我軍不守法規准其到衙聲報必爲究辦汝商民其各凜遵毋違特示(明治二十七年十一月二十八日)

當時戰亂の餘乘して以て奇利を射る者あり爲めに物價暴騰我軍需要する所往々其價平ならず因て又左の告示あり。

爲告示嚴切曉諭事照得我軍自抵金以來在々以愛護人民爲心毫無侵擾斯以勵諭商民設局供給我軍需用各物價值祇應從公決不宜漁利薰心高抬時價茲查得所賣貨物價值太昂當此貨物短小之頃自不能不價值稍高然我軍爲此保護爾商民無天良爲此書亦教切曉諭爾商民人等認期冬發天良從公論值敢量定價勿使我軍退有後言屬允當自示之後如尙前誤抬高價定且我國法律最辨決不姑宥爾商民人等其爲凜遵勿謂言之不願也切々特示(明治二十七年十二月一日)

是より先き、金州城陥落の後、我第二軍司令部は、難民の道途に彷徨するを憐れみ、行政廳と謀りて、其門前に施粥所を設けたりしは、既に記し、如く、爾來來り嘔る者日々千餘人、既にして市政

敵屍の埋葬

稍整理に就くに及んでや、乞ふ者頗に減少せり。是或は近傍戦團の終了すると共に、各自就職の道を得しに因る者もあるべけれど、其多分は自然我軍人軍屬等と相踴み相昵しみ、其二食の餘剩を乞ひ得て、之を食するの風をなせしに因るもの多しと云ふ尙我軍の仁慈なる、敵兵の負傷せし者は、之を救ひて我野戦病院に入れ、彼我の別なく治療を與へ、若し不幸にして、死に至る者あれば、行政廳は之を引取りて、相當の埋葬を營む事とし、現に死亡せし二人の敵兵をば、西門外の墓地に慰懃の葬儀を行ひ、且つ清國何軍何兵、某年月日死と書したる一個の墓標を建て、永く其靈魂を吊ふの資に供せり。彼の清兵如何に殘忍なるも、之を聞かば定めて慚感交々至らん。

復州枝隊

是に至て、我軍内は、占領地に向て其亂後を整理し、外は大敵を擯斥したりしかど、敵は毎に我隊を伺て、屢々回復を圖る、是に於てか、我軍北進を急げり。北進の軍を、復州枝隊と稱す。我第二軍司令部は、此枝隊に下命して曰く、金州より、復州及び、蓋平縣、熊岳城に通ずる咽喉たる要衝、普蘭店方面を警戒し、且つ若し敵情にして、爲し能ふべくば、直に復州城を屠るべしと此命令を受けたる一枝隊は、實に第一師團の歩兵第一聯隊及び、山砲一中隊、騎兵一中隊より編成せられ、第一聯隊長隱岐中佐之を督せり。十二月一日午前七時三十分、金州城を出發す。乃木少將以下數名之を北門外に送る。此朝寒氣大に加はり、河水凍り、北風耳を斫るが如し、正午に至り、腰厨

隱岐中佐の枝隊出發

を開けば、飯は氷りて石の如く、民舎に入りて一釜の湯を得んとするも、去る二十日我金州守備隊を襲ひし、支那兵の掠奪に遇ひ、人民は勿論、家財一も有るなく、水飯を喫するの止むを得ざるに至りき。此夕金州を距る六里半許の五十里堡に舍營す。此舍營地は、金州襲撃支那兵の舍營せし所なるを以て、釜碗一もなし、凡そ支那兵の過ぐる所、盜竊至らざる無し、故に人民悉く逃走し、後影を留めず、沿道の民舎、所々に旅順敗兵の傷者を見る。彼れ等は、旅順攻撃の翌日、逃れて金州城の北方海に入りて走りしを以て、多くは寒氣の爲めに足を凍傷せし者なり。天罰なりと雖も、亦憐れむべし。十二月二日、五十里堡を出發し、五里許にして、普蘭店に着して舍營す。此地は去る廿六日まで、支那兵の滞在せし處なり。故に荒涼の狀前諸村に比して、一層甚しく、一羽の雞も連城の壁に値す。此の夜の支隊命令には、明日此地に止まると云ふ。同三日枝隊より、蓋平街道、復州街道の二路に大偵察隊を派す。此夜歸來報じて曰く、復州には敵無し、旅順の敗兵及び、金州城襲來の敵兵は、復州に出です。直に蓋平に向ひしが如しと。此夜の枝隊命令には、明日此地を發して、復州街道三官廟に進むとあり。四日未明寒を衝て普蘭店を發す。行路の河流悉く凍結し、山砲駄馬も、尙其上の往來自在なり。十時頃舍營地三官廟に着す。此地は、清兵の掠奪甚しからず、稍々物を得べし、此夜命あり、曰く、明日一部隊をして、復州城に大徵發を

徵發大隊

行はしむ。五日三官廟を發し、復州に向ふ。徵發隊は、第一聯隊第三中隊、第八中隊、第十一中隊及騎兵一中隊より編成せらるゝ、混成大隊にして、粟屋少佐之を指揮す。外に駄馬四十五頭、砲兵駄馬五頭を加へ、都合五十頭の駄馬を有す。行々停騎哨を置き、此夕馬園子に舍營す。雞肉山の如し。此夜の命令には、明日復州城を距る一千米突の所に、本隊の止まり、騎兵は直ちに進んで、四門を鎖して城民の物品を運び去るを止む可し。又騎兵の一隊は、電信線を切斷すべし。六日東天猶ほ暗きに、徵發隊の復州城に近くや、斥候騎兵は、報じて曰く、城門開けて戦を待つもの、如く、敵の隻影を見すと、乃ち馳せて復州城に入り、一戦に及ばずして之を占領せり。此地は渤海灣を距る東數里の地にある市街にして、天津よりの物品は、娘々宮を経て來る地なれば、商戸稍々繁昌なり。町幅は金州に比すれば狭きも、家屋の壯大なるもの、實に人目を驚かしむ。戸々に大日本順民と大書したり。城壁は高さ四十尺許、巾十尺許にして、西門を設けず、東南北の三門は、何れも穹窿狀の二重門石造にして、壯大なる鐵扉を設く。城の廣さ南北八百米突許、東西は六百米突許、外濠を繞らし、其外尙一丘を築き、第一防禦線の如きを設く。四面は山遠く、其最も近きものにして、三千六七百米突を隔て、南方に當る。然れども、深林城を蔽ひ、樹間より少しく山を見るのみ、概して之を言へば、金州城よりも、防禦に安く、攻撃には難かる可

復州城の占領

し。此行枝隊長の命令には、米、砂糖其他の食用品及び、防寒衣類を徵發し、歸るべきの目的ありしも、米は産物にあらざるのみならず、開戦以來、南支那より之を回送し來らざるを以て、得る所僅少にして、殆ど無しと云ふも可なり。但砂糖は、紅・白・黒共に何れも澤山なり。又他の食物に於ては、菘類・パン粉の類にして、其防寒具は皮裘數百點を得たり。同八日未明、駄馬を中軍に夾みて復州城を出づ。七里にして、宇家店に舍營す。九日未明、出發、十時半頃三官廟枝隊本部に歸る。是に於て、復州枝隊の任務は終りを告げ、第一旅團司令部は、昨日を以て同地に着し、乃木少將も、亦其中に在り。我軍既に復州を占領せしより、久しく駐軍以て英氣を養へり。既にして、十二月二十一日、想起すれば、旅順陥落後滿一月に相當す。去月今日、我忠勇なる軍隊が、奮戦突撃、堅壘を抜き、以て敵國の關門を開きたりし日なり。當日苦戦の狀を思ふ、豈に多少の感なからんや。是に於て、長谷川混成旅團長は、同日午前九時を卜し、旅順口西北練兵場に於て、其戦死者の爲に、鎮魂祭を執行したり。祭壇は、城の西北位なる射臺の下に築き、塙の入りより、城内に至るまで、諸種の作り物、鬱然たり。旅團の將士、祭壇の前面に整列す。祭壇は五間に三間の白木製にして、壇に綠門を建て、鎮魂祭の三大字を記したる大旗を掲ぐ。神威最も森嚴なり。祭式の始まるや、旅團長長谷川少將、祭壇に上りて、祭文を讀む、曰く。

旅順口の鎮魂祭

鎮魂祭の祭文

維れ時に明治二十七年十二月二十一日、第二軍混成第十二旅團長陸軍少將勳二等長谷川好道、謹んで祭壇を我軍の占領地たる旅順口の西北練兵場に設け、聊か清酌時差を供へ、以て鎮魂祭の典を挙げ、戦死者諸君の英魂を慰む。嗚呼、旅順の守堅からざるにあらず、而して之を抜くの易きは、我軍の銳利に在るなり、之を碎くの易きは、我兵の勇猛に因るなり。旅順は、敵國の鎖鑰なりとは、頃る賜ふ所の 勅語にして、又世界各國の公認する所なり、今や一朝其鎖鑰を毀ち、敵國をして自ら關門を守る能はざらしむるに至るは、固より我皇の威靈に籍ると雖も、然れども、亦た誰れか諸君の力にあらずと謂はんや、渤海は桑田に變ずるも、諸君が義勇公に奉ずるの偉功は、千載を亘つて埋れず、長江は溝渠となるも、諸君が忠誠國に報いるの芳名は萬國に流れて滅びざらん。嗚呼、去月二十一日を以て、旅順を抜き、本月二十一日を卜し、諸君を祭る。其間僅かに三句のみ。好道の眼中、宛として諸君が突戦奮闘の状を留む。諸君の靈にして知るあらば、尙くは來り攫けよ。

と、其聲沈痛聴くもの悚然起敬、皆感泣す。旅團長の拜禮及び、祭文の朗讀終り、將校相繼いで拜禮し、次に各小隊毎に、進んで拜禮す。此時砲兵は百一發の祝砲を發し、次で又地雷火二十一發を爆發す。祭式の全く終りしは十一時頃なり是より各隊適宜の場所に座を占め、大樽の鏡を抜き

祭宴及作り物

て、鯨飲數時、肴は干鰯・佃煮・鰯・昆布の類、且つ飲み、且食し、各歡を極めて息ふ當日の作り物は、皆巧妙を極めたり、練兵場の南方より、祭場に進めば、先づ赤毛布を以て作りたる大華表あり、扁額には鎮魂祭の三大字を書す。次に綠門ありて、扁額の三大字亦華表の如し。場の前に橋あり、其中央に鎮魂祭の扁額、次に青毛布の大華表ありて、吊忠魂の文字あり、次に又綠門及び、扁額には慰忠魂の字を書す、場に入り、右に回れば、一兵卒の李鴻章を捕縛するの状を作る。李鴻章は、死豚の皮を以て之を造り、其半死半生の状、眞に迫る、次に一町餘を隔て、大華表あり、帯皮を以て之を作り、鎮魂祭の扁額あり。次に擔架を以て作りたる華表ありて、祭壇に達すれば、其左右には櫻花の開きて爛熳たるあり。是れ楊柳に紙製の花を着けたりしものにして、一望春風駘蕩の感あり。各壇は、白木製にして、前に綠門あり、鎮魂祭の額ありて、供物山の如し。其兩側には、筵を以て作りたる大砲を砲車に載せ、駱駝に引かしめ、巨彈を添ふ。臺上に清兵ありて之を指揮す。次に一大蜻蛉あり、灣口に下りて呑み乾さんとするの状なり。表記して、蜻蛉大灣を呑むといふ。次に李鴻章が大なる螺貝を吹きながら倒れたる状あり、記して李鴻章大螺貝の吹き倒れと云ふ。次に北京・天津・臺灣・奉天府等を雪にて山の如く作り、旭日を出して融解するの状あり、次に一清人が支那兵の軍服を、山の如くに積み、一商店を開きて、日本兵に賣るの

狀、記して品(支那)の大見切り、木店は北京直隸町、李鴻章支店の、旅順町末慶と云ふ。次に一兵あり、義と記せし圓板と、富士山と記せし圓板とを擔ぎ、義は泰山より重さの意、又死と記せし圓板と、一羽毛とを擔ぎ、死は鴻毛より輕さの意を示す。次に備後三郎櫻樹に題するの狀、次の日本兵が筵を以て支那國を包み、之を引き行く狀、次に祭壇の入口に赤毛布を以て作りたる大旗二旒ありて、吊忠魂、義魂功名照萬世の文字あり、次に四枚續きの筵の大旗には、忠魂義魂と記し、其他旌旗翻々として風に舞ふ。尙此他に作り物の、日本刀を以て蘭葉を作り、其花は靴足袋、體の毛布、鉢の握手の、「ハッパ」を以て作れり。此日最も人の眼を惹きしは、手踊忠臣藏なり。此手踊りは歩兵第十四聯隊第一中隊の兵士及び、人夫若干之を演じ、其衣服は、總て分捕品を用ひ、頗る喝采を博せり。死者亦以て瞑すべきなり。此日に於て、金州及び蘇家屯に於ける我軍亦鎮魂祭の舉あり。金州にては、城南なる墓地に於て、方五十間の中央に招魂の碑として大方柱を立て、祭主河田弘次郎、祝詞を讀む。曰く、

金州の鎮魂祭及祝詞

掛卷毛綾爾畏此齋場爾、仕奉留教導職河田弘次郎、慎美敬比恐美白佐久、我皇大御國乃第二軍仁從比、八重乃潮路乎押渡里、遠使此異國乃地爾戰沒志、或敵乃毒手爾斃禮、或病乃爲爾歿里給比多忠爾赤使軍人軍屬等乃御魂乎今日乃生曰乃足日爾、金州城南乃郊原爾齋場乎設氣、汝命等乃御魂遠

此齋場爾招伎慰奉里、御酒御饌乎備調、毛荒物文重物冲津藻邊津藻野山乃物乎彌瀾高爾置足波且、御國乃爲爾歿里給比多忠爾、赤使汝命等乃御魂祭爾仕奉留樣遠平氣安氣聞召止、恐美恐美白須。又山地第一師團長の祭文に曰く。

山地師團長の祭文

維時明治二十七年十二月二十一日、第一師團長陸軍中將男爵山地元治、忠勇なる從軍戰死諸氏の靈に告ぐ、我軍遠く此地に進み、未だ六旬を出でざるに、交戦數次利あらざるなし、其金州城・大連灣・旅順口の如き、敵を以て國防の樞要と爲す所、我軍相續いで之を取る、諸氏の奮戦死闘、其効與りて力あり。抑も國家の爲めに一身を抛ら、芳名を萬世に傳ふるは、軍人の本分況や國光を海外に發揚するは、人の以て榮とする所、蓋し諸氏に於て、遺憾なかるべし。尙くは瞑せよ。

而して後に第二聯隊・第三聯隊・砲兵聯隊・工兵聯隊・騎兵大隊・輜重大隊・衛生隊・彈藥縱列・大架橋縱列・小架橋縱列・第一野戰病院・第二野戰病院、順次に之を參拜し、大山大將も、亦來會せり。同日第二軍所屬騎兵第一大隊も、蘇家屯兵營に於て、此式を舉行したり。時に騎兵大隊長秋山少佐の朗讀せし祭文に曰く、

蘇家屯の鎮魂祭に祭文

維時明治二十七年十二月二十一日、我騎兵第一大隊は、征清第二軍の略取せる蘇家屯兵營に

於て、戦死者招魂祭の奠を擧げ、以て其靈を吊す。抑我騎兵第一大隊は、花園河口上陸より、旅順陥落に至るの間、連日間断なく、百難を排除し、其本務を達せん爲め、深く敵地に進入し、敵状偵察・地理偵察・統計偵察に従事し、以て本軍の戦闘行軍宿舎に關する計畫を容易ならしめ、又常に軍の周圍を警備するに、最も力を盡せしを以て、毫も我軍をして、不意の敵襲を蒙むることなからしめたり。且つ屢々脅威を逞うして、敵地を擾亂し、電線を破壊して、交通を遮断し、以て彼の作戰計畫を妨害し、時には我に十倍せる敵兵と交戦して、我後續部隊をして、陣地の要點を占領せしむるの時間を與ふる等、眞に我騎兵第一大隊創立二十餘年以來、始めて戦時に於ける騎兵の功績を多少顯はすを得たり。此功績の、常に難事に遭遇するを以て、一身の快とし、誠實以て其任務を遂行せし我忠勇なる戦死者の力與つて最も多きに居る、嗚呼、其芳名は永く竹帛に垂るゝのみならず、餘力の及ぶ所、後來我騎兵第一大隊の光輝を、益々發揚せしむる爲め、最良の紀念となる可し。旅順の陥落するや、我大元帥陛下は、優渥なる勅語を賜り、深く其功勞を嘉賞せられ、第二軍の諸隊を始め、全國民は、擧て其戦勝を祝すと同時に、各地招魂の奠を擧げ、熱涙の下に戦死者の忠魂を慰せり。嗚呼、我忠勇なる戦死者は、感泣して瞑目するを得ん。

我騎兵第一大隊將校下士卒は、謹で茲に祭典を設け、誠實誠意を以て、我親愛なる戦友、陸軍騎兵一等軍曹藤堂立、同騎兵一等卒飯尾金彌、同小野田勝三郎、同二等卒荒井斧三郎の忠魂を招く、死者靈あらば、請ふ來り纏せよ。

明治廿七年十二月二十一日

騎兵第一大隊大隊長 秋 山 好 古

嗚呼、當日我軍各隊の感情果して如何、朝夕相談笑せし戦友は、今や幽明其界を異にし、一は祭り、一は祭らる。生けるの人は、耳目の間に其聲容を認むるの感ありしならん。日を隔つる前二日即ち同月十九日には、又別に金州及び、八里庄に於て、第二第三兩聯隊共に、各々軍旗祭を執行せり。蓋し同日は、嘗て軍旗を授與せられし佳辰に當り、聯隊の最も名譽ある紀念日なれば、なり。

茲に甲午の年もはや暮果てぬ。明くれば明治廿八年一月一日なり。天は長く、地は久し、日月の照臨する所、我皇威の赫々たる所、皇國八十餘州を始めとして、新占領地は、實に一千八百四十餘方里、我征清軍の各隊は、幾久しき君が代を異國の空に唱へ、開闢以來、嘗て例しなき新正を羈旅の曉に迎へて、軍馬倥傯の間に屠蘇を酌む、亦是人生の一大快事なり。朝暎は輝々として徐家山頭に躍り、瑞雲は霞々として金州城中に懸り、翩々たる日章旗は、徐ろに風に翻りて四通、八達の

金州及八里庄に於ける第二聯隊の軍旗祭

占領地に於ける新年の光景

軒頭に揚る。朝來日暖にして、氣澄み、天意、恰も我遠征の軍人を慰するものあるに似たり。金州の賀正場、軍司令部邸内左側の奥庭に設けられたり。入口には、貼示して賀正交換所と記せり門を入れば、塲側に二三の古梅樹あり、花馥郁、此は是れ當日賀場の裝飾として、新に作られたる花なりけり。式場は、正面にある廟の如き小堂内に設けられぬ。堂内の右室には、我 天皇陛下の御影を安置し奉り、影前には、高く御重の飾餅を供し、堂の入口には、大山第二軍司令長官及び、井上、大寺の兩參謀長、椅子に凭りて各將校の來賓を受く。各將校は、定刻より陸續來會し、何れも軍服に勳章を着け、意氣壯なり。先づ式場の御影を拜し、次に司令官及び、各長官に祝詞を述べ、而して後皆中庭に集り、互に新を祝し、正を賀しぬ。正午に至るや、豫て用意の酒を汲み、鰯及び豚肉等の饗應あり、又別に「シャンパン」酒、葡萄酒等の回盃あり、快談滿酌、數刻の後、午後四時頃に至て散會せり。願れば、我軍は客廳歲暮、或は軍旗祭に、或は紀念祭に、今又新正の祝典に、日々歡樂の中に幾多の光陰を送迎し、前途殆ど敵無きもの、如し。當時我第一師團の宿營する所、師團司令部、歩兵第二旅團・騎兵大隊・砲兵聯隊・工兵大隊（第一中隊を除く）及び、輜重縱列は、金州附近に、歩兵第一旅團司令部及び、第一聯隊騎兵小隊・工兵第一中隊・衛生隊半部・並に彈藥糧食、各縱列は普蘭店附近に、歩兵第十五聯隊（第一大隊を除く）の、北三十里堡附近に、及

び歩兵第十五聯隊の第一大隊は魏子窩に駐軍したり。而して敵は金州敗北の後、復州には立寄りせずして、直ちに蓋平に走り、集る者實に雲霞の如しとかや。此大敵を眼前にし、我軍豈に優遊徒過するものあらんや。此間に處し、尙肅として須臾も、其行動を止めざりき。今や準備も整ひたれば、將に大に動かんとす。而して其向ふ所、果して何れの所ぞ。

第十八 蓋平城の激戦

蓋平に向
ふ混成十
一旅團

是より先き、我第二軍の旅順を陥るゝや、其後作戦の事、一時中止の姿となり、聞として聞く所なかりしが、十二月三十日午後に至り、一の命令は第一師團に降り。曰く、一の混成旅團を作りて、蓋平城に向け差遣すべしと。是に於て第一師團は、更に命令を各地に傳へ、混成旅團を普蘭店に集合せしむ。即步兵第十五聯隊は、北三十里堡及び、獺子窩より、騎兵砲兵及、輜重縦列は、金州附近より、皆一月一日を以て出發し、翌二日に普蘭店に集合し、終る。此混成旅團は、乃木少將之を率ゐ、歩兵第一旅團騎兵大隊（金州に一小隊を残す）、砲兵第二大隊（野砲）、工兵第一中、既隊・衛生隊半部・野戰病院一、及び輜重縦列若干より成れり。此時は當て、我第一軍の第三師團は、大孤山より岫巖を経て、柞木・海城を占領したり。故に途に個々の一部隊を残して前進せしにより、其海城に至るや、我兵は實に半師團、即ち一旅團たるに過ぎず。然るに宋慶は、當時田庄臺に據りて兵を纏め、蓋平城には、五千乃至六千の兵あり。又遼陽方面よりは、一萬乃至二萬の敵兵南進せんとするの報知あり。されば、海城なる第三師團は、今や遼陽・田庄臺・蓋平の三面に敵を受けたるなり。故に我第二軍は、爰に一師團の兵を出して、先づ蓋平の敵を打ち攘ひ、而して後第

海城に於
ける第三
師團三面
に敵を受

三師團と、連絡を通せざるべからず。是に於てか、蓋平攻撃の議起る。此議の起りしは、即去歲十二月二十一日に在りと雖も、第二軍の兵站地たる、柳樹屯より蓋平に至る其距離は、實に我五十里餘、運搬の困難少からず、故を以て蓋平に進軍するに就ては、種々の準備を要し、爲めに若干の日子を空過せしが如きの觀ありき。是に至て、始めて出發の命令に接し、乃木少將は、乃ち混成旅團長として、本隊を率ゐ、復州街道より進み、隱岐大佐は、枝隊長として、蓋平街道より並び進めり。是實に新なる二十八年の吉兆なる我前途なりけり。此行其出發の準備には、前途寒地に進むことゝて、諸隊は非常の勉強を以て、馬匹氷上蹄鐵の用意として之を作り、次には防寒具の處置として、毛布製の外套、其他の毛布なり。北進旅團に於ては、殊に必要なものなりしと雖も、如何せん、各兵をして之を携帶せしむること能はず。運搬の便を缺くに由り、止むことなく、之を宿營地に殘留せしめたり。當時蓋平地方は、寒氣嚴にして、通常の行厨は其食料凍結の患あるを以て、晝食用としては、皆『ビスケット』の類を用意したり。以上の準備は、悉く去歲末日まで整頓したり。

茲に一月三日午前八時に至り、愈本隊と、枝隊長は、左右二道に分れて、其集合地たる普蘭店を出發して蓋平に向ふ。而して前日即ち二日、在金州第一師團司令部より、飛電乃木少將の許に至る。

蓋平攻撃
軍普蘭店
を發す

大田中尉
等決死の
大斥候

曰く、第一軍參謀長よりの通報に據るに我混成旅團の斥候隊、蓋平附近に着する時、第三師團より大斥候を派遣し、敵狀を偵察せしめたりしに、蓋平には敵の歩兵五千、馬隊五百、大砲十門あり。田庄臺には、凡る二萬の敵兵埋伏し、且つ宋慶の兵も之に合併したりと云ふ。太田中尉以下は、去(十二月)二十九日海城に着したりと。(因に記す、太田中尉は、十二月二十日隱岐聯隊長の命を受け、決死の猛兵六十一名を率ゐ、其糧餉の如きも、得れば食し、得ざれば食せず、即ち斃れて後止むの決心を以て、此危険なる大斥候の任に當りしものなり。)隱岐大佐の枝隊は、此日いと凜烈なる寒風を冒して、蓋平街道を一直線に進み、同日午後四時瓦房店に達して宿營す。翌四日午前八時二十分、同地を發す。時に去る十二月二十六日一個中隊(四十人許を缺く)を率ゐて、熊岳城邊まで、一は斥候とし、一は右の太田副官の掩護として、赴きたる第一聯隊第一中隊長本郷大尉より、遞騎哨を以て、隱岐枝隊長に報告あり。曰く、今朝(三日)我騎兵は、熊岳城の前、約二里許の所に於て、敵の歩騎、兵凡五千人許に出會す。又土人の言に據るに、蓋平には敵五六千ありと。隱岐枝隊長、川崎副官等、此報道を讀み、笑て曰く、怯兵我を迎ふは健氣なり、然れども、亦遂に通逃なきを得んやと。此日隱岐枝隊長は、午後三時三十分半拉山に達す、行程凡六里許、此夜又本郷大尉より報告あり、曰く、一月二日支那人李可徳を間諜とし、蓋平方面に放ち、敵狀を偵察せ

大斥候掩護
隊本郷大尉の急報

將校斥候
の復命

しめたりしに、翌三日午後六時三十分歸來り、下の如く報告したり。蓋平は、其東西兩門を閉ぢ、南北二門を開き、共に衛兵を置けり。又た自分は日本軍の通信人と疑はれ、痛く訊問を受けしも、詭辯を以て、僅に免かるゝを得たり。但遂に城中に入るの機會を得ざりき。因りて其夜は南門外の民家に宿り、密かに城中の有様を聞きしに、城中には、張頭領の率ゐる四千の兵あり、此他尙唐田韓等諸將の率ゐる若干の兵あり、砲數概ね五百又清兵は、高粱の殻を積んで砲身を隱蔽し、佯はり退きて之に火を放ち、以て我に損害を與へんとするの謀あり。二臺子及び、榆林堡に於て、清の歩兵若干及び、騎兵二十名許りの舍營するを目撃したり。又三日午前沙崗臺の東方に於て、敵の騎兵二十名許り、舍營するを見受けたり。又同月二日に出せし將校斥候の復命あり曰く、我騎兵は沙崗臺にて敵騎約二十騎許に會合せり。一月三日下土斥候を熊岳城の西南方に在る西坡子に出せしに、土人の抵抗するものありしを以て、之を殺したり。本日(四日)本官歩兵一小隊、騎兵五騎を率ゐ、敵狀偵察として饅頭山東方の道路に向ふと。五日午前八時三十分、枝隊は半拉山を發し、同日午後二時二十分、老虎峪に着す。此日行程凡五里半、六日午前八時四十五分、正白旗に向ふ、雪を踏み、氷を涉り、又峻坂を踏え、或は道に迷ひ、或は迂回し、備さに困難を嘗む。途次熊岳城なる本郷大尉の發したりし遞騎哨に逢ふ。其報告に曰く、其一、敵狀依然、而

本郷大尉
の遞騎哨

も敵騎は沙崗臺と、賀家屯の間に出没し、警戒線となせり。其二、東道路上懸窩附近の人民は、敵兵に通ずるの傾向あり、其三、東道路上賀家屯、石道口の間を偵察するに、道路險にして、車輛通すべからず、其四、正白旗、双臺山、坨臺堡に通ずる中間道路は、砲車を通過せしむること能はず、其五、熊岳城より、蘇家屯、六家屯を経て、沙崗臺に通ずる西方道路は、平坦にして道幅廣く、諸兵種の通過に便なり。其六、熊岳城北、諸村落は、稍々物貨あり、其七、太田中尉の斥候は、東道路上柳河塞より、思拉堡に至りて宿泊せり。午後行進方向不明なり、其八は、本日(六日)午前八時騎兵五騎を附する將校斥候を、西方道路上に派遣し置きたりと。此日午後五時十分頃、漸く正白旗に着す。此夜前記蓋平方面に進入せし太田中尉の斥候隊は、見事海城に達して、第一軍と連絡を通じ、再び危険の敵地を通過し、六十一人共に、無事健全無上の名譽を肩に擔ひつゝ、歸隊せり。隱岐大佐は、此一行の爲めに一大白を擧げ、切りに其勇膽を賞し、且つ其無事を祝せり。翌七日午前九時、正白旗を發し、熊岳城を西方約一里程の所に望みて行進し、僅々二時間許にして、莫家店に着し、宿營して以て本隊の至るを待つ。既にして午後四時に至り、乃木將軍より報あり、曰く、本隊は、只今熊岳城に達すと。蓋し本隊、枝隊は、本日(五日)を以て會合の約ありしなり。八日、乃木本隊は、熊岳城に滯營して兵士の勞を休め、隱岐枝隊は、凡二里程の行軍をなして、四臺子に宿

太田中尉
等六十一人
の斥候
第一軍と
連絡して
無事歸隊
す

第一軍
樺山中尉
第三師團
第四連隊
の四臺子
に宿す

營す。此夜十二時橋木城なる第一軍第三師團第十八聯隊長佐藤大佐の手より、連絡斥候として樺山中尉、下士四名、兵士十二名を率ゐ、積雪寒風を冒して四臺子の枝隊本部に到着す。隱岐大佐、川崎聯隊副官、其他本部附將校下士卒數四十名、之を門前に迎へ、第一軍の爲めに一齊萬歳を唱へ、只管其無事を祝し、又其勞苦を慰む。同中尉も、頻りに隱岐大佐の厚遇を謝し、且諸般の報告をなし、茲に始めて半夜の眠食を安んじ、翌九日午前八時兩軍連絡再會の期を約し、直ちに樺木城に向て引返せり。前には、太田中尉の萬死を冒して連絡を通ずるあり。今又死生の途に入するの樺山中尉あり。實に是一好對の偉功者たり。是より先き、即右の樺山中尉と相前後し、在海城桂第三師團長より、乃木少將に向て電報あり、曰く、田庄臺にありし宋慶の軍は、二三日以來運動を始め、目下高刊及び二道河附近に在り、彼我斥候は、日々相觸接するに至る。但し彼れの目的、何れにあるや詳かからずと雖も、前面の状況此くの如くなるを以て、大石橋には、枝隊を派遣し難し。(樺山中尉の報告中には、佐藤第十八聯隊長、樺木城を發し、大石橋に進みて敵の退路を塞ぐ云々とありたり。)最も門司少佐の大隊には、去る七日出發湯池を経て、大杉馬嶺に向て前進し、敵を牽制して、貴團と連絡すべきを命じたりと。翌九日午前八時、本隊は熊岳城を發して、蓋平本街道を進み、枝隊は四臺子より右折して間道を進み、行々斥候を放ちて、伏兵の有無

を偵察しつゝ、行進し、本隊は榆林堡に、其前衛は二臺子に、枝隊を老爺廟に、其前衛は、同所より十二三町を距る一枝村に宿營す。其本枝隊及び、兩前衛は敵の戦線と相距る二千米突に過ぎず。兩軍一大血戦の機に、實に瞬間に迫れり。此夜乃木旅團長は、諸隊長を集めて、左の攻撃部署を定めたり。

一 歩兵第十五聯隊長河野大佐は、第二、第三の二個大隊を率ゐ、敵の右翼に向て牽制をなすべし。

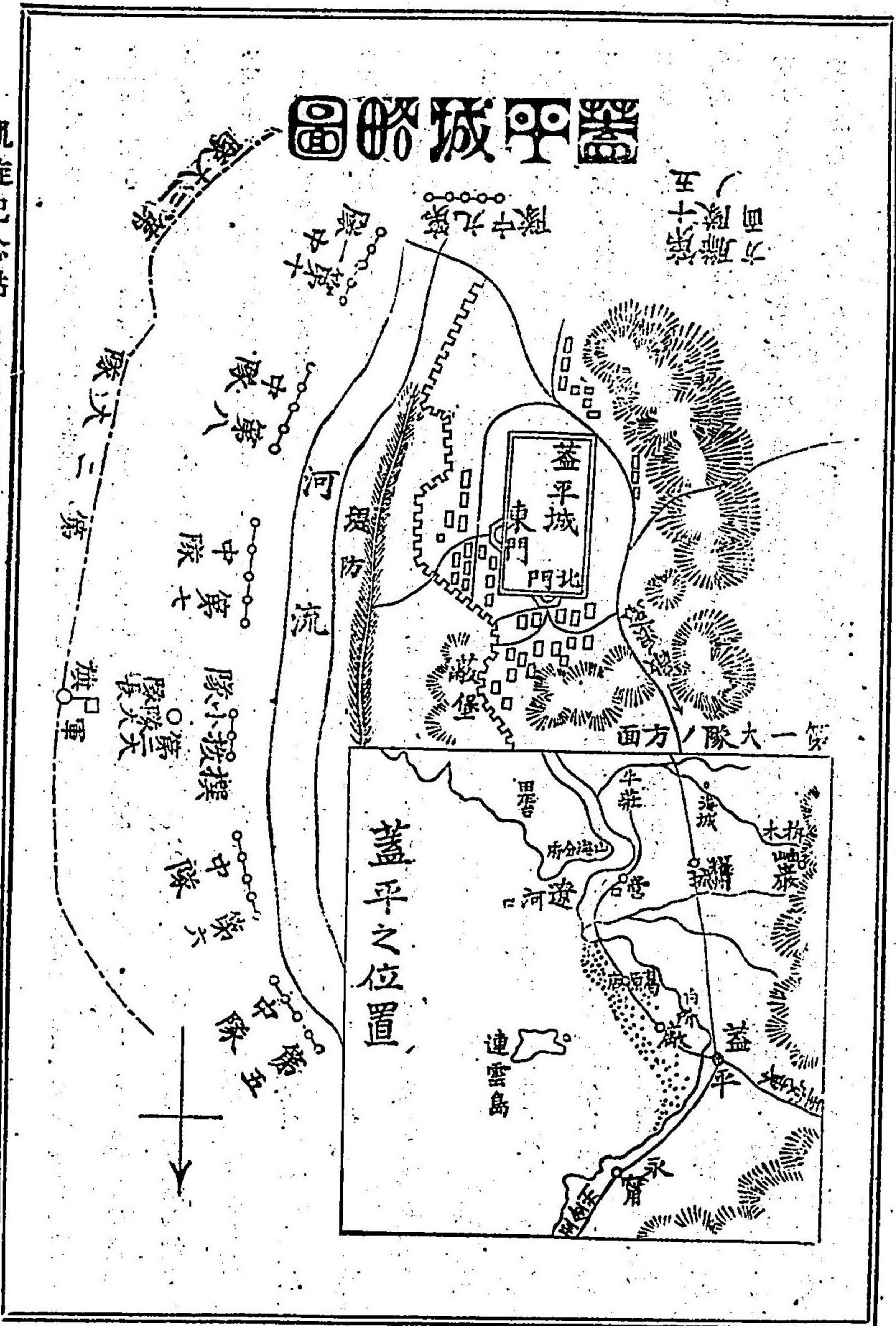
二 右側枝隊長隱岐歩兵第一聯隊長は、第一、第二の二個大隊と騎兵一小隊を率ゐ、敵の左翼に向て攻撃すべし。

三 予は、歩兵第一聯隊の第三大隊と、同第十五聯隊の第一大隊及び、野戦砲大隊、工兵中隊を以て、中央より進む。但し歩兵第一聯隊の第三大隊は、右側枝隊の左翼に於て、敵の正面に展開する豫定、第十五聯隊の第一大隊は、豫備となし、予の直轄とす豫定。

是時に當り、蓋平を守る敵の總勢は、或は四千と云ひ、或は五千と稱し、蓋平河の左右岸一帯の地物を楯として之に據り、其陣列甚だ嚴、而して之に將たる者は、張振臺、徐邦道等の輩なりと云ふ。

乃木師團
長の攻撃
部署

蓋平の敵
勢



蓋平の再戦

翌けて一月十日午前五時三十分、我軍は部署の如く、左右翼及び、中央の三面に戦隊を進め、齊しく関を作りて敵陣に攻め寄せたり。時に月影全く隠れて東天稍微光を洩らし、人影幽かに見ゆるや否や、敵陣の中央より、我中央先頭隊、歩兵第一聯隊第三大隊を目懸け、大小の砲銃雨の如くに打出せり。同大隊長、今村少佐はかくと見るや、程能き場所に兵を進めて、直に之に展開し、最も猛烈なる射撃を以て之に應ふ。尋で開戦したりしは、隱岐大佐の右翼隊、即ち第一聯隊第一、第二の兩大隊なり。就中第二大隊長香川少佐は、些の地物なき畑中を一直線に兵を進め、最も優勢なる敵兵と對戦す。城を距る東方凡一千三四百米突の地に於て一山あり、鳳凰山と云ふ。山上には、旌旗空を掩ひ、敵の歩騎兵約二千餘人、堂々陣列を布き、將に我を瞰射せんとす。隱岐大佐馬上より之を望見し、曰く、是今日の天王山なり。勝敗係る所、我速に之を抜かざるべからずと。乃ち第一大隊長竹中少佐をして之に當らしむ。時に午前七時五十分、各隊の戦方に耐なり。砲聲は天地を動かし、関聲山岳を震はす。然れども我が軍之を事どもせず、前後左右屍を踐て突撃し、竹中大隊、遂に鳳凰山を奪ふ。右側一帯の敵兵顧みて色動く。是に於て隱岐大佐令して正面なる香川第二大隊をして、蓋平河を渉らしめ、自ら豫備の二個中隊を以て直進し、敵の左翼が托する所の防禦家屋に闖入して之を奪ふや、敵驚て悉く西方の畑道を傳うて走る。偶々竹中大隊

竹中大隊 鳳凰山を奪ふ

第一聯隊 旗手小川の奮勇

山上より之を見、馳せ下りて敵と接近し、一齊射撃を以て之を盛す。敵は何かは以てたまるべき、見る間に一百餘人の屍は伏して雪上に横はれり。隱岐大佐の豫備隊、益々敵を尾撃して、南門外に至り逃げ込む敵を中斷して、其退路を絶つ。敵は倉皇繼かに身を挺して城門外より、西又南を指して遁逃したり。時に第一聯隊旗手小川少尉は、彈丸雨注の間を潜り、左脚に負傷し、且つ其護衛兵二名を傷けたりしに拘はらず、奮進勇往蓋平城の東南角に攀登し、百戰奏功に、古色蒼然たる我軍旗を舉げて、先登第一の功を顯はしたり。時に午前八時十五分なり。尋で南門樓上に上りし、隱岐大佐、川崎聯隊副官、及び豫備の二個中隊なり。我軍は、遁込む敵に先て、斯く速に進入せしを以て、我砲兵陣地に於ては、尙ほ之を敵兵なりと思ふや、忽ち二三の散彈を注射せり。幸にして、我兵一も之に觸るゝものなかりしも、其發射の距離は、甚だ遠からず、故に我兵も一時樓門を下りて、或地物に身を托し、以て其危険を避けたりき。爰に又祈家務に陣して、最初より敵と激戦せし我中央部隊の先頭なる第一聯隊の第三大隊及び、右側枝隊なる同第二大隊は、共に正面の敵を撃破し、河岸に進み、其左翼隊なる河野聯隊長は、敵を牽制しつゝ、相進で、是亦同じく河岸に迫る。野戦砲兵第二大隊長松本少佐は、本街道の兩側に布きたる放列を漸次に繰進めて發砲せしが、遂に左側の陣地を撤し第十五聯隊第三大隊が、邵家屯の敵陣を占領せし時

蓋平城の
陥落

此役敵の
働き

は、其左側まで進み、即ち河岸に砲列を敷きて、頻りに敵壘を砲撃す、初め敵は蓋平城の前方凡三百米突（二町四十五間）の所に出で、蓋平河を前面に控へ、半月形の掩堡を築き、之に據て我軍を射撃したり。之に反して、我軍は隻樹片草の身を蔽ふなき曠濶なる平地を押し行きたれば、起て進まんとすれば、敵は直に掩堡より之を射撃し、止て地に伏すれば、敵は直に射撃を止む。之に加ふるに、前面には二個の河あり、我、敵を追撃せんと欲すれば、必ずや此河を渡せざるべからざるに、而も河水は結氷して、歩武油滑容易に渡るべからず、折しも我左翼前の營口街道よりは、敵兵續々縦隊を作りて襲ひ來り、其勢頗る猖獗にして、一時我軍を躊躇せしめたり。然れども、乃木少將が一の森嚴なる號令は、能く各隊を勵して、均しく呐喊聲裏に、大河の中に飛び入らしめき。河は一面に凍合して、所々に凸凹傾斜をなせり、我兵爲めに健倒、又奮起、敵の狙撃を事もせず、忽ち一齊彼岸に達し、直に敵壘に突入して、群がる敵を打倒し、切倒したり。時に午前九時四十分、蓋平城は遂に全く我手に落ちたり。

此役敵は最も能く奮戦せり。從來敵は常に籠城を事とし、退守防禦の手段を取り來りしにも拘らず、獨り今回に限り、城外に出で、最も堅固なる掩堡を築き、殊に復防禦までも之を設け、據て以て我軍を瞰射せり。又敵は、是まで遠距離を以て漫然の射撃を行ふこと、殆ど彼れが慣用手

第一聯隊
の勇戦

此役我軍
の死傷者

段なりしに、此役は最も巧妙に射撃せり。即我起てば、彼打ち、我止まれば、彼亦廢し、其彈着の如きも、悉く我進路の前面に落ちたりしを以て、我兵の負傷は、多く足部にありき。是果して流石の宋慶が、手練の兵なるが爲か、將た又別に理由あるか、或は云ふ、此役敵陣中、外國士官の影を認めしと。此攻撃に當て、我各隊も皆亦死力を盡して奮戦したり。然れども、就中最も優勢の敵に當りて、勇戦抜群の働きをなしたりしは、東京師團、即ち第一聯隊の將校下士卒なり。是固より平素の訓練によると雖も、隱岐大佐が、出戦に臨み、其宿營地なる老爺廟の集合地に於て、なしたる一片の獎勵、即ち虎穴に入らずんば、虎兒を得ず、決心して事に從へ、遲疑躊躇の、誤るよりも尙害ありとの一言、特に其士卒の心膽を刺戟して、大に此日の戰鬥力を増發せしもの、如し。されば、其奮戦の著大なりしは、死傷數に徴して明かあり。即ち歩兵第一聯隊死傷者の總計は、三十三人にして、其中に下士十六名あり。又此日我軍の死傷合計は、三百零九人にして、其中に將校九人、下士卒三百人あり。以て當日の激戦たるを知るべし。其將校の死傷者姓名は、

戦死者

第十五聯隊歩兵中尉

白川震一郎

負傷者

- 第一聯隊第一大隊歩兵少佐 竹中安太郎(足部)
- 同第二大隊第六中隊長歩兵大尉 吉田百三(腰部)
- 同同第七中隊長歩兵大尉 及川恒昌(足部)
- 同同第七中隊附歩兵中尉 伯爵庭田重直(全上)
- 同同第八中隊附歩兵中尉 小川良正(全上)
- 同第一大隊第一中隊附少尉 伊集院郁五郎(全上)
- 同聯隊旗手歩兵少尉 小川賢之助(全上)
- 第十五聯隊歩兵大尉 新納幸太

戦利品

又我軍の戦利品は、大砲四門・小銃二百餘挺・彈藥若干・旌旗百餘旒・其他各種の武器若干あり。而して敵の死者は、無慮四百餘名にして、負傷者は二千内外に達し、其捕虜となりては、百五十名なりと云ふ。〔宋慶の報に依れば、此役に敵將部名無し。〕

抑も此戦や、我が軍に於て、係る所甚だ大、所謂一擧にして、兩得なるものなり。即ち一は屢々金州を逆襲せんとするの敵勢を挫敗し、一は海城方面の危険を排除して、之を安全ならしめ。且つや我第一第二の兩大軍を連絡して、相互に氣脈を通せしめたり。而して此連絡は、即ち兩軍が放

橋木城に於ける桂師團長の舉作

てる斥候に由りて、導かれしは、既に前記の如し。其二は、第二軍第一師團第一旅團第一聯隊第一大隊中の撰抜に係る大隊副官太田中尉にして、之に従ふ者、特務曹長田中寅、一等軍曹吉野彌五郎、二等軍曹野口集美、一等軍曹中原某、一等軍曹田中鶴吉の五名及び、兵卒七十人なり。是より先き、右の第一大隊は、旅順陥落の後、進みて秋家屯にありしに、十二月二十日上官の命令あり、曰く、一大斥候隊を組織して、熊岳城と、蓋平附近の敵狀を偵察し、且第一軍との連絡を通すべしと。是に於てか、此最危険なる一隊の斥候は、編成せられ、同二十八日に孤山の我兵站部を訪ひ、翌二十九日海城に向ひ、桂師團長に謁して、爰に始めて兩軍の氣脈を通じたり。又其一は、第一軍より来る樺山中尉の一行なり。斯くの如く氣脈を通ずるを得しかば、第二軍の此攻撃にも、第一軍の一隊は、牽制運動に由て、遂に我に聲援を假したり。即ち第一軍第三師團長桂中將は、橋木城に在て、第二軍の將に今回の舉あらんとするを聞かば、即ち第十八聯隊の門司歩兵少佐をして、蓋平城牽制運動の爲めに出發せしめたり。門司少佐は、先づ第五中隊の一個中隊を前發として、一月五日蓋平方面の途に上らしめ、七日自ら本隊二個中隊を率ゐて、之に繼ぐ。翌八日王戸屯に至れば、先發隊より報告あり、曰く、當日午前八時我偵察隊の財神廟に至るや、敵の偵察隊一百騎許と衝突せしが、我兵に一人の負傷者なく、歸來すと。是に於て一層の警戒を加へ、

九日午前八時より、又偵察隊一中隊を出し、財神廟及び、小杉馬嶺、大杉馬嶺の村落を探偵せしめしに、敵は已に退却して、我偵察隊は、大杉馬嶺を占領せりとの報道あり。故に午前十一時治見勾を發し、大杉馬嶺に進み宿營す。土人の語る所に依れば、敵は大杉馬嶺の西五十里圍鑿にあり。其數は一千と云ひ、或は二千五百とも云へり。十日は、蓋平城總攻撃の當日なれば、急行して圍鑿に至りしに、敵の隻影を見ず。土人の言に依れば、敵は昨日已に退却せりと云ふ。而して大八嶺の南には、尙は許多の敵兵あるを聞きしかば、我前隊は極めて警戒を嚴にし、無事に到着して、大八嶺をも占領するや、清人の蓋平より來れるに遭ふ。就て敵狀を聞くに、敵兵の既に蓋平に敗北して、今や隻影を止めずと。因て直に嶺上を登り、蓋平城を瞰下すれば、土人の言に違はず、途上復た一人の敵なし。是に於て一直線に、全隊を進め、午後一時三十分城内に入る。時恰も第二軍第一師團の混成旅團兵が、既に占領して之を守るの時なりき。若し此牽制隊にして、少しく早からしめ、前後敵を夾撃せしめば、蓋し第二軍の攻撃は、頗る容易なりしならん。然れども我兩軍の既に連絡せし後は、敵も最も苦境に沈淪して、宋慶と雖も、依克唐阿と雖も、復た爲すなきに至れり。而して今回蓋平の敗兵は、悉く營口街道に向て遁逃し、蓋平を距る二里十五町、海山寨以北葛原店地方に集合し、所謂死灰再燃の狀ありとの報ありしより、乃木旅團長は、第

蓋平の敗兵

十五聯隊長に令し、直に海山寨に至らしめ、同地に宿營して、全く北方の通路を杜絶せり。騎兵斥候の報告に依れば、蓋し敵の其後漸々退却して、營口方面に向ひたれば、最早再舉の患はなかるべしとなり。然れども、我軍は例に依りて、其守備警戒は、愈々益々嚴重なり。

蓋平城の形勢

蓋平は、其縣城の在る所、即古への蓋州城なり。城は長方形にして、南北の長サ各七町餘、東西の長サ五町餘、牆壁堅牢、其高サ三十尺、東西の二門を開けり。城内には、大小の市街數條ありて、縱横に通ず。人口凡三萬餘、其五分の一は、城外の東南部にあり。内外の市街商賈多く、物貨充實せり。城の南蓋平河口に一好碼頭あり。故に貿易隆盛なり。地形は西南二里餘にして、河の注口に至り、北方は凡四町を距て、山陵起伏し、東南の二面は、茫漠たる平原なり。蓋し海城と同じく、遼東の一大要地に居る。而して其城壘の經營及び、街衢の方式は、略々金州と同じく、其地位上より比較すれば、遙に金州・復州兩城の右に出づ。戰の當日、敵は却て城に據らずして、其南邊を流る、河の北岸を以て、防禦線となしたり。流水の幅五十乃至七十米突、當時河水凍合滑澤にして急歩するを得ず。聞く、我兵之を通行せんとする時、猛烈なる射撃を、彼岸より受け、爲めに多くの死傷を生せしと云ふ。今や蓋平地方は、寒氣凜烈、積雪脛を没し、人馬行路に難む、一望望々街路幾を辨すべからず。我遠征軍の辛勞たる、到底逸居飽暖の都人士、想像に及ばざる

海城襲撃
の衝に當
る某中尉
の輪報

所、若し夫れ此等境味を知らんと欲せば、須らく、先づ之を其地理天候に問ふべし。是時に當りて、敵は營口方面に集り、其勢萬と稱す。月の十六七日の頃、遼陽、牛莊並に普順屯の三方面より、我第一軍第三師團に對して攻撃を取らんとす。故に乃木混成旅團は、即ち其西方よりする敵を牽制するの目的を以て、營口の方面に運動せり。而して海城の敵は、十七日を以て、全く同師團の擊退する所となれり。是より敵は、屢々攻勢を張り、海城之れが襲來の衝に當り、毎に苦戦を訴ふ。されば、乃木混成旅團ハ、將に海城のために動く所あらんとす。即ち一旦其勢を收めて、蓋平の方面に歸來したり。此間の活動載せて某中尉の輪中にあり。曰く、

〔前略〕蓋平占領後は、暫時蓋平城外にて休養致し、専ら士氣を養成せり。敵は其後營口に退却せしも、尙敵の一部は、時々海城に攻撃し來り、誠に青蠅事あやうに有之候。已に十七日（二月）なり以下皆然り）には、敵海城に攻め來り居り候故、營口の敵は、一攻撃して、彼を懲らざる可らずと云ふ次第にて、突然我旅團（乃木混成旅團）は、十八日早朝出陣したるも、途中蝸蛆咀子そしにて、遂に營口方位に砲聲の頻りなるを聞く。彼れ又砲聲の射撃演習を始めたるかをあされたり。夫より足早に營口方位に進軍し、午後二時頃、南太平山に到着せしに、前面二三里の村落には、敵兵居らざる所なく、誠に彼れ、我軍を恐れて僅かの斥候偵察の、所々に出

沒せしを見しが、うら日本軍來れりとして砲聲す。其夜は絶えず、營口方位に砲聲を聞けり。吾軍の此進軍は、眞の攻撃にあらずして、海城の聲援に出掛けたるなり。營口を距る六七里迄進軍し、専ら牽制を行ひ居れるに。敵二萬餘、十八日我露營前面村落にありたれば、其夜必ず襲來すべしと、各警戒して待受けしに、少しも攻撃し來らず。夫れより、拙者は、隊長と共に、乃木混成旅團長の許に至り、敵狀は如何にと、各大隊長共控へ居たるに、前夜より出せし將校斥候、續々午前十時頃歸り來り、其報告に、前面村落老爺廟、百廟子及、大水塘には敵兵多し。而して吾々斥候の出沒するを見れば、忽ち銃砲彈を雨注するには、閉口したれども、餘り清兵の馬鹿なるには呆れたり。正に敵は諸兵連合のもの一萬以上あり云々。報告未だ終らざる中、傳令騎兵は、昨日午後海城へ攻來りたる敵兵には、我軍より攻撃に轉じ、大に擊退せりとの電報を呈せり。閣下の此電報を吾人に知らするや、一同は敵、時々攻撃に來るは、餘り酷き目を見せざるに依れば、二度と來らざる様、極酷き目を見すべしと笑ひ合へり。

當地は、水及び村落に乏しき故、一ト先づ飛雲塞前後蝸蛆咀子間迄退き、宿營すべしとて、十九日夕頃同所に引上げたり。定めて敵兵は吾軍が清兵の多さに恐れ退却せりと思ひ、祝盃

を上げしなるべし。目下は同所に殆んど冬營の姿なり。

二十二日、桂中將より左の電報に接す。二十二日敵は、大馬屯より牛莊街道に亘り、約二千米突の正面を以て、約六百米突迄接近し來り、吾は敵の右側より攻撃に轉じ、大に進撃せり。敵は退却云々。此報に接するや、一同大に清兵の愚を笑ひ、いざ一もみに營口を傾し、打懲さざるべからずと、士氣大に振へり。殊に蓋平城にて、許多の吾親愛なる將校下士卒を喪ひたれば、其吊戰に、營口附近にて死人の山を築き呉れんと待構へ、只管此頃の無事を嘆きたり。

二十四日、第二師團上陸地〔編者云ふ、第二師團の活動〕より、第二の電報に接す。二十日拂曉逐次劉水灣に入り、人馬殆んど足を濕さずして上陸するを得たり。軍は二十五日に運動を起す事を得るの豫定なり云々。此報に接するや、吾人は今の間暇を以て、速に此方面の敵を退却し、第二軍の上陸地に合したきものなり。然らざれば、此間暇の中に、第二師團は無人の境を過ぐる勢にて、北京に攻入るべし。誠に羨望に堪へず。

吾人の第二軍上陸後の攻撃は、蓋平を以て、最大劇戦とす。將校以下第一聯隊のみにて、殆んど三百人の死傷ありしにても察すべし。然るに本國は如何に評するなるか、定めて旅順の

劇戦に若かざるべしと思ふならん。誠に蓋平の劇戦は、線の下の力持と云はざるべからず。左れども、吾人は敵の強弱、土地の如何は固より問ふべきにあらず、併し同じ事なれば、北京城攻撃にて、戦死したき人情の然らしむる所ならずや云々。

是より先き、蓋平陥落の後、乃木少將の混成旅團は、城北の飛雲寨に舍營せしが、同地は營口の敵陣を距ること甚だ遠からざるを以て、彼我の斥候日として衝突せざるはなく、互に多少の損害を見る。就中二月七日に於ける大衝突は、最も其劇烈悲惨を極め、實に聽者として酸鼻に堪へざらしむ。而して此任務を負担せしは、即ち秋山騎兵大隊にして、其活動の如何は、稻垣騎兵大隊副官の報告書に由て明なり。曰く、

〔前略〕去月十日蓋州落城の後、當隊當時の情況は、單簡に御報知致置候處、爾來我混成旅團は、蓋平城の北數里の地に滞在し、未だ營口攻撃の運びに至らず候。金州出發の當時、第三師團と連絡を取り、且つ之を援助する云々の目的にて進軍仕り、先づ蓋平陥落と同時に、海城に在て第三師團と連絡を通ずるを得たり。過日敵兵海城に再び迫りたるの際は、牽制の爲め、營口附近迄押掛け候。海城の敵敗走の後は、再び當地附近に歸申候。第三師團未だ營口攻撃の準備不_二相成_一、日々營口の攻撃に心急ぎ居候、威海衛に於ける我軍の一大快報に接

營口方面
と衝突の
報告

し、帝國軍隊の萬歳を祝すると同時に坐るに營口攻撃の、一日も早からんこと希望仕居候。目下第三師團より大石橋に、佐藤大佐の率ゐる一枝隊(歩兵第十八聯隊)一大隊(騎兵一小隊、山砲一中隊)來り、共に營口方面に相備居候、蓋し營口には、爾來兵數増加の模様あり。間諜の報告に、約三萬を越ゆと云ふ。宋慶之を統轄し、後家油房に在り。目下敵の守備線は、大水塘・白廟子・唐家學房・石橋子に亘る線に在り。其歩兵三百、騎兵の多くは常に附近に徘徊し。敵は前進の模様なし。村端悉く堡壘を設くと云ふ。蓋平陥落後、既に一月、互に數里を隔て、相對持す。我騎兵隊は、常に敵狀の偵察に従事し、斥候の小戦闘亦絶ゆることなし。此の如く、長時日の間相對する際の如き、騎兵の勞力せしことはあらず。漸く敵の相馴ると同時に、益々騎卒を要胆ならしめたり。蓋平の北、一の山脈を踏えてより以北は、營口附近に至るも、平坦開闊、遼東灣頭の鹽田と相連るの沙場にして、其間に存するの村落、は、近くも四十米突、遠きは八十米突を以て相隔つ。故に若し敵の占領する村落に近かんとせば、此長距離を、悉く敵の展望内に於て行進せざるべからず。而して敵にして、我接近するを待て射撃せざる上は、殊に村内に陰蔽して、深く我を村内に引寄せ、之が生擒を計る時は、索搜上の困難、實に言ふ可らざるものあり。數日來、敵は實に此法に依りて、我斥候を害

したるもの亦少からず。蓋し亦戰術上至當の事なり。初め敵に此戰術なし、彼我相接する長きに亘り、彼れ自然に之が方法を會得するに至りしなり。好んで、危険を冒し、死地に陥ることと命するものならずと雖も、此地形に於ける搜索は、直接に敵を見るべからざる限りは、亦村内に入るの止むを得ざるを奈何せん。搜索の困難、此に至て極まる。然れども、我騎卒は、實に益々豪膽にして、志氣愈々奮ひ、負傷者一人を作れば、敵愾の氣を盛ならしめ、死者一人を作れば、此氣をして、愈々強のらしめ、蓋平陥落の後今日に至るまで、負傷せるもの將校一・下士二・兵卒一・戰死(生死不明とも云ふべき)せるもの下士二名・兵卒五の多きに至る。嗚呼、僅か二百有餘騎の大隊にして、此多數の負傷者、戰死者を作る。我大隊が當時に於ける狀況の概略如此に御坐候。今戰死者・負傷者、當時の狀況を陣述仕候。何れ戰死の狀況は、直接に其遺族に當隊より、報知可致候間、貴官よりも、右へ宜敷御申置奉願候。

斥候衝突
死傷

中島騎兵大尉は、去月二十二日斥候長として、後家油房附近に進み、村落に入らんとする際、歩兵の爲めに射撃せられ、左足膝部の上部に負傷、直に入院、但し重傷にあらず。多分豫備病院に轉送せらるゝならん。

二等軍曹尾川幾太郎及、上等兵田中伸三郎は、昨日斥候として白廟子方位に進み、該村落に於て、歩兵の爲め射撃せられ、尾川軍曹は胸部より腹腔に貫通し、肝及肺を貫く、最も危篤なり。田中上等兵は、臀部貫通銃創、然れども輕傷。二者共に野戦病院に轉送せり。

上等兵大久保彌右衛門、去月二十二日韓家學房に進み、歩兵の爲め射撃せられ、胸前部擦過、直に野戦病院に轉送、皆何れも敵を距る二三百米突の點なり。若し不幸落馬することもあるらんか、終に捕虜となるの辱を免れざる可し。勇敢の氣終に能く我占領地域内に歸來せり。殊に尾川軍曹の如きは、肺肝貫通の重創に屈せず、能く部下を收容して、三里の行程を背進したるが如き、豪毅屈せざる風、人として寒からしむ。

第二軍乃木混成旅團は、全く警戒の姿勢に移つる。敵狀の搜索に、此に於て益々確實ならざる可らず。小官は、撰抜騎兵九騎を率ゐ、二道河方位の敵狀を搜索するの任務を以て、午前一時稍過ぎ、二道河に達したる時は、隻影を見ず。將に村端に出でんとするとき、東方三百米突の無名村に、敵の騎兵十五六騎、我退路に向て疾走するを見る。部下を止め、能く其南方を見れば、今認めたる敵の騎兵は、既に其後備にして、其先頭は家屋の爲め、認め得ず。直に部下を収めて、背進に決せしが、二道河を距る二百米突の周圍は、敵の騎兵にして、全く我

を圍繞し、連發の放火を集中せり。逃るゝに道なし。捕虜とならんより、寧ろ潔く自殺するに如かず。既に其決心をも起せしが、如何にも殘念に堪へず。斬らるゝ丈け斬り、逃ぐる丈け逃げ、幸に一人の生還するあらば、以て任務を完うするなりとの念慮は、忽ちに起れり。道路は土民の行通なき爲め、數日來の積雪に依て埋りらる。渺茫たる沙場、迷路の目標を示すに由なし。恰も好し、電信柱は道路に沿うて南行す。直に電線に沿ひて突き込むことを命じ、銳意勇進せり。敵中も美事に突き抜けたり。然れども百五六十に餘るの騎兵は、悉く我に迫り、殆ど三十米突の間、彼我共に接戦せり。悲哉衆寡敵せず。背を敵に向くるの止むを得ざるものあり。彼我接戦の後、小官及び六騎は、兎に角敵中を脱出せり。然れども、三騎は勇戦奮闘の後、名譽の戦死を遂けたるなり。其奮闘落馬の後、徒歩防戦したるは、實際に目撃せりと雖も、最後の狀況、遂に之を確むること能はず。渡邊軍曹の如きも、最も勇悍を以て稱せられ、嘗て石楊子に於て、三百米突の地點より劇烈の射撃を受けたるとき、部下の數騎を退却せしめ、屹然停止、能く其占領線と、其兵數を確めて歸來したることあり。當時此豪膽の舉動を見たる後方村落に在りし輩は、此豪膽を稱揚し、中には軍曹は元來耳遠き故、彈丸の聲を聞かざるべしとさへ云はれたり。而して彈丸の雨注は、終に軍曹を害せざり

き。勇氣比くの如し。當日の奮戦勇闘、小官は實に之を目撃せり。多数を頼むの豚兵は、實に少数の我等を七重八重に包めり、當時の苦闘は、實に夢の如し。一等卒原田繁藏は、其馬倒れ、徒歩の後勇戦最も力め、沈毅其刀を捨て、騎銃を以て防戦し、身に數個の銃創刀創を受け、遂に能く歸來せり。小官の、敵の追撃緩慢となり、僅か十數騎の外、身邊にあらざる頃、二道河の南塘窪に達せり。原田繁藏の落馬したるは、實に幸運にも、塘窪の附近とす。十數騎の敵は、遂に勇悍なる原田を討つこと能はずして退却せり。原田全さを得たり。戦闘中倒れたる敵の馬匹は、我後に從へり。直に原田をして、乗馬せしめ、塘窪に來る。敵は漸次二道河に背進せり。一等軍曹渡邊武松、一等卒内田興作、一等卒添田賢次郎、此の死体は、殘酷なる清兵の爲め、取り去らる。嗚呼、當時に於ける士官の悲壯、御推察を乞ふ。如何にも殘念に堪へ兼ね、暫く塘窪に止まり、傷者は二騎として本隊に送還せしめ、再び二道河の東方に進行せるとき、恰も好し、我大隊は來れり。直に之を報じ、再び二道河に達したるときは、敵は去て跡なし。遺憾何ぞ極まらん。嗚呼、我斥候の戦闘せし場所は、流血は恰も三月の花をなして、無殘なる跡を存し、點々引て營口方位に至る。我忠勇の遺體は、終に還らず。早晚營口を陥れ、其靈魂を感むるの時あらん。

曹長吉田四郎は、四騎を率ひ、同日老爺廟に至り、午前十一時該村内に於て、敵の騎兵約五十騎の爲めに圍繞せらる。敵は深く我を村内に入れ、其退路より圍めり。恰かも小官のものと同じ。勇戦力めたりと雖も、曹長及び一等卒羽毛田安太郎、終に倒れたり。他の二騎幸に敵より脱出することを得たり。曹長元來勇悍、其最後、蓋し奮闘の状見る可し。彼れが平日帯びたる長大の日本刀、其れ非常なる切味を示したるなるべし。

去る七日神永軍曹の率ひる六騎の斥候は、高刊に至れり。零時稍過ぎ高刊は敵なき爲め、歸來せんとせしが、高刊を去らんとする時、丁家橋(高刊の南一里)に敵の騎兵二十騎退路を遮断し、又右の兩村落にも、續々騎兵現出するを見る。全く退路なし。終に意を決して、二十騎に向ひ、突撃歸來せり。此突撃に於て、一等卒根本由之助創傷を蒙り、(横腹を創刺せらる)防戦最も勉む。終に倒る。然れども、其倒るに至るまで、斬殺したる敵兵も、亦數騎に及ぶ。其起たざるに至り、刀に寄りて軍曹を見て笑ひ、我に拘らず、速に去るべきことを語れりと云ふ。二等卒相原甫吉負傷せり。但し輕傷、左頬を槍にて刺さる。入院する程でなし、(二月九日秋山少佐に報告せし存翰なり)

戦機の動く、已に斯の如く、我兵の怒る燃るが如し。是に至て、進軍敵を助せざるべからず。

旅順後、
初めて北
進す

第十九 太平山の大衝突

三十里堡

是時は當て、驍勇跋扈、屢々來て鋒を我金州及び、海城に向く。而して我第一師團は、旅順戰後既に七旬、滯陣久しきに亘り、徒らに脾肉の歎あり。是に於てか、突如として出發の命令は下る。時に二月八日、此行將に營口附近の敵を掃蕩せんとす。各隊命を聽て踊躍す。乃ち翌九日を以て順次途に上り、其師團司令部は、超て十三日金州を發す。時に午前九時、朝來曇天なりと雖も、氣暖にして風寒からず。此日行程僅かに五里半に過ぎず。乾家子に於て午食、午後四時三十里堡に着、民家に宿す。三十里堡は、一面海に瀕し、白沙遠く西北に連りて、眺望際涯なく、一寒村なりと雖も、風景甚だ佳なり。翌十四日午前八時起程、此日行くこと七里、天氣温暖、瀕水の結氷悉く解け、道路爲めに泥濘にして、人馬行路に難む。石河驛兵站司令部に於て晝食、行く二里程、前方遙かに遼東灣の分流を望む。瀕水皆凍合し、人馬車輛氷上を徒渉すべし。午後六時三十分普蘭店に達する頃、一天俄かに曇り、細雨瀟々たり。此夜張家屯に舍營す。普蘭店附近は、盜賊頻りに出沒して、土民の生命財產甚だ安固ならず。張家屯は、即ち曩に我軍に従ひし所の劉雨田が郷土、劉氏は盛京省屈指の素封家なり。此日進軍中一の軍夫、雞卵を土人に購ひ、石に觸れて

卵中より
爆發

之を碎かんとするや、轟然一發爲めに其手を傷く。蓋し土民の我に服せざる者、卵中に爆藥を填充せしなり。十五日午前九時起程、夜來の降雨は變じて雪となり、滿地皚々烈風雪を吹て、咫尺辨すべからず。奇寒骨髓に沁入して、殆ど堪ふべからず。人馬の途に昏倒するもの尠からず。車輛の如きは、雪中に顛覆して爲に破壊し、更らに其用をなさざるに至る。此日胡家屯に宿す。十六日午前九時出發して、複州城に向ふ。此日や、天氣晴朗、昨日の苦難拭ふが如く、道路も亦平坦にして、滿地の積雪一層の風光を添へたり。苑家屯兵站部に於て午餐、午後八時複州に着、路程八里、十七日複州に滯營す。其西海濱に娘々營と稱する要港あり。目下結氷して船舶の出入杜絶せり。此地は馬賊土匪の出沒すること甚しく、土民多く其殘害を蒙りしと云ふ。此地滯在中、師團長は參謀官を從へ、全軍に先を進發せり。蓋し今回の作戰に關し、第一軍野津將軍と、湯池に會合の必要ありしが爲めあり。十八日午前七時起程、地上積雪脛を沒し、軍隊の進行大に困難なり。楊家屯に於て晝食、午後五時孫家屯に泊す。行程八里。楊家屯に滿州の官人某を糾問したるに、我通譯官一名の踪跡に關して、稍々信憑するに足るべきの實を得たり。曰く曩きに大孤山方面に向ひし通譯官二名は、目下宋慶の軍に在り。宋慶二人の才學を愛し、敢て之を殺さずして左右に従へ居れりと。此日午前、昨日敵兵二萬海城を襲撃したるに、午前十二時頃

敵中に
おる我通譯
官

熊岳城

迄に、全く我軍の爲めに撃退せられたるの報を聞く。十九日午前八時起程、將軍臺に於て午餐を喫す。午後二時半李闡村に着、此日寒氣酷烈なりしも、路程僅かに四里に過ぎず、連日の苦難爲めに拭ふが如し。二十日午前八時三十分起程、午後三時半、熊岳城に達す。行程四里。熊岳城の楕圓形の城廓にして、外廓を圍繞するに熊岳河と稱する八百米突の河流を以てす。河流今は氷結して、徒歩自在なり。熊岳山右に聳え、山嶺を築く、今半は廢頽せりと雖も、唐代の建造にして、昔の烽火臺なり。熊岳城の規模之を金州、復州に比すれば、僅かに其三分の一に過ぎず、曩に我軍一彈の費すなくして、之を占領せし所なり。此地方小松の繁茂せる所多く、山野樹木少からず。前二日我二聯隊、亦此地を過ぐ。城中土民の餓頭を饑く者あり。我兵購て之を食ひ死する者二名、蓋し毒饑頭、敵の間諜がなす所、清兵の卑劣手段を逞うするもの此の如し。二十一日午前八時三十分起程、四里にして舍營に就く。寒氣肌膚に徹す。寒暖計零度以下二十七度を示せり。正午古田縣を過ぐ。縣廳の在りし所にして、堂宇宏壯なれども、門扉傾頽復た舊時の觀なし。我軍蓋平進撃の前、縣令其縁屬を率ゐ、財寶を收めて遁逃せりと云ふ。午後二時蛇體を偃過をぎ、同四時頃沙崗臺に着、同地に宿す。是の時に當て、敵は我混成旅團の前面に進來し、既に太平山を占領し、併せて其南方村落にまで進み、太平山にて砲を備へて之を守り、(夜間は之れを山北

毒饑頭

太平山方面の敵軍

敵我前哨線に襲來す

の村落に引き下ぐ、)又南太平山村の南端は、歩兵凡五百を以て守備し、太子窩にも一部隊あり、尙は夏家堡子には、兵數二三百を以て守備するもの如し。而して其主力は、太平山の北方七里溝に在るもの如く、其兵數は少くも五千餘騎兵凡二百騎、砲四門を下らざるべし。二十一日營口方面の敵は、其前線を以て老爺廟及び、白廟子の方向より、東西七里溝庄に進み、同日午前八時二十分頃より、太平山に於ける、我混成旅團の前哨線に襲撃し來る。其兵力は、歩兵約五六千、砲四門、其他若干の騎兵部隊より成る。而して我乃木枝隊が、之に對して爲せし配備は、歩兵第十五聯隊を、尙家臺、三家子、坡臺子附近に、歩兵第一聯隊(一大隊欠く)、を、大石橋に歩兵第一聯隊の第三大隊を、博洛浦に歩兵第二聯隊(一大隊欠く)、を馬虹子・飛雲塞に、騎兵第一大隊を朱家店子に、野戰砲兵第一聯隊第二大隊を坡臺子に、工兵第一大隊第一中隊を母家屯に置き、而して是等各枝隊の前哨、第一線は即ち太平山に在りき。此時我枝隊長は、三家子の線に在て防守し、更に飛雲塞にある歩兵第二聯隊を以て、敵を逆撃するに決し、其前哨をば、逐次に、且つ抗し且つ退却して、三家子に至らしむ。午後三時、敵は太平山を占領し、其前線は、窩南、太平山一帶の部落を占領して之に據る。二十二日、敵は依然として舊位置を動かさず、頻りに太平山の北方に於て、其兵力を集合せんとするもの、如し。此日師團は、午前八時三十分起程、天氣の溫暖なる、進軍中

當日の如きはなし。午後蓋平の城樓を遙かに二臺子兵站部より、北方に望むの頃より、天候俄然一變し、降雪繽紛として至る。午後二時全軍蓋平城に到着し、各自の宿營に就く。路程四里。此夜敵は約五里の前程に來進し居るやの風説を聞く。午後十二時命令あり、曰く、敵の歩兵一千人許、砲四門を以て太平山に據れりと。依て我師團は主力を盡して前進し、太平山及び北方村落に於ける無数の敵を撃退せんとし、明二十三日午前九時を以て出發す。其到着點は、坡臺子にして、蓋平より約三里なりと。一軍命を聽き、行装を戒め、以て天明を俟つ。此日敵味方の体勢は、共に前日に異らず。唯歩兵第三聯隊及び野戰砲兵第一聯隊第一大隊のみは、飛雲塞附近に其宿營を移轉したり。二十三日師團は、午前九時起程、降雪を冒し行くこと三里、午後四時坡臺子に着す。此夜師團司令部は、此地に宿す。我軍諸種の戦備は、本日午前於て、悉く整ひたり。而して午後の一時迄に於ける敵の形勢は、敢て異状を呈せず。是に於て、師團も舍營に決し、乃木混成旅團は、其本隊を以て三家子・小房身・二道河・金家窩舖、太子窩舖の區域に宿營し、老爺廟方向を警戒し、西枝隊は、其本隊を以て滕家屯子に入り、其占領區域内に宿營し、太平山に對して警戒せり。此日午後九時迄に得たる情報に依れば、敵の他の聯合部隊は、老爺廟邊にも駐屯する者の如し。夜に入て、我軍全體の宿營配備を、尙ほ詳言すれば、左の如くにして、是れ即ち明日敵を

攻撃配備

攻撃すべき配備なりとす。

- 一 乃木少將は、歩兵第一旅團・騎兵大隊・砲兵第二大隊・工兵第一中隊・衛生隊半部を率て、三家子及び其近傍諸村に在り。内歩兵第一聯隊の二個大隊は、隱岐大佐之を指揮して、大石橋へ派遣したり。
 - 一 西少將は、歩兵第二聯隊・騎兵一小隊・仙臺師團の野砲大隊衛生隊半部を率ゐて滕家屯子及び、其近傍諸村に在り。
 - 一 右兩師團の前哨線は、敵線を距る凡一里に於て對陣せり。
 - 一 歩兵第三聯隊・騎兵半小隊・砲兵聯隊本部及び、第一大隊は、師團長の直轄にして、坡臺子、博洛舖に在り。
 - 一 山東地方の作戰に加はりて、威海衛にありたる工兵大隊長は、第二中隊を率ゐて、二十四日師團長の許に來り會するの豫定なり。
- 而して師團は、明日の作戰運動に就て、左の如く命令せり。
- 一 乃木少將の枝隊は、右翼隊となり、午前六時を以て攻撃を開始し得る如く、刻を誤らず、其宿營地を發し、孫家崗子を經て、敵の側背を攻撃すべし。大石橋にありし部隊も、亦敵

師團の作戰命令

の左側背より此攻撃に參與すべし。

二 西少將の枝隊は、左翼隊となりて、午前六時迄に破橋子近傍に戦闘準備をなし、右翼隊の運動に従ひ、太平山に向ひ攻撃すべし。

三 師團本隊は、豫備隊と爲り、午前二時坡臺子の西端を發し、師團長之を率ゐて、右翼隊の後方に在り。

愈々二十四日の曉天とはなりぬ。各隊振旅して坡臺子の宿營を發す。時に午前三時なり、星斗天に横はり、積雪地を埋みて、深き脛を没す。森肅たる夜氣、漸瀝たる寒風を冒して、太平山に向ふ。茫漠たる廣野一面の雪、雲霧は四方を鎖して、前途測り難し。全軍互に相戒め、星光を認め、歩武を進む。孫家崗子に達する比ひ、曙光地を射て、眼爲めに眩せんとす。時に前程遙かに篝火の天に炷するを望む。是れ敵の太平山に據守するなり。兩軍の戦既に交はり、砲聲頻りに起るの所、山地將軍は、孫家崗子の高丘に立ち、儼然として戦況を望む。爰に我左翼隊は、午前六時半を以て戦闘を開始し、浩々滔々奔水の如く、押し去り寄せ來て、午前七時に至り、既に南太平山村及び、土城子の敵を攻撃し、三十分の後全く敵を撃退して、太平山の西部を占領せり。此敵は、約六百にして、西七里溝庄に向て走る。右翼隊は、午前五時三十分、孫家崗子の南方に集合す

太平山の
戦開く

太平山の
西部陥る

太平山東
部亦我手
に落つ

西七里溝
庄の敵情

るや、直に同六時を以て運動を始めけるに、山の東なる敵、其當るべからざるを知り、暫時對抗の後、早くも退却し去れり。同七時三十分にして、太平山の東部、又我が爲めに占領せらる。此時敵は退て七里溝庄を保つ。我右翼隊の砲兵は太平山東側の敵地と、其東端角に放列を布き、東七里溝庄に向て攻撃を始めたり。師團の豫備隊は、午前六時孫家崗子の南端に達し、一旦爰に開進したりしが、先程より戦況を熟視しありし師團長の、號令一發猛然として身を起すや、即ち軍を塵て轟地に馳せて太平山の東麓に前進し、午前八時其地に開進を終る。此間僅かに一時間を費すのみ。時恰も右翼隊は、東七里溝庄に向て猛撃を行ひつゝありき。師團長急に馬を太平山の絶頂に立て其位地を占む。敵は其右翼を黃家窩舖に置き、其左翼は老爺廟の南に亘り、漸次我を包圍せんとするの情勢を示せり。而して其左翼の兵力は、最も優勢なり。營口街道西七里溝庄の北方には、尙敵の他の縦隊連綿たるのみならず、西七里溝庄及び、其附近の部隊は、敵兵悉く占領し、頗る頑強に防守せり。今日の戦たる、地は茫漠限りなき平野にして、遠く之を望めば、積雪の日光に映する所、渺々たる大洋の如く、彼我の運動歴々指呼の間に在り。殊に攻守地を異にするを以て、我軍の運動甚だ便ならず。加之敵は其砲兵を各村落内に配列し、我歩砲兵に向ひ、猛烈なる砲撃を連續して、我軍を苦ましむ。其砲數は約十門にして、彈道頗る抵伸し、射法の巧妙な

小平山
北の戦場
準備

る、之を他の清軍に比して、愈然優等の地位にあるを見る。此日敵の効力は極めて大にして、我右翼の砲兵は、爲めに其力を滅殺せられたること少からざるなり。今晚大石橋より戦場に參與せん爲め、來り會せる歩兵第一聯隊は、午前八時頃、夏家堡子に達し、敵の左翼に對し、小平山の西北に戦場準備を以て停止し、我右翼を警戒す。始め第一聯隊は敵の左側背を攻撃するの任務を有したりしに、敵状の中途異動を呈せし爲め、其任務の變更を來したるなり。午前八時十分右翼隊東七里溝庄の敵に向ひ攻撃を開始し、同三十分之を撃退して其地を占領せり。此村落を守備せし敵は、歩兵約六百にして、西七里溝庄に向て旌旗堂々、從容として退却しけるは、不敵の振舞と謂ふべし。此時右翼隊は、全く東七里溝庄を占領し、我砲兵も亦前進して、同村の北方に陣地を變換し、専ら西七里溝庄の敵砲に對戦せり。午前九時四十分、右翼隊長は、其現在の位置を守備し、前進すべからざるの命令を受く。而して其砲兵聯隊長の指揮下に復歸せしむ。須臾にして、我左翼の前方に於て砲火空に漲り、銃聲爆々として四邊に反響す。乃ち我左翼隊の一部突進せしやの疑あり、副官命を馳せ、直ちに馳せて左翼の許に赴き、情況を視察す。而して當該隊長に、現在の位置を確守し、決して前進すべからざることを命ず。敵は午前十一時に至るも、其旗色整然として、更に退却するの勢を現はざるのみならず、恰も波濤の澎湃として昂進し來るが

敵の頑強

如く、益々其勢を振て、左右翼を張り、我右翼將に其包圍の中に陥らんとす。是に至て攻守其地を轉倒して、彼れは却て攻撃に轉せんとするものゝ如し。依て砲兵聯隊長に命じ、其二大隊を以て、東七里溝附近に陣地を撰定し、西七里溝庄に在る敵の砲兵を撲滅せんことを計らしむ。然れども、敵之益々其兵力増加し、其左翼前方には、更に砲二門を排列して我に應戦し、西七里溝庄の砲兵も、亦我優勢ある曳火射撃に對抗して、敢て屈するの色なく、長時間の砲撃を交換し、容易に挫折するの模様なし。我砲兵苦戦最も努む、而かも彈丸の徒費を避けんが爲めに、緩射を以て其砲撃を持続するのみ。正午頃に迫んで、敵の左翼後にありし諸部隊は、次第に其右翼に移轉するの情況を現はせり。同時に敵の長縦隊は、騎兵若干の先導を以て、黃家窩舖より出現し、我左翼隊に向て、前進を始めしむ。其兵力決して六千を下らず。而して敵の行進は、五歩に一進、十歩に一止、運動の緩慢にして、秩序の不正なる、殆ど隊列を形成せず。午後二時頃に至り、敵は全く前進の希望を断念したるものゝ如く、我砲兵射程外を運動しつゝ、對抗を始め。敵の先導隊は、此時我左翼隊の前面約六百米突の所迄通り來りしか如し。敵勢は此の如くにして、而して我軍は本日拂曉より攻撃を開始し、雪中を馳突蹂躪すること、殆ど十時間に過ぐ。攻撃努めざるに非けずと雖も、敵勢頑強敢へて少しも頓挫せず、能く戦ひて能く防ぐ。而して我軍の目的たるや、當

師團長の軍令

初より太平山の敵を撃攘するに在りて、太平山は既に午前を以て我占領に歸したれども、敵の敗兵は動もすれば、我を逆撃せんとするもの、如くなれば、師團長は乃ち更に軍令を刷新して、盛に進戦を策せり。令の一に曰く、乃木少將は、東七里溝庄附近に在る諸隊を以て、西七里溝庄の敵を撃攘すべし。二に曰く、砲兵聯隊は、此撃攻を援助すべし。三に曰く、歩兵第三聯隊より、一大隊を東七里溝庄に派遣し、西七里溝庄攻撃の後援を爲さしめ、西少將には、此攻撃を通報し、併せて別命のあるまでは、現在の位置を守備すべきを命じ、又第一聯隊長は、此攻撃の後、老爺廟附近の敵、若し突出し來らば、之を迎撃すべきを命ず。既にして、午後三時頃より、右翼隊は攻撃運動に着手し、漸次に其兵力を展開して、西七里溝庄に向ひ攻撃を實施したり。各砲兵中隊は、悉く火力を西七里溝庄に集め、此攻撃の準備をなせり。是より先き、我左翼前より、轉回しつゝ、ある敵は、我攻撃に際し、攻撃隊の左翼に向ひ、側面展開を以て應戦し、頻りに連發射撃を開始せり。是に於て、此攻撃隊の左翼は、兵力微弱にして、敵の爲めに沮敗せらるゝの恐れあるを以て、更に歩兵第三聯隊の一大隊を派遣し、攻撃隊の左翼に赴援せしむ。而して我左翼隊は其砲兵一中隊を、土城子の北方約二千米突に進め、此攻撃を援助したり。午後四時三十分に至り、我攻撃は大に其功を奏し、即ち西七里溝庄及び、黃家窩堡の諸村落を陥れて之を占領す。敵の右翼は大

我攻撃大に功を奏す

に亂れ、人馬相踏藉して其一部は營口に、其他の一部は、西方海岸に向て潰え走る。敵は此二村落に完全なる防禦編制を施し、村落の圍壁には、砲門及び銃眼を穿ち、且我曳火射撃を防止する爲め、盲障狀に掩覆體を編制せり。之に加ふるに、更に不完全なる樹枝鹿柴を植て、我攻撃を沮せんと企てたり。要するに、是等は閉鎖せる一大角面堡にして、一の複廓を形くれり。これ其砲兵の比較的頑強なりし所以なり。土人の言に依れば、敵將馬參元なる者、此廓中に在て守備を勉めたりと。本日の戦敵は、其最も得意とする不規則なる連發射撃を逞うし、其勢甚だ猛烈なりき。然れども、我歩兵の勇猛絶倫なる、毫も屈色なく、積雪を蹴て進み、隊伍整々些の紛擾なし。故に敵は我突撃を俟たざるに、先づ退却に傾けり、是に至て我師團は、既に其目的を達せしを以て、乃ち全軍を收めて、大平山の東南なる諸部落に宿營することに決定し、左の如く配備の位地に就けり。

全勝後の配備

- 一 歩兵第一旅團は、騎兵第一大隊(一小隊半を缺く)、歩兵第二聯隊の一大隊、工兵第一中隊、衛生隊半部を附し前衛に任じ、其本隊を孫家溝子附近に置き、南太平山村、破橋子前崗子附近に宿營し、太平山を守備せしむ。
- 一 歩兵第三聯隊には、騎兵一小隊砲兵一中隊を附し柳樹屯・家夏屯・香爐廠の間に宿營し

老爺廟に對し警戒せしむ。

一 師團本隊は、三家子と、坡臺子に宿營す。

更に詳かに西旅團の運動を観るに、初め本日午前五時三十分、南太平山の敵に對し、約三千米突の處に砲兵陣地を布けり。同時昌邑屯に集合す。旅團長は、松永聯隊長に、一二の二個大隊を率ゐしめて、之を攻撃隊に充て、旅團長親ら三大隊を率ゐて、豫備隊となる。是より以前、太平山には、敵兵前夜來篝火を點じて聲勢を示す。而して敵は我軍の爲めに、恰好の目標を與ふるものたるを覺らず。我軍、乃ち篝火に向て砲撃を開始しけるに、敵は小銃を以て、南太平山村と、太平山の高地より應戦し、而して別に敵に砲撃あるを聽かず。是に於て、前日來太平山の敵の砲四門を有するとの風説は、全く虚妄なることを知る。依て我歩兵は、敵陣を距る殆ど七百米突の所に前進したるに、敵は鹿柴を築きて、之に據り、連發銃を以て猛烈なる射撃を行ひ、敢て退却するの色なし。我軍是に於て、敵彈雨飛の下を冒し、左翼を張て、敵を距る四五百米突の地にまで前進し、一齊軍歌を唱へつゝ、急激なる突貫を以て敵陣に逼る。敵兵先を争て遁走す。我兵北ぐるを追うて前進し、南太平山及び、土城子を占領す。乃ち我砲兵を慶て陣地を太平山に進ましめ、西七里溝庄の敵に對せしむ。其後更に砲兵一中隊を太平山の東端に分派し、陣地を布かしむ。而

西旅團の
奥方

乃木少將
の膽勇

して松永聯隊の率ゐる歩兵を土城子に集め、豫備隊は南太平山村に集合せしめたり。午後一時騎兵を黃旗廠に放ち、敵狀を監視せしむ。午後二時に及ぶ頃、敵の右翼一縱列となり、我左翼に向て逆撃し來るの形勢あり。我騎兵は隨意退却をなしつゝ、監旗廠に引上げたり。敵は塘窪附近に於て、其進行を停止したり。此際我騎兵と小衝突ありしが、我兵一も損傷なし。此日の戦、清軍其平生に似ず、頑固の抵抗を以て我を苦めけるも、我軍の能く之を挫拆せしめしり、乃ち西旅團の力與て多きに居る。是れ此運動を特記する所以なり。此役乃木少將も、混成旅團を指揮して、健闘太だ勉む、敵の榴散彈飛で少將の後方少距離に於て破裂す。少將顧みず、鞭を擧げて進み、叱咤兵を督勵して依然たり。其膽勇以て見るべし。此戦に當り、西七里溝最も激戦を極む。初め松本砲兵大佐は、東七里溝の敵兵を撃退し、進で西七里溝の敵壘に向て砲撃を始む。其距離一千六百米突。畑中の地物を利用して砲列を布き、連發間斷なきも、敵は頑強更に動せず、且つ大小砲を劇射して、應戦最も力む。故に此際我に多くの死傷を出し、西山砲兵大隊副官は、敵の砲彈に胸部を碎かれ、第十五聯隊副官岩根大尉、又太平山の上に腋下に砲丸を受け、共に雪中に殞命したり。此時山地師團長は、伊瀬地參謀長及び、木村第三聯隊長を隨へて、太平山の南方に陣し、各隊の戦狀を望見せしが、眼前に此兩副官を失ひ、且つ尙ほ損害の多からんとするを目

齋藤少佐の奮闘

撃するや、乃ち乃木少將に赴援を命ぜり。少將因て河野十五聯隊長を、敵の右翼正面及び、左翼に當らしめ、自ら豫備隊を率ゐて其右翼に出で、彼我相應じて最も猛烈に發射したり。然るに、敵の又動かざるのみならず、却て猖獗の色あり。是に於て、慄悍なる我齋藤少佐は、例に依り大刀を揮ひ、衆に先んじ敵壘に肉薄して遮る敵を切殪し踏倒し、火花を散して相戦ひ、次で粟屋第二大隊長、殿井第三大隊長、又部下の兵を麾きて之に迫り、小銃を發射して雨霰の如し。時に午後四時。此十五聯隊の、或一部隊の如き、彈藥既に盡きて、未だ補充の間を得ず、徒に身を地物に托して、敵彈を避く。かくと見る乃木旅團長は、馬を驅て砲烟の中を飛び、今村第三大隊長と呼で曰く、第十五聯隊の全力を擧げて、苦戦尙此の如し、急に赴援し、以て伍間増加に當れど。因て今村少佐は、川上第十中隊長及び、廣中第十二中隊長に、各其手兵を附し、西七里溝の正面及び、背面に向ふを命ず。時に戦ひ方に一層の激烈を極め、敵味方の死傷最も多く、雪中死屍累々算を亂せり。戰是に至て、廣中、川上の兩大尉銃戰の迂を思ふや、叱咤一番、手兵を麾きて、一齊吶喊、敵の堅壘に突入す。此勢に勵まされて、第十五聯隊の各隊、同じく四方八方より亂入し、遂に之を蹂躪して一大哄聲を發す。時に午後五時三十分。敵の支へずして悉く走る。以上の我兵、即ち是れ乃木少將部下、勇將の下果して勇士に富める此の如し。又此時まで右側老爺廟の前面に

七里溝の激戦

廣中川上の兩大尉の働き

隱岐大佐一隊の苦戦

長柄軍曹名譽の最後

辻一等卒の立功顯

在りて、牽制の任に當りし隱岐大佐の一隊は、猛烈なる敵の砲彈を喫し、危険甚しかりしも、將士威自若として其進退宜に従ひ、即ち老爺廟、姜家房等より、西七里溝に轉せんとするの敵を喰ひ止め、以て乃木旅團方面の攻撃を容易ならしめたり。其苦心知るべし。其他各方面の戦狀、我兵の苦戦往々に類せり。此日太平山の攻撃に際し、一下士あり、敵彈雨下の裏に猛進し、偶々飛丸來て其胸部を貫く、其將に瞑せんとするや、一聲高く 天皇陛下萬歳と三唱す。下士、名は長柄爲吉、第八中隊の給養軍曹なり。實に天晴なる最後と謂ふべし。又一卒辻幸吉は。野戰砲兵第一聯隊第二大隊第三中隊の一等卒なり。罪あり將に本國に拘送せられんとす。幸吉深く其國人に見ゆるの顔なさを耻ぢ、死を決して立功贖罪を計る、是より先き同月二十二日午前四時頃、隙を窺て、蓋平憲兵屯所を脱し、蓋平城の牆壁三丈餘、頂上より飛下り、飛雲寨の方向に走り、衣服を脱して、之を土民に與へ、形容を變じて太平山の北方を斜めに、畠地の間を進みしに、途上清兵二名の來るに會す。乃ち此邊四千米突の處に於て、暫時徘徊の後一村落に入り、土民の文字ある者に就き、始めて北七里溝なるを知る、因て敵狀を問へば、曰く、太平山二道溝に前軍あり、後軍は、老爺廟にありと。此夕民家に就き、一宿を乞へども許されず。去て一千米突を隔てたる前程に空屋あるを見、僅かに一夜を此に明して、翌日に至り太平山の北側敵の舍營に入り、土人に

混じて薪炭を運搬するの状を爲し、兵營の周圍を巡回して、備さに敵狀を視察す。時に敵の砲兵、山砲四門を有する一隊の、東北方に行くを見る。而して敵の防禦線は、太平山にあるもの、如し。乃ち山上に登らんとせしに、中途敵の騎兵三騎に追はれ、二騎は止まり、一騎は徒歩して來り迫り、面貌を熟視し、語を交へずして去る。因て幸に太平山に達し、四邊を偵察するに、敵は只々山上に四五名の展望兵を置けるのみにて、前哨の設け、及び防禦線の配備等、一もあることなし。是より更に海岸に進まんとせしに、會々敵兵の多さと、砲聲の頻りに聞ゆるを以て果さず。太平山の前方村落を巡て歸る。幸吉、此冒險的の偵察を企てしより、只僅かに野菜捕獲を食せし外、絶て飲食せず。此間屢々寒氣の爲めに昏倒せんとして、敢て屈せず、遂に其志を成すを得たり。我軍今回の戦幸吉が偵察の結果に裨益せらるゝ所、決して尠少にあらず。因て更に復隊の恩命を受くと云ふ。嗚呼、人に尙ふ所は、廉耻是れのみ。廉耻在て。而して後氣節生ず。幸吉、初め罪を犯すと雖も尙、能く其耻を知る、故に此氣節を勵して、我軍に裨益し、以て立功贖罪の典に處せらる。これ亦一異人と謂ふべし。

此役我軍の死傷は、將校以下二百七十四名にして、其中死亡者は二十九名なり。而して將校の死傷は左の如し。

我軍の死傷者

戦死者	歩兵第十五聯隊副官陸軍歩兵大尉	岩根常重
	野砲兵第一聯隊第二大隊副官砲兵中尉	西山龜吉
負傷者	歩兵第二聯隊附歩兵中尉	板橋直虎
	歩兵第二聯隊附歩兵中尉	岡澤慶三郎
	歩兵中尉	町野惟
	野戰砲兵第一聯隊附砲兵中尉	森本瀧一
	歩兵第十五聯隊少尉	島田左武
	歩兵第十五聯隊附陸軍三等軍醫	莊司寧

敵の死傷
敵軍の指揮者

而して、敵兵の戦死總數は、百二十餘名、(戰場に其屍を發見せし者のみにて)負傷は固より知る由なけれど、即死の數より推すとせば、必ず八九百乃至、千人の多きに上るべしと云ふ。此日清軍を指揮せし者は、二道河方面なる敵の右翼隊は、宋慶にして、西七里溝一帶に陣せし中央隊は、馬參元・又老爺廟及び、姜家房邊なる左翼隊を指揮せしは、蓋し徐邦道ならん。而して其兵の總數は、一萬二千餘人、大砲十門許、又小銃の内には、獨逸新式の『ルベール』あり。之に例の無煙火薬を用ひ、其音響甚だ微々たりし故、我に取りては、進撃に頗る不便を感せり。又當日我軍の不

幸なりしは、終日雪中に奔馳して、戦闘に従事せし爲め、兵士の凍傷を患ふるに至りしことはなり。其數は、實に全師團にては、三千人の多きに上り、其中全く戦闘力を失したりしは、五百名にして、他は長きは一週間、短きも三日の療養を要したりき。

御聖徳

爰に我 大元帥陛下は、夙夜軍國の事に御勵精あらせらるゝこと、既に半歳、而して安藝の行宮のいふせきとも厭はせ給はず、只管征清の事にのみ 大御心を勞たづせ給へば、よくては玉體の程も如何あらんと、侍従の諸官を首めとして、下々に至るまで畏こけれども、痛心措かず、御慰にもとて、様々の物共奉れども、さしも御執心あらせられき。只御閑暇の御折柄には、侍従の武官より、軍事上及び其他に關する勇ましき物語共、さこね上るをのみ、こよなき御事に御思召させ給しものや。されば何も 御聖徳の最も 宏遠なるを仰がざる者なかりき。此間にありて、更に叙慮を惱させ給ひしは、本年一月我參謀總長宮陸軍大將大勳位熾仁親王殿下の御薨去なりき。宮は大本營西進以來、廣島に在して日夜軍務に執掌あらせられしが、去年十二月の初旬より御不例の爲め、播州舞子濱にて、御療養遊ばしけれども、其驗なく、本年一月二十四日に、一旦御歸京あらせられ、殘る方なき御養生、至らざるなき國手の盡力も、遂に其効を奏せず、同日

有栖川參謀總長の薨去

午後三時薨せさせ給ひぬ。御壽六十一歳なり。殿下資性剛毅、御身を持たせらるゝこと、極めて嚴正、常に軍人を以て自ら奉じ給ひ、維新の初より、御勤職に翰躬あらせらるゝこと、實に絶類なりしと承はりぬ。 大元帥陛下御追悼の餘りに、同二十八日を以て、御勅使鍋島式部長を、宮の御邸に遣はされ、勅語を下し給ひぬ。

勅語

卿懿親の身を以て夙に維新の宏圖を翊げ文武の資を抱て克く中興の鴻業を輔く積徳盛望内外重を歸し偉勳不續古今觀る希なり洵に是宗室の羽翼實に國家の棟梁なり今や隣邦釁を啓き六師征て討す卿職軍機を掌り日に帷幄に參し籌畫愆りなく賛襄功あり惜むらくは全局を收むるに至らず中道にして長逝す曷を痛悼に勝ん茲に式部長從二位勳二等候爵鍋島直大を遣はして賻弔せしむ

故有栖川大將の宮へ下し賜し勅語

薨去の即日、官報を以て三日間の廢朝五日間の宮中喪仰出され、翌日勅令を以て、國葬の事を布告し、且つ三日間歌舞音曲を停止せしめらる。

是より先き、殿下の御容躰漸く重らせ給ふや、一月十六日を以て、特に菊花章頸飾を賜ひ、功二級

に叙し、金鵄勳章を賜ひぬ。是に至て、國會は國葬費二萬圓を可決し、且つ薨去の當日を以て、休會弔意を表せり。同二十九日豊島岡の御陵墓地に葬る。今其碑銘を録し、以て御履歴に代ふ。これ川田剛の撰なり。

故參謀總長兼神宮祭主陸軍大將大勳位功二級熾仁親王墓誌銘

親王諱熾仁、一品熾仁新王第一子、母妃藤原廣子、以天保六年二月十九日生、嘉永二年爲親王、任大宰帥、叙三品。文久二年、孝明天皇愛海防廢弛、問策、親王奏對稱旨。明年有事於加茂兩社、石清水社、使親王先往視事焉。元治元年爲國事掛、是時國家多故、物情騷然、親王爲幕府所忌、免職屏居、既而事釋、召參朝政。慶應三年十月、復爲國掛、十二月補總裁職、叙二品、賜隨身兵仗、聽帶劔。是歲天皇崩、今上登極、明年改元明治。會東軍抗命、二月爲征東大總督、授錦旗節刀。於是率衆東下、數月平賊、多賜金帛。明年春以功賜世錄千二百石、七月辭大宰帥、三年四月任兵部卿、明年罷。是歲諸侯納封土、以福岡藩內訌難治故、用親王爲藩知事、衆心悅脫。明年賞功賜直垂一領、黃金五萬匹。八年七月、任議官、十二月叙勳一等。九年三月任副議長、尋陞爲議長、兼議定官。十年一月、從幸於京都及大和。二月西南之亂、親王爲征討總督、六師奮戰、賊勢漸挫、遣東久世

有栖川熾仁親王殿下の碑銘

侍從長、西郷中將等、就褒其畫策得宜、又遣侍臣、侍醫、賜酒饌、藥劑、及事平、勅賞其功、十月拜陸軍大將、兼議長兼議定官如故。十一月授大勳位菊花大綬章。十三年二月任左大臣、兼議定官如故。十四年從幸於東北諸州、攝行參謀本部事、及還慰勞賜金。十五年、露帝即位、使親王代往賀之、因巡遊歐米諸國、踰歲而還。十八年罷左大臣兼任參謀本部長。十九年九月初近衛都督。二十一年、兼任參軍。二十二年、兼任參謀總長。二十四年十二月、兼任神宮祭主。明年補特別大演習觀兵式總指揮官。二十七年夏朝鮮亂。遣兵護我吏民在彼地者。清國有違言、乃大舉伐之、因設大本營於宮城、親王奏定大計。九月進大艦於廣島、扈西行、時捷報屢至。二十八年一月特授大勳位菊花章頸飾、又特叙功二級、授金鵄章。先是親王罹疾、以軍國多事、夙夜侍帷幕。醫師相勸、使其乞暇療養於播州舞子別業。遂歸東京。是月二十四日薨。享年六十一。天子聞訃、震悼廢朝三日、宮中喪五日、渴密三日、使鍋島式部長吊且贈焉。二十九日、以國葬儀、藏柩於城北豊島岡。親王威儀端莊、大度容物、夙致力國家、爲中興元勳。不獨海內仰之、露佛埃伊蘭西諸國、亦皆贈勳章。德望如此、而未及見王師凱旋、天邊奪其年。嗚呼、惜夫。銘曰
天潢分派。曰有栖川。偉矣親王。宗室之賢。氣象卓爾。儀容儼然。德高望重。士懷民親

矧當三國寄。以濟三時艱。東征西伐。世推三勳。爰卜三幽居。長安三其神。神乎護三國。皇威益尊。

小松大將
宮參謀總
長に補せ
らる
小松總長
宮令詞

嗚呼征清の事、其成るに垂んとして此凶訃を聞く。獨り親王の爲めに之を惜むのみならず、抑々又軍國の不幸なり。哀哉。是に於て一月廿六日、陸軍大將大勳位小松宮彰仁親王の近衛師團長を免じ、更に參謀總長に補せらる。參謀總長宮の任に就かせらるゝや、乃ち令詞を其幕僚に下し給ひて曰く、『參謀總長の重任たる、平時に在て既に爾り。況んや外國と交戦の日に於てをや。昨年清國と開戦以來、我軍の頻りに克捷を奏するや固より 大元帥陛下の聖威聖徳と、將校下士卒の忠勇とに依ると雖も、前總長經營參畫の力、寔に其の多きに居る、而して不幸、中道にして薨去せり。不肖彰仁をして、乏を此職に受けしめられ、恐懼の至りに禁へず、然れども、勅旨の嚴なる、敢て固辞するを得ず。茲に恭みて之を拜受し、鞠躬勉勵、専ら 大元帥陛下の大命を遵奉して、前總長の規畫に率由し、鴻猷を翼賛せんとす、須らく此意を體し、事細大となく、毎に彰仁の不逮を助け、以て彰仁をして奉ずる所の任務を全うせしめんことを切望す』と。同月二十一日第四師團長能久親王殿下を以て、近衛師團長に補せられ、陸軍中將山澤靜吾を以て、第四師團長に補せられたり。

北白川中
將宮近衛
師團長に
補せらる

軍事探偵

清の間諜

カメロン
ミウイラ

是時に當て、戦線大に張り、歩武漸く進む。進むに従て、彼我の情愈々明瞭ならず。互に間諜を放て、深く探偵に従事せしむ。故に兩國之を戒むること、最も密なり。従て覺はれて捕はるゝ者あり、或は嫌疑を以て拘せらるゝ者あり。先づ疑はれて、我に拘せられしは、清人莫鎮藩の一行あり。莫鎮藩は、米人『カメロン』同『ワイルド』の二名と共に、客年十月十六日桑港出帆の郵船に便乗しけるに、偶々新に我大坂時計製造會社技術長に聘せられし、米國人『ウイラ』ある者と邂逅したり。互に一面識あるにあらざれども、漸く言語を交うるに至りて、『カメロン』は、一日『ウイラ』の職業目的地等を尋ねしに、『ウイラ』は、機械師にて、日本大坂の時計製造會社に聘せられ大坂に赴く者なりと答へたり。『カメロン』曰く、君の機械師たる甚だよし、吾等に今莫大の金儲口わり。君も亦事を共にせずやと、頻りに慫慂せしが、『ウイラ』、問ふに其事を以てせしに、『カメロン』曰く、吾等は是迄になさ水雷機の發明者なり。此機を以てせば、如何なる堅艦大船と雖も必ず微塵となして、誤つことなく、既に智利の海戦に於ても、大功を立てたるものなり。此度日清の開戦に當り、清國海軍の屢々敗績するを見るより、余等は在米清國公使に向け、此新發明の水雷機を賣込んことを談せしに、公使は早速に吾等の技術を採用し、先づ手金として金貨一萬五千弗を渡し、尙途中の旅用萬端は、別に之を任拂ふこととなり、同公使館附の書記官莫鎮

藩と同行し來りし次第にて、愈よ成功の曉には、莫大の報酬を受る約束なりと語れり。依て『ウイラ』は其破艦の方法を尋ねたるに、曰く、吾等發明の水雷機は、尋常のもの異なり、第一は、海中に數百千の小水雷機を流すに在り。若し之に觸るゝとせば、如何なる堅艦巨船といへども、忽ち粉碎して影を止めざるべき強力を具へ居れり。第二は、電氣を以て紙鳶を空中に飛ばし、天上より爆裂彈を敵船中に落下せしむるにあり。現に其爆裂彈の、茲よ所有せりとて、砲の中より爆裂彈九個を取出して之を示せり。『ウイラ』は、之を聞きて思ふ様、海中の水雷なれば兎も角も、空中より爆裂彈を投下するなと云ふに至ては、決して信すべし事にあらず、是れ必ず困厄の極に陥れる支那人を欺きて、金錢を詐取せんとする大詐僞師ならんとて、彼等が頻りに仲間入を薦むるに對し、大坂の時計製造會社との約束變じ難ければとて、固く其勸誘を謝絶したるに、『カメロン』等は、遂に強談を以て『ウイラ』の同意を促すに至り、若し同意せずば、『ウイラ』夫婦諸共銃殺せん勢あるに由り、『ウイラ』は兎に角、日本に到着の上にて、決答すべしとて、程善くあしらひ居たるが、彼等も猶も『ウイラ』に向ひ、若し此事を口外するに於ては、何時にても直ちに銃殺すべしと脅赫したり。依て『ウイラ』は、熟ら思ふに、假令彼等の所業は、杜鵑の所業に過ぎずして、此度の戦争に關し、何等の影響をも及ぼすこと能はざるべきも、既に日本の軍艦に對し、斯かる

問諜嫌疑者ノ誓文

舉動に出づる者を、其儘に黙視し置くは義に非らず、假令一身は如何に成り行くとも、之を日本政府の筋に知らすに如かずと決心し、同船の嶋村墨西哥總領事に密告したれば、同領事は横濱着の上、直に大本營に右の次第を上申したる結果、彼等が横濱にてシドニー號に乗換へ、上海に赴く途中、遂に神戸に於て取押へられたり。之を密告したる『ウイラ』着後復讐の舉に出でられんことを恐れて、其居所を隠蔽したり。

今此等問諜嫌疑者の供述、并に誓文謝狀を擧げて其事を詳にせん。

(一) 米人ジョンワイルドの誓文

- 余は謹て、茲に誠實に自由の意志を以て、左の諸項を誓言す。
- 一、余は英蘭に生れ、一千八百六十八年、亞米利加合衆國に歸化せり。年齢は五十二歳なり、姓名はジョンワイルドと稱し、住所はロード、アイランド州プロヴィデンス府、リヴァー街百十一番地にして、職業は發明なり。
 - 二、余が清國に渡航せんことを目的は、余が戦争に關して爲せる、秘密の發明を同國の政府に賣らんが爲なり。
 - 三、余は、元老院議員チルソン、ダブリュー、アルドリッチ氏の紹介を以て、華盛頓に於て清國公使に面會し、同公使に書類を呈し、之に記載したる價格を以て、前記の發明を賣却せんことを談せり。此時通辭を爲したるものは、チャン、ファン、ムーア(即ち莫鎮藩)にして、爾後同人と交通せり。
 - 四、余は、九月最終の日曜日を以て、ナラガンセット、ホテルに於て、前記莫に面會せり。又ジョージ、カメロンは、十月最初の月曜日全所に來れり。是に於て三人同旅館に會合したり。
 - 五、余は、前記カメロンを余の助手として、前記莫に紹介せり。
 - 六、余は、前記莫より余が家族の爲に、金貨九百弗を借用せり。

七、余は、清國公使に向て、余の秘密を啓發するときは、直に金一萬弗、若しくは、之と同一の價格を有する貨幣を仕拂はれんことを請求したれども、目的を達せざりしを以て、再び前記英に向て、清國渡航旅費、其他の爲め、五千弗借用せんことを請求したれども、同人は之を余に給與するを得ざりき。

八、ジョージ、カメロンに對する約束は、余は同人に向て、十萬弗の百分五を與へ、同人は其報酬として、余を補助するに在り。

九、清國に於て消費する旅費は、同國政府は之を余に給與すべしと信せり。

十、前記カメロン、莫及び余の三人は、清國へ赴くの目的を以てプロヴィアンスを發せり。

十一、若し余にして、放免せらるるときは、余は米國に歸り、決して清國に赴きて、余の發明を賣らざるべし。又余は決して、今回の戦争に於て、清國政府の役を執らざるべし。

十二、余は、莫鎮癸及び、ジョージ、カメロンニ關連する嫌疑の爲め、拘留せられたることに對して、非難する所るなし。

十三、余は、前記英に、余の秘密發明を賣りて、清國政府に満足を與ふるの結果を示すことを約せり。

十四、余は、拘留せられて以來受けたる懇切なる待遇を以て全く満足せり。

一千八百九十四年十一月十日神戸に於て

ジョーイールド

(二) 米人ジョージ、カメロンの誓文

余は、謹で茲に誠實に、自由の意志を以て、左の諸項を誓言す。

一、余は蘇格蘭ダンテアに出生し、亞米利加合衆國に歸化したるものなり。歸化したる年月は、一千八百九十一年十一月三日なり、余の年齢は二十八歳なり。

余の姓名は、ジョージ、ハッパナリ、然れども米國へ渡航の際、母方の姓カメロンを冒し、其姓を以て歸化せんことを申出せり。

余は、今回米國を出發する前、凡そ四週間に來、ハッパナなる姓を稱せり。余の住所は、紐育市ブロードエー街二百四番

カメロンの誓文

地、辯護士チヌスウキンソン氏方なり。

二、余は本年六月の初旬より、十月三日頃まで、ホツチキス製砲會社の雇となり、水雷の試験に従事せり。

三、伯爾西爾國內亂に際し、余は同國政府の爆製巡洋艦ニクテロイ號に乗船し、大砲、水雷、火藥及び爆製藥の監督を爲せり。

四、余が初めてジョン、ワイルド氏と相識りしは、本年三月にして、六月頃余がホツチキス製砲會社に雇はれたる當時、氏はプロヴィアンス府に居住せり。

五、余は、今回出發の前四日頃ワイルド氏の宅に於て、初めて英兵に紹介せられ、之と相識るを得たり。

六、ワイルド氏は、同國の政府に其發明を賣らざるも、其價格の百分五を余に與へ、別に余の盡力の爲め、若干の月俸を給與すべしと約せり。而して月俸額は、後日を以て決定するの約なり。

七、ジョン、ワイルド氏は、余が旅費として、消費したる金額を、余に辨償するの約なり。

八、莫氏ワイルド氏及、余は共にプロヴィアンス府を發し、清國に向へり。余等は實にワイルド氏は、同國に於て其發明を賣付くることを得べきものと信せり。

九、余及びワイルド兩氏の審問を以て、帝國軍艦筑波艦長黒岡大佐が、余を拘留せらるゝは當然にして、余は同大佐及び他の將校の待遇に對して、全く満足を表す。

十、余は放免せられたる後、和議の成立つまでは、決して清國に赴かず、又何等の資格を以ても、清國の爲に執役し、若しくは清國政府を代表する個人と、何等の契約をも爲さざるべし。

一千八百九十四年十一月十日神戸に於て

ジョージ、ハッパ

從前の姓名は ジョージ、カメロン

(三) カメロンの感謝狀 (附ワイルドの同意表明書)

余は、茲に余の拘留中、貴政府より懇切なる待遇を受けたることを感謝せんことを。余は、又黒岡大佐及び、其他士官水兵諸士が、其責務を盡すに際し、最も嚴肅にして、而かも丁寧懇切を極め、以て大帝

カメロンの感謝狀

國の面目を辱しめざりしことを、貴政府に申告せんす。貴政府の待遇は、余をして余が今回の戦争に於て、清國に援助を與ふるの念を慥きしを、深く悔恨せしめたり。故に余は茲に何等の方法を以てするも、清國を援助し、若しくは之に奉事せざることを確言す。

又悲しく惟るに、日本皇帝陛下及び、皇室は其規畫せらるゝところ、事として成功せざるなし、以て益其國民を文明及び、學術の道途に進ましめ給はんことは、余の確信する所なり。

余は、目下日本と、米國との間に成立せる親密なる關係の、決して断絶する無きを信す。

余は最後に於て、更に貴政府に向て謝意を表はし、併せて貴國が遠からず、列國の間に於て、當然占むべき首要の地位を得べきを信する旨を断言す。 敬具。

一千八百九十四年十一月十一日神戸に於て

シヨージ、ハワイ
舊氏名、シヨージ、カメロン

日本帝國政府御中

余は、本文ハッ井氏の能する所の諸項に對して、喜んで同意を表す。殊に日本皇帝陛下及び、皇室に向て、余は其成功の盛ならんことを祈る。日本に向て、歐米列國の間に、首要の地位を占むべきものなることを、現に余等に悟らせしめんことを望む。

シヨン、ワイルド

カメロンの別誓文

(四) カメロンの別誓文

余は、目下日清兩國の間に於ける戦争に關し、何等の方法を以ても、清國に援助をなし、又は日本に損害を及ぼすの虞ある報道を清國政府、若しくは其代表者に與へ、又は清國政府、若しくは其代表者に向て、余の發明を賣却し、或は之を何等の契約を結ばざることを茲に確言し、名譽に懸けて之を盟ふ。

余は、又日清兩國の間に和議の成立せざる間は、何等の事情あるとも、清國に赴かざるを誓言す。

余は、日清間の戦争に於て、清國に援助を爲すの目的を以て、ワイルド氏と同行を約したるを悔ゆ。

清人莫鎮藩の口供

一千八百九十四年十一月十一日神戸に於て

(五) ワイルドの別誓文

余は、目下日清兩國の間に於ける戦争に關し、何等の方法を以ても清國に援助を爲し、又は日本に損害を及ぼすの虞ある報道を清國政府、若しくは其代表者に與へ、又は清國政府若しくは又其代表者に向て、余の發明を賣却し、或は之を何等の契約を結ばざることを、茲に確言し、名譽に懸けて之を盟ふ。

余は、又日清兩國の間に和議の成立せざる間は、何等の事情あるとも、清國に赴かざることを誓言す。

余は、日清戦争に於て、清國政府に援助を與ふることを約束したるを悔ゆ。

一千八百九十四年十一月十一日神戸に於て

シヨン、ワイルド

(六) 清人莫鎮藩の口供

八月第一水雷軍艦出帆、紐育港に在る三日、プログレイテンス海軍も一兩日に過ぎず。水雷製造等を遊覽せり。ホテルはナラカンセツトと云ふ。カメロンは從前機械場に雇はれるを聞きし、其時は已に罷めたり。兵器彈藥等は、此所にて請求せしことなし。カメロンに逢ひしは、アラオンの宅にして、其時連れ立ち、支那行の事を相談せしが、其折には、別人あらざりし。我公使館在勤のとき、カアテンゲルより、數多の書類を送り來り、其緊要なるものを繕譯し、手許に残し置けり。三人面會前に於て、旅費手當等を仕拂ふことは、書面にて約束したり。併しながら、カメロンと相談せしにあらす。ワイルドと約束せしは、若し支那に至り、成就せざれば、往復の船賃を拂ひ遣るべしとのことなり。其時カメロンを伴ひ行きては如何と、ワイルドが云ひたるに付き、承諾したり。プログレイテンスより金山に到り、總領事館に到着せり。金山とは即ち桑港の事なり。途中の流車代は、各自に拂ひたるに、我よりはワイルドに百兩を與へ置きたり。カメロンは、プログレイテンスに於て初対面したるまで故、性質の如何は承知せず。唯彼等は、從前アラツル革命の時奮力せり云ふことを新紙上に承知せし迄なり。只ワイルドより、カメロンは、機械場に雇はれ居りしことを承知せり。桑港に到着せしは、凡そ十日十一日頃なり。余が總領事に見えし時は、今般辭職の上歸國するものなりと語りし外、是等の人と支那へ

同行し、若し事成就せば、必ず都合よきことあるべしと云へり。又ワイルドは、此秘密事件は、米國のみならず、兩三ヶ國へも洩りたりしが用ひられずと云へり。其時總領事は、此事は甚危険なり。日本に捕獲せらるゝやも洩られずと云ひたるも、余は畏るゝに足らずと答へたり。桑港に於て、余が集めたるは五千弗にして、内二千弗は、余が豫め桑港の朋友に融通方申送りおき、略々見込ありとの來信に接したるに付き、來り見れば豫算の如く入手せり。之に余が従前某商店に預け置たる三千弗を合せ、都合五千弗となりしなり。公使は、最初の内は、此事を知らざりしも、後にて此事を聞き、余が獨り功勞を得んことを恐れ、始めて公文を作り、李鴻章に通知せし始末なり。華盛頓よりアロワイテンスへ出發の際、旅費として三百五十弗を請取り、自分の貯蓄金若干を加へ、凡そ七八百弗は、持参せりと記帳す。尙熟考するに、自分の貯蓄金は凡そ八百弗なりし故、之に歸國旅費三百五十弗を合すれば、一千二百弗なるべきも、一千三百弗には上らざりし。公使が此事を知りたるは、新聞紙上にて承知せし計られず。尙熟考するに、公使館の某譯官へ宛、書面にて通知し置たることを思ひ出せり。桑港に於ての集金は、事成就せば、報酬を與ふべく、成就せざれば其迄なりと約定なり。此舉に付ては、總領事へ談じたることあるも、詳細なることは語らざりし。右は機密の洩れんことを恐るればなり。

五千弗差引勘定

華盛頓アロワイテンスの費用は、各數十弗。旅中中の飲食費三十弗、桑港の費用數十弗、ワイルドに與へたるは二百八十弗、自分の船賃百八十弗、船中の雜費二十弗、横濱にて上海行の船切符と、再換の爲め四十五弗を費したり。從來カメロンには、一錢も與へしことなきも、ワイルドよりカメロンへ與へしや否は、判然せず。最初ワイルドが彼を推舉せし時、余は引運るゝの費用なしと斷りしに、ワイルドは、彼は彼自身の方法あるに付、只彼の同伴を許すべしと云ひたり。畢竟するに、事成就せば、自から彼等にも相當の利益ある譯合なり。ベシツクとは、從來天津の副領事を勤めしことある人物にて、未だ一面識もあらず。ワイルドは兵器製造場の所有者なりと記帳す。余よりワイルドに與へたるは、五百弗に上らず。カメロンへは、一錢も給せし事なし。公使より李中堂宛の書信中、集金六千弗云々は、全く臆集濟にあらず。故に余が現に所持する所ものは、公金にあらずして私金なり。

英 領 藩 母 印

我通譯官
敵に捕へ

山崎三
藤崎三
等敵手
に秀

此「シドニー」號の船長は、始め我の搜索を拒めり。我は兵力を以てしても、必ず之れを遂げんと云ふに至て、彼始めて之を諾せり。「シドニー」號は、佛國の郵便なれば、我は之れを佛國に通知したりしに、佛の政府に於ても、亦我處置に對し、間然する所なき旨を報じ來れり。而して嫌疑者の三名をば、宇治川の自由亭に拘留して、最も之を寛待し、水兵及び巡查をして之れを護衛せしめ、海軍主計清水市太郎等之れを訊問したる後、二名の米人の許され、莫鎮藩は、獨り止められたり。均しく嫌疑者なり、又軍事探偵なり、而して我に拘せらるゝ者、寛待斯の如く、彼に囚せらるゝ者、虐待せらるゝ所なし。我第二軍の花園河口に上陸するや、六人の通譯官をして、敵狀偵察の爲めに出發せしめたるに、天運拙なくして、右の中、山崎三郎は、敵の巡邏卒姓張なるもの爲めに捕へられ、鐘崎三郎も亦た碧河流の附近に於て、滿洲騎兵依常阿の部下に捕へらる。而して藤崎秀は、同月三十日土民の爲めに碧流河に於て捕へられたり。向野堅一の如きは、一旦敵兵の捕ふる所となりしも、銀錢を以て敵兵に啗はし、讒に危難を免れ得たりと云ふ。三通譯官は、捕へられて金州廳に檻送せられ、海防分府(今の民政廳)の牢獄に繋かれ、鞭撻呵責備さに拷問の苦楚を嘗めたり。三人は其日本人たるを公言し、速に斬に處せんことを求むるの外、復た一語を發することなく、双手を後方に縛せられたる儘、箕踞して動かさず、神色自若たり。終に舊曆

十月三日夜十時を以て、連順副都統の洋槍兵之を西門外に拉致し斬に處す。其將を斬られんとするや、敵兵之を縛して、西南の方位に面せしめんとす。蓋清國の法罪人を斬るに、西南に面せしむるを以て例とす。三人乃ち眼を噴らし、罵て曰く、扶桑は我故國なり、東方日出の方位は、我聖天子の在す所、吾等死するも、魂魄は飛んで故國に歸らんと、東向して更に動かす。猛氣長纓を衝き、怒髮天を指す。敵兵大に怒り、刀を擧げて其面を毆ち強て西南に面せしめんとす。三人屈せず、終に斬らる。然るに、其死體は、其後百方搜索したれども、所在不分明にて、空しく従軍僧侶の過去帳に、其俗名を留めたりしが、第一師團司令部雇清人王某の探求に依て、金州城西門外西南の方位二町を距て、旅順街道の右側に埋没しあるを發見したり。乃ち本月六日王某と、三氏に親交ある通譯官澤本良臣、向野堅一と現場に出張したるに、果して地面の異状ある所を發見したるを以て、翌七日に至り、福田副官・軍吏・醫員・憲兵・通譯官等と共に、其東部より發掘を試みたるに、三人身首處を異にして、駢死せり。肉凍り骨碎け、慘狀見るに忍びず。其之を辨識するを得たるは、前齒一本の缺損せるに依て、山崎たるを知り、メリヤスの襦袢を着したるに依て、鐘崎たるを知り、墨丸の稍大なるに依て、藤崎たるを知れり。殊に藤崎が、其足部に纏へる布は、その廣島を發するの前日、向野通譯官と相分割して、所持したる物にして、向野之を見て、懐

捕虜に
りて宋
の近状
を知る

奮の情に堪へずやありけん、暫し涕に暮れ居たり。傍人も、亦斷腸の思を爲し、正視するものなかりしと云ふ。嗚呼、三人死に臨んで節義凛然、胸中の靈淵一波動なく、又一渣滓なし。其忠誠勇烈實に萬古の龜鑑たり。

又我斥候隊に一の清人を捕獲したるものあり。彼れは、從來敵將宋慶に從て炊事の役に奔走せしものなり。故に宋の現狀を語る事、最も密かなり。曰く宋大人は、容貌魁偉眼光炯々として、白髯胸に垂れ、一見直ちに其良將たるを認認するに足る。然れども、年紀既に七十有六、筋骨漸く緩みて、又た昔日の勇氣なし。現に武裝を整へて馬に乗り、馬を下る時の如き、二三の從者右に助け、左に擁して之が救護をなす。殊に軍敗れて歸り來る時の如き、氣息喘々として、且つ涕涙の滴るを見る。現に去る十日蓋平城を失ひたる罪を以て、二品頂戴の位階を褫はるゝや、大人頻りに歎息し、又た熱涙を揮て曰く、我再び關東半島の土壤を回復せざれば、生て山海關を踰ゆる能はず。然れども倭軍の、其勢ひ日に旺にして、我軍は其勢ひ日に盛む。殊に常備の兵は、一戦毎に遁竄して、新募の兵は、招けども來らず。是れ我の大に不利とする所なり。故に此上尙營口を取られ、田庄臺を抜かるゝに至らんか。是れ余が運命の盡くる時期にして、到底倭軍の銳鋒を挫くに由なし。さりとて、未だ戰場に屍を曝すの時に非ざれば、余は止むなく、殘兵を收容

遷都の臨
清帝の上

して、西蒙古に落ち、以て機の到るを待つの外なしと。宋は實に清國無二の良將、末路斯の如きは、亦憐む可し。而して清の勢此に至て、形情愈切迫し、翁同龢、李鴻藻等は、更に上奏して、都を西部に移さんと乞ふ。是に於てか悲痛の上諭は降れり。曰く、朕始め帝國の國務を理するや、務めて諸般の改良をなさん事を圖れり、而して日本は不意に、平和を破り、朕が屬邦朝鮮及、朕が帝國の境界地方を畧取したり。朕は日本人を膺懲せしめんが爲め、諸將を派遣したり。然れども朕は決して日本帝國の平和を害するの意あるに非ず。是朕が祖先及び海外諸國の均しく知る所なり。朕は諸將の其任に堪へずして、兵卒の御し難き、此の如くにして、日本軍の連戦連勝、續々朕の領土を略取し、遂に朕が祖先の墳墓を蹂躪するに至らんとは、毫も豫期せざる所ありし。是蓋し朕が不徳にして、不適任の諸將を用ひたるに因れり。今後仍は形勢最も不幸にして、日本軍の神聖なる宗廟を汚がすが如きのことあらんか。朕は之を擁して死するの外策あるなし。事此に至らば、汝有衆は、恭しく西太后を護衛して、難を西部に避け、別に有徳の人を選びて、皇帝となし、朕が祖先の神聖なる宗廟を守り、以て此汚辱を雪ぐべしと。其國の大、其民の衆と雖も、君臣の困厄是に至る。其竟に爲すなきや知る可きのみ。

第二十 海城の逆襲 (凡三回)

鳳凰城に
於ける立
見旅團の
新年式

從軍僧
木山

我第一軍は、明治二十八年の新年式をば滿州の野にて迎へたり。而して立見旅團の新年式は、鳳凰城裏に於て舉げられぬ。道臺衙門に於ては、午前九時より順次席を亂さず、天皇陛下の御眞影を恭しく拜し奉る。相集る將校には、立見少將・武田歩兵大佐・友安歩兵大佐・富岡歩兵中佐・柴田砲兵中佐・村木騎兵少佐・倉辻工兵少佐・關下監督以下の各將校及び、相當官等、數へられ、客員として其末班に列したりし人々には、清人鄂李、及び支那通譯官等なり。滿街皆日章旗、戸口松飾をなして純然たる日本風なり。茲に奇特者あり、我西本願寺の特派したる特派員、姓名は木山定生、定生は同寺の慰問使として、客臘鳳凰城に來り、各隊及び野戰病院を訪ひ、或は坐談に、或は演説に、我内國人士が敵愾心の余り、節約職金する有様、僻地の物知らぬ老嫗婢女に至るまで、戦勝の爲にとて、神に佛に祈願し居る状態をより説き始め、諸士が双肩の榮譽は、振旅凱旋の曉にあり。諸士の血は、東洋平和の源となり、諸士の骨は、善隣和合の柱となり、近くは聖慮を安んじ奉り、遠くは國の歴史に光を添へん。されば、其の卑怯と、武勇とは、從てつ我國威の消長する所たり。男兒國のために殉す、死して餘榮あり。諸士須らく努力せられよ、我内國人

士等は、諸士が半歳を経ずして、遠く滿州に猛進せし勇武の姿を感嘆措かず、余が本山、又不肖を派して、諸氏を慰問せしむ。其れ已に名譽の死を遂げたる諸士は、慰問途に爲すまじ。然れども、不肖道に其墳墓に遣ふ毎に、弔祭讀經、獨り竊に其幽魂を弔慰す。其生存せらるゝ諸士に於ては、請ふ幸に自愛せられよと。滔々説き去り説き來りて、一掬の紅涙之に繼ぎぬ。聽く者、皆感泣す。定生尊王の志最も切にして、東奔西走、未だ會て尊影を捧持せざるとなし。今日の盛舉に一層の光彩を添へたるもの、實に是れ定生が忠君の致せし所なり。故に今其事を叙し、以て其功を褒すと云ふ。新正の式終るや、翌二日武田大佐は、山口少佐の歩兵大隊及び、四宮少佐の砲兵一中隊を率ゐて、岫巖城に向ひける。然るに、海城の第三師團は、去歲十二月十三日入城以來、孤懸して深く敵地に介り、其遼陽方面には、聶桂林等の大兵あり、其牛莊・營口方面には、田庄臺を根據とせる宋慶が部下出沒し、又蓋平方面には、章某の大兵を引受けたり。而して敵兵來襲の風聞は、日として之れあらざるはなく、若し清兵にして、普通の勇氣あらしめば、此風聞を實にするに難きにあらざるなり。特に蓋平方面の敵は、田庄臺に退却せし宋慶部下と直接の連絡あり。此敵にして、若し大舉北向し、柞木城を衝き之を陥れんか、海城の我兵は、全く糧道を失はん、事此に至らば海城縦令ひ陥落せざるも、我四面皆敵たるは、固より疑ふ可くもあらず。敵勢已に斯

風城の
一部隊
岫巖
城に向
海城に
ける第
師團の
地師團
の位

湯河の
斥候打
死す

斥候の
復讐

くの如くなるに、我軍は、前々占領地毎に、兵を分ちて之に駐屯せしめしが故に、現に海城・柞木城等を守るもの、其數多からず、其危険固より言を待たずして明なり。されば、我軍は爾來各方面に向けて斥候を出し、偵察警戒をさく／＼怠ることなし。一月三日、我斥候は、遼陽方面湯河に於て、敵騎十七八名に遇ひ、我騎兵下士打死せしとの報あり。此日我斥候の湯河を渡りて進まんとするや、敵は前後より現はれて、之を包む、我斥候は直に退却せんとしたるも、河水氷結馬蹄自由ならず、中に一人某は、馬蹶きて打倒れければ直に起たんとするや、又敵九にもや中りけん、再び倒れて終に起たず。敵兵集りて其首級は防寒外套に包み、之を持ち去れりと、後に聞けり。然るに同七日に至りて、杉本騎兵特務曹長の一行は、之れが復讐とも謂ふべき小勝利を得たり。同日午前十時乾線堡より約三百米突の處に於て、敵の歩兵約五十名許り展開し、我に向て急射撃を行へり。我の一時其村より南方、約五百米突の所に伏臥せり。此際我騎馬一頭臀部に負傷して斃る。同時に敵の騎兵十二名、本道上より襲撃し來れり。我兵十六名之を三百米突の所に引付け、照尺合せて一齊射撃を行ふこと二回、敵の騎兵三名、騎馬二頭立ろに斃る。敵は此勢に恐れ、乾線堡に退却せり。我一齊射撃を行ふとき、敵の砲一門乾線堡に現はる。幸に其丸は我兵の頭上を越えたり。我兵四方を願望するに、南に當る一無名村に、身に民服を纏ひたる敵三十名迂

回するあり。我兵乃ち退て東煙臺を過ぎ、西煙臺に至り、其北約八百米突の高地に停止して、敵を瞰視し居たるに、敵の歩兵は我の前方約二百米突の所に來りて展開せしのみにて、前進の模様なかりしがは、我兵は其儘歸城したり。尙間諜の言に依れば、右の外に敵の歩兵二名此時に死せしどなん。又將校斥候として、同じく遼陽方面に向へる渡邊中尉の報告によれば、中尉は八日に、下士一名、兵卒十五名を率ゐて柳河子、楊相公屯を過ぎ、午前十一時半雙臺子に至り、湯崗子方位より來れる敵の騎兵二十餘騎に遇うて之を退け、轉じて前雙臺子に因り、再び前進して、後雙臺子の北側高地に上り、午後一時まで瞰視したるも、終に敵情を得ず。再び前雙臺子に還り、其出口に至る頃、敵の歩兵四五十名許り、忽ち村内に起る。我之と交戦す、時に午後二時敵兵過りて約十三四米突の處に來りたれば、我兵之を斃すこと二十名に及ぶ。中に將校の如きもの一名、騎者一名あり。我亦死者三名傷者三名あり。此戦と同時に乾線堡方位に於て、南進する敵の歩兵約二百名を認めれば、我兵は急ぎ傷者を扶けて退却したれども、敵兵も亦敢て來らず、茲に一種の見本あり。遼陽方面なる鞍山站に來りし清兵には、一寸五分の厚板に鐵板を貼り付け、之に銃眼を穿てる一種の楯を持ちたりしと云ふ。又清兵には抬槍とて、二人掛りにて擔ふべき長筒の奇銃を携へ來りたり。此銃は、曩に柞木城にて分捕し、本國に向け送附したり。敵勢已に

敵の奇銃

第二軍よりの吉報

斯の如くなるも、幸に我軍の嚴戒と敵の持重とにより、未だ海城に寄せ來らざるに、早くも我第二軍の一旅團は、金州・復州より熊岳城を経て、蓋平に進み來り、一月十日を以て、之を陥れたるの吉報あり。曰く、敵は蓋平の南方蓋平河に沿ひ、凡一千三百米突の線を防守せり。旅團は本日(一月十日)拂曉(五時卅分)より、之を攻撃し、九時半全く蓋平を占領せり。敵は營口方面に敗走したり。我騎兵の報告によれば、正午頃約一萬の敵の、營口街道上、前新店(蓋平より二里許)に來り、敗兵を收容して、營口方面に退却せしもの如し。旅團は諸兵連合の一部隊を海山塞に派遣し、主力を蓋平附近に留營せり。明日は此地に留りて、前方の部隊を以て、尙搜索する見込みなり。敵の死者約二百、傷者詳ならず。俘虜百五十、我死傷將校以下約二百五十、俘虜の言に依れば、我に對せし敵は、章の率ゐる嵩武四營・廣武二營・樂字二營・袍四門・張の率ゐる准軍五營にして、徐邦道の指揮する十八營の兵は、昨夜蓋平より三十清里の地に在りと。察するに、正午頃前新店に來りし敵は、徐邦道の兵ならん、本日戦後第一軍參謀青木少佐及び、門司少佐の大隊は蓋平に到着し、貴師團との連絡通せりと。是れ即ち第二軍の乃木混成旅團より、我第一軍第三師團に達せし電文なり。而して電文中に見ゆる門司少佐の事、載せて蓋平戦記にあり。此時に至りて、初めて我第一、第二の兩軍相連絡して、互に氣脈を通じ、依て以て敵と相對することと

海城の地勢

はなれり。
 情々海城の地勢を相するに、金州半島より、陸路支那本部に前進するの最要衝に當り、奉天に北進する者、亦此地を經由するを要す。九連・鳳凰地方より、盛京、若しくは北京に向て進行する者に取りての遼陽に於けると、其要害たるは一なり。古來此地に堅城雄壁を建設して、之を扼せしは、抑々以あり。四方の城門は東及び、南は柞木城に向ひ、南と西とは營口、西と北とは牛莊にて、又北及び東の方は遼陽の道に通せり。而して廓を繞るに通路ありて、一周四十町許、何れの門より、何れの道にも交通自在なりといへども、東門今は半廢毀して、唯廓東の村落に通行するものあるのみ。柞木城に向ふ正路は、南門を經過し、營口・牛莊には西門、遼陽には北門より來往するを其常とす。城内東南南小門裏に高地あり、聖廟儒學及び、娘々廟等は之に據る其庭よりは、城外東南の平原を下瞰し、諸廟の背後の空地よりは、城内一面及、西北廓外を望むべし。城の西隅には、各々獨立の高地を控へ、是等の高地は、城を距る數町乃至、半里にして、互に平原中に對峙せり。東南あるを蕎麥山、西南なるを臙甲山、西北なるを歡喜山、東北なるを雙龍山とす。蕎麥山は、平原と城廓とを隔て、城内高地の南面と相對す。此山は海城占領の當日、敵の一陣地として、又臙甲山は紅瓦寨激戰の曉に、一旦師團司令部の陣したりし地點として、共に攻守に

海城の守備

逆襲の第一歩

必要なる所なりとす。蕎麥・臙甲二山と三角點をなして、遂に南方に當り、八里河子の背後に突出せる東方山脈の一角を唐王山（一名王八山）と云ふ、以上の諸山は、何れも田庄臺及び、營口方面の敵に備ふる前哨地點として、忽諸に附すべからざるものあり。初め我師團の海城に入るや、大迫旅團は、城の西南部に、大島旅團は北東部に合營して、各々持場々々を固め、前哨として臙甲山、唐王山には、塚本、佐藤兩大佐の各隊、雙龍山には三好大佐、歡喜山には栗飯原大佐の部隊より、若干隊宛を交代して出張し、此の外歩騎斥候の前哨線外に派遣せらるゝ、日として之れなきはなく、又守備の計畫糧食の準備等に至るまで、周到完整、實に驚く可し。此堅城に據り、此守備を加ふ、縦ひ敵に幾萬の將卒ありて來るも、奈何ぞ克く之を回復すべき。
 斯くとも知らぬ、遼陽方面の敵兵は、恐なる哉、先づ頃より、鞍山站に陣營を構へて、特に去年十一月以來、我斥候に向て、いしくも突掛ること、最早幾度に及びぬ。元來怯弱なる清兵共、衆寡の懸隔は、我固より問はず、我渡邊中尉の退却の如き、其身斥候の任務を負へるを如何せん。然るに、敵は此衝突に勢を得て、爾後益々前進、我に挑むの狀あり。一月十三日、敵兵約二萬、蛇龍塞、双廟子まで寄せ來る。これ吉林將軍長順之が總大將たりと、土人は言へり。同十四日午前零時着の將校斥候之を報告す。同日午後四時に至り、騎兵斥候よりも、同様の報告あり。同じく土

續々來襲
の報來る

人の言に據れば、敵ハ耿河子、普順屯にも在りて、蛇龍寨に五百人あり、双廟子の敵兵と合すれば、大凡二萬内外ならん。又午後八時頃、將校斥候來り報ず、曰く、敵の歩兵約二千人、蛇龍寨に向て南進すと。且つ此日に於て、善後公署の雇支那人は、慌て、渡邊少佐に告げて云へらく、敵將黑龍江の依は、一萬人を率ゐて双廟子にあり、長白山の韓は、一萬人を率ゐて双廟子に來らんとし、吉林の長將軍は、二萬人を率ゐて乾線堡に來ると。而して右の韓なる者は、元、長白山下の賊魁韓顯宗の孫にして、清廷に歸順し、邊外兵の總大將たり。是等の報告により、我師團長は、敵が南進の目的は如何、先づ之を判断せんとて、翌十五日午前八時に、鑄方參謀を歡喜山に遣はす。因て同參謀は二時過ぐる頃まで、山上に佇立して敵狀を視察せしかども、敵の目的は我軍の久しく、北進せざるを訝りて我の實狀を偵察せんとするか、將又宋慶の軍が、蓋平を進撃せんとするにより、海城の我軍を牽制して、其運動を自由ならしむるにあるか、敵は進むが如く、退くが如く、其運動の捗々しからざるより、終に其目的を確知するに苦むの由を復命したり。此日粟飯原大佐の隊より、將校斥候を双廟子邊に派遣す、既にして西土城子に達し、其高地より窺めば、敵の三縱隊は、老牛園より出で、其二は平二房方向に、他の一は前柳河子方向に前進し、我斥候を包圍するもの如じ。此時も、我に輕傷者一名あり。此斥候の報告に基けるにや、大島少將は、敵

敵の目的

兵二千前柳河子に來り留るにより、我旅團は、警急の備へをなすと、師團に向て報告し來る。將校斥候の師團に差出せる報告には、敵の三縱隊は、蛇龍寨より、一は平二房に、一は前柳河子に、又一は揚相公屯に向て南進すとあり。更に一報告あり、敵兵五六百人は、大富屯に向ふと。以上の諸報告を集めて、之を判断するに、敵の大部隊が、二三日行程の地に來るや、疑を容れざることはなりぬ、然れども、其目的の偵察にあるか、攻撃にあるかは、尙不分明に屬せり、此夜師團は、警戒を加ふること極めて嚴なり。翌十六日に至り、師團長は、更に參謀長及び、鑄方參謀を歡喜山に出張せしむ。然るに、十時過ぐる頃までは、敵兵前進の模様もあらざりし。須臾にして敵の大縱隊は、長虎臺より、沙河沿に前進し、將校斥候よりも、敵は小王屯に來りたりとの報告あり。沙河沿附近に於ては、敵兵村落の土塼を毀壞して銃眼を作るの狀あり。午後一時參謀長は、師團長に報告すらく、敵兵約五百人、交界堡、檢軍堡にある我將校斥候に向ひ、散開して前進す、因りて前哨歩兵を教軍場を集む。正午頃大富屯の敵ハ、東北に運動し、西口の敵兵のみ運動し、檢軍堡に向ひし敵兵は、前進の模様なし。是を以て豫備隊を集合するの時機にあらざと、判断すと。大島旅團よりの報告に、敵の大部分は、老牛園を経て、北方に退却したり。但餘り遠方には退却せずといふ。此報告に依りて考察するも、敵の運動は茫漠として知るべからず、我師團は敵の運

敵を引附くる計畫

動の如何に拘らず、敵を近く。防禦工事に引付けて、扱て之を逆襲するの計畫を立て置きたれば、敵の前面を彷徨するに頓着なく、出戦は固く之を止め置きたり。但此手の前哨は、前面の敵に戒心すること常日の比にあらざ、此夜は、敵は前柳河子・長虎臺・小王屯・大富屯の線に停止す。

野津軍司令官海城に入る

茲に野津第一軍司令官は、小川參謀長・黒田砲兵監・福島中佐以下の面々を随へて岫巖を出發し、十六日午後五時半、海城に來着す。蓋我占領地の形勢を察し、今後の軍謀に資せんが爲なり。翌十七日軍司令官は、我前哨線を巡檢するの豫定なりしかば、桂師團長は、參謀副官諸隊長を随へて、午前十時東門外に出で、以て軍司令官を待つ。軍司令官の一行も、やがて此所に來會す、一同雙龍山に向ふ。途中敵の歡喜山に向ひ進むを望めり。馳せて雙龍山に登れば、前面部の落沙河沿にも、敵旗の翻々たるを見る。是に於て軍司令官以下は、更に轉じて歡喜山に向ふ。檢軍堡、波羅堡の前面には、敵の大縦隊あり。少時にして、敵は廣く散開したるも、我に向て前進する模様なし。其運動の奇にして、且つ妙なる、人をして幾ど端倪に苦しましむ。我は豫期の如く、之を掩撃せんと、既に兩旅團にも命令する所あり、騎兵大隊は、之を遼陽街道に遣はして、我右側の警戒に任せしめ、東橋木城道と、西牛莊城道とは、各々斥候を出し、彈藥及び大行李も、駄載の

各哨の戰闘準備

準備を整へ置きたり。時正午、此日午前六時三好聯隊の前哨大隊より遼陽街道に派遣せる將校斥候は、午前九時頭河堡に達し、十時に至り報告あり。曰く敵の縦隊、其先驅は歩兵約四百人、騎兵約四十騎、遼陽街道を向うて進み、尙陸續南進するの景況なりと。此報に接するや、前哨大隊長富岡少佐は、直に甜水溝東北の高地、即ち雙龍山に登り、敵情を偵察して、一面には下の如く報告し、曰く、午前十時四十分、敵の先頭部は、既に三臺子（土人二臺子と稱せ）、に在るを熟視す。尙其後續部隊は、數旌の旗を建て、三臺子に開進するを見ると。又他の一面には、守備線に在る各哨處、甜水溝に在る前哨第八中隊淺村大尉をして、守備隊に近づかしめ、立子にある前哨第五中隊溝口大尉をして、戰闘準備を爲さしめたり。かくて富岡少佐の報告、三好大佐の手許に達するや、大佐は午後一時五分、乃ち海城を發して、直に進んで雙龍山に登る。是より先き、旅團長の命令に依り、三好聯隊の、他の一大隊を海城北門内に集合して、出發の準備をなし居けるが、再び前進の命令を得て、既に甜水溝に來着せり。栗飯原大佐の配下に在る前哨大隊、小原少佐は、前夜より歡喜山下に緊急合營を行ひたり。此日の午前八時とありて敵は延長の線面を以て此手の前哨線は通らんとするもの、如くなれば、大佐は砲兵及び各隊を防禦陣地に配付して、敵の最良射距離内に入るを待つて、一時に撃退せんものと、射撃を開始せしめて、敵の前進を待てり。遼

彼我兩軍の對抗運動

陽方面擔當の兩大佐の隊は、此くの如く準備する間に、第五師團の第五聯隊、第一大隊は、豫て臈甲山に前哨を張り、第二大隊は、此の朝の命令に依りて、西門外に集まり、十八聯隊の第一大隊は、唐王山に在り、第二第三兩大隊は、同朝の命令に依りて、西門北門の外に集りぬ。然るに三好、栗飯原兩大佐の控へたる双龍山、歡喜山前面の敵兵は、稍々其中間に空虛を置きて、弓狀に兩山を包擁したるのみにて、容易に前進せず。波羅堡子の敵は、南進したれども、是れ亦防禦線には近かず、歡喜山の西及び西南の敵は、稍々前進し來り、遠距離より我陣地に射撃したれど、我敢て應射せざれば、彼れ亦緩射したるのみ。三好大佐は、午後零時三十分頃、前哨本隊たりし第七中隊淺村大尉を双龍山の南麓に開進せしむる折柄、海城にありし第六中隊猪坂大尉、急歩來着したるを以て、之を第七中隊の左方に集合せしめ、一時二十分第八中隊を双龍山砲兵陣地の左翼に展開し、續て第六中隊を右翼に展開せしむ。此時敵兵は、三臺子より漸次進んで西艾塔堡子、南端を占領す。其數歩兵約千餘名、騎兵約百五六十騎、拾鎗(二人持銃)二三挺、大砲四五門、我に向て射撃を開始す。此前面の敵の右翼の大砲と、左翼の大砲との彈丸は、飛ひ來りて双龍山を越し、其南麓に於て十字形を成せり。不幸にも、二時十分を以て、其地點に開進を命せられたる第二中隊水原大尉の二等軍曹北良外茂松、二等卒金田清次、寺主勇次郎の三名は、端なく砲彈の破

我死傷

三好大佐の獨立隊

敵兵益進來

砲銃開射

片に中りて、皆重傷を負ひ、やかて忠死の鬼録に登りぬ。外に輕傷者も二名あり、即上等兵羽柴倉吉、二等卒中村勝太郎是れなり。是より先き、三好大佐は、午後一時五十分を以て、第一中隊を双龍山東の双山子に進め、他の各隊の運動を命せんとする折柄、二時に旅團長の命令來り、曰く、砲兵一中隊は、貴官の指揮に屬す、貴官は其方面の敵に對しては、獨立事に從ふべしと。大佐は讀了して、第二中隊の開進を命令し、次に第二中隊山本大尉、第四中隊山口大尉は、依然恬水溝に留まりて、豫備隊たらしむ。恰も好し、二時二十分に至り、砲兵中隊は双龍山に着したり。乃ち五分間にして放列を敷き了り、引續き砲撃を開始したり。我砲撃の開始に先て、敵兵は二十四旋の旗幟を押し建て、紅黄白の三色を懸へし、漸次進で防禦陣地を距ること四五百米突の地に來る。砲兵の普通戰術上、八百米突以内、敵を受くべきものにわらず、左れど、此時歩兵の防禦十分頼むに足るを以て、敢て敵の接近を意とせず、歩兵は今や遅しと敵の近寄を待ち、いと引付て、一と網とぞ待構へたる敵は我防禦線の雪中に設けられて、目に掛らねば、恐るく進み來り、早や四五百米突となりぬ。砲撃開始と同時に、打ち出す歩兵の射撃、若し四道の敵後に存するにあらざりせば、憐れ敵は殲滅すべかりしを、尙は冥利の盡さざりけん、彼は逸散に逃げ込み、陸を傳うて漸次に退却し、午後二時三十

五分には、此の方面の敵盡く退却したり。此の時三好大佐以下、進撃の情勢々として禁ずべからず、兵士の如きは、命を待たずして突進せんす意氣込みなりしを、奈何せん、我が右側、即ち東方は一帯の山脈より、次第に海城に下り来る地勢なれば、敵にして、普通の戦術を知らしめば、海城の攻撃には、此の邊に全力を注ぐべし。是を以て左側は、危険な付き、決して進撃すべからずとの嚴命は、豫て師團より下りたり。兵士は切齒して止まり、砲兵も三時三十分に至りて、砲撃を中止したり。

桂師團長は野津軍司令官と共に、其部下を引率して歡喜山に登りしより、終始彼我の運動に注目せしが、敵兵一向に近接せざるも、中に就き双龍山方面の敵のみ頗る防禦線に近づき來りければ、其方面の砲撃を増す間もなく敵兵は退却せり。其外王城子方面の敵は、三四千米突の遠距離に在りて前進せず、左方の徐家園の敵は、稍々前進したれども、砲兵の有効射界に入り來らず、只緩慢なる射撃を試みたるのみ。されば、此山の北麓及び、山西教練場の村端なる、栗飯原大佐の隊の防禦陣地より計算するも、敵は常に二千米突以上の大距離より射撃せり。尋て敵の砲兵は、一は敵の全體の中央、即ち双龍山に向て進める敵の右翼に當る小丘より、双龍山を砲撃するの餘暇を以て、時々歡喜山を砲撃し、一は歡喜山の西に當り、山上よりは二千米突許の波羅堡子の南

敵兵前進
を躊躇す

端に放列を敷き、東の小丘のものと、各々三門許にて、歡喜山頂を夾撃す。一時は兩面より彈丸飛び來り、山頂少しく危険なりしかど、東の砲は、雙龍山の我軍の砲撃及び、歡喜山頂よりの應撃によりて、早くも沈黙せり。波羅堡子の敵砲は、尙餘喘を保ちたるも、歡喜山南の我砲に連撃せられ、且つ徐家園子附近に敷きたる我放列よりも砲撃せられ、又第十九聯隊の第五中隊よりも一齊射撃を受けたれば、是亦やがて沈黙せり。さて、歡喜山頂には、遠距離なる敵丸の固より達すべくもあらざれば、山上は危険止み、遠く望めば、皚々たる積雪は、平野を蔽うて敵の一去一來、歴々認むべく、直下を俯瞰すれば、我守備兵は、防禦工事の蔭に隠れ、敵兵を窺ひ居る有様を認めたり。桂師團長は、早く戦團の局を結ぶにあらざれば、戦團前哨を張らざるべからず、而して此寒天に際して、戦團前哨を張るが如きは、得策にあらず、兎も角も一舉に敵兵を打拂はんと決心して、栗飯原大佐に命じて、敵の右翼に進ましめ、午後四時までは、尙待ちたれども、敵は山上を距る一千八百米突に進み來りたるのみ。されば已むを得ずして、山頂山腹の各砲に等しく發火を命じたり。豫て測定したる事として、一發波羅堡子に打込む效力、特に著しく、敵は慌て、退却せり。郊外に遁げ出でたる敵兵は、我發彈毎に、二人、三人雪上に倒れ臥す。山上にては、軍指令官を始め、大音を揚げて喝采し、例へば兩國の火花の如く、只玉屋と呼ばぬ許りの有様なりき。

歡喜山の
歡喜

げにや、此の山をば歡喜とぞ呼ぶなる。

各隊追撃

栗飯原大佐は、敵兵の近接を待ちて、午前より歡喜山下に控へ居たるに、敵は常に二千米突以上の遠距離にあり。正午頃、我左翼に逼ること約七八百米突に及びたるも、又忽ち退却して、約千二三百米突の位置に停止し、小銃の良射距離内に來らざれば、頻に氣をいらだてたる折柄午後二時四十四分、師團長より命令來る。曰く貴官は、眼前の敵兵を驅逐する爲め、其聯隊二大隊及び、北門に集合せる十一聯隊三大隊、並に砲兵一箇中隊を率ゐ、徐家園子方面より、敵の右翼を攻撃すべしと。是に於て第十八聯隊第三大隊は、牛島少佐之を率ゐ、三時三十分徐家園子に着す。是より先き、砲兵中隊は、徐家園子東北方の砲兵陣地にありて波羅堡子なる敵砲に對射す。三時三十四分、第十九聯隊の第五中隊は、敵の砲兵陣地を側背より、一齊に射撃せり。敵砲、我歩砲の射撃に苦しみしと見え、殆ど沈黙したり。此時安村堡子、波羅堡子間にありし敵の歩兵は、約千四五百米突の距離に留まりて前進せず、唯時々拾鎗を發射するのみ。四時、第十八聯隊の第三大隊牛島少佐に對し、栗飯原大佐は、命令して曰く、貴官は、其大隊を率ゐ、即時安村堡子より、敵の右側を攻撃すべしと。乃ち牛島大隊は、前進しければ、四時十分、前面の敵は退却を始めたなり。四時二十分に至り、大佐は更に命令を下し、第十九聯隊の第二大隊(藤本少佐)の第五(今村大尉)、

第六(井阪大尉)の兩中隊は、波羅堡子に前進し、第八(田上大尉)中隊は、其右翼に在りて、相共に前進せしむ。第六聯隊の第二大隊長小野寺少佐は、大佐の指揮に屬したるものにはあらざりしも、大佐は急に應せしめんとて、少佐に命じ、十八、九の兩隊の中央後に在りて、波羅堡子に前進せしむ。砲兵中隊も、亦共に前進せり。

斯の如くにして、十八聯隊は最も西に、十九聯隊は最も東に、第六聯隊は其中間に立ちて、砲兵諸共各隊打揃て前進す。同時に、叫廠にありし十九聯隊の二箇小隊も、亦波羅堡子の方面に突出せり。先づ發したる牛島大隊の三箇中隊は、敵の攻撃を一手に受けければ、砲銃弾に傷けられたる者數名あり。愈進みて愈艱みしかど、少佐は之に屈せず、謂らく、斯くて尙徐々に前進せば、死傷益々多かるべしと、一箇中隊の掩護の下に進みたる二箇中隊に令するに、直に突貫すべきを以てせり。一箇中隊にも、又引續き突貫せしめ、先づ第一に波羅堡子を占領し、諸隊皆進む。敵は之れが爲め、大富屯・小富屯の方向に退却し、千二三百米突の遠方にあり。故に我は射撃せずして、之を追ふ。同時に矩形射撃に敵を掛けん、歡喜山の隊をも前進せしめ、大島旅團長之を指揮し且追撃兵全部の司令官として、奮前したれども、亦及ばざりき。諸隊は、波羅堡子の北方約千米突の並樹地に停止す。砲兵中隊、亦此地に達し、大富屯に向て砲撃す。此戦闘に於て、敵は常に

突貫又突貫波羅堡子を占領す

敵の遠距離の射撃

此役の敵將

我軍の死傷

千七八百米突の大距離を保ちて急射撃を行へり。かゝる遠距離の急射撃を、有効と思へる敵の無識なることを憐れなれ。大島少將が、歡喜山と大富屯の中間まで進みし頃には、早くも午後五時を過ぎて、日没に迫りければ、師團長は、命じて追撃を中止せしめ、諸隊各々舊位に復せしめたり。敵は、辛くも普賴屯及び、遼陽の方向に退却したり。敵勢此の如くなれば、此夜再襲の憂虞とてはあらざるも、大島少將は、勝て胃の繼を締めんとて、歡喜山下に警急合營せり。此日藤甲山に前哨を張りたる塚本聯隊の第一大隊にては、遠藤中隊山頂にあり、隊長遠藤大尉は、敵の徐家園子に進まんとするを見るや、隊を擧げて牛莊街道に進み出で、敵の最右翼を攻撃し、二臺子附近に進みたる後に、大迫少將は藤甲山に登れり。佐藤聯隊の第二大隊は、其下に整列し、其方面を固めたりと云ふ。此日の敵は、榮將軍を總大將として、韓・保二將之に佐たり。尙土人の言に、騰鶯堡子(北七里許)には、依將軍・長將軍若干の兵を引率して控へ居たりとの事なりと、報告せしものあり。此邊の事情に、豫て精通の聞ある福島中佐の説に依れば、我と現に衝突せし前面の敵兵は、皆八旗兵なれば、依・長兩將軍の、此附近にありしとの風説確實あるべしと云ひ、師團參謀の判断も、亦同様なりと云ふ。

此戰に當て彼我の死傷は、我軍に於て、前記三好聯隊の輕重死傷七名の外、十八聯隊に負傷將校

敵の死傷

海城逆襲の第一回

戦利品

清兵の迷子札

折下大尉・川口少尉の二名及び、下士以下十八名・即死兵士三名、又十九聯隊には、稍重傷の將校には、野坂見習士官及び、下士以下の負傷七名・砲兵特務曹長一名・下士以下六名、合計即死は一名にして、傷者(後死者を含む)、四十九名あり。砲兵特務曹長は、神山某にして、波羅堡子の敵に胸を射撃せられ、負傷決して輕からざるも、歸途他の重傷者を見るに忍びずとて、自ら乗れる擔架を之に譲り、某は徒歩して歸れりとぞ。敵は近來死傷者運搬に心を用ひ、或は橋に、或は「アンペラ」の類に積み載せて、人力若しくは馬力によりて曳き行くが故、其数を確知すべからざるも、現に死屍の進撃方面に残りしもの二三十許あり、間牒の言に依れば、「韓邊外配下の死者五十餘名、傷者三百餘名あり」と。是を海城第一回逆襲とは云ふあり。

戦利品は、古式の大砲三門・拾鎗小銃及び、彈藥等若干あり、押收せる文書、其他に記述すべきもの一二あり、其一は兵士の迷子札なり、四分板にて、長さ三寸幅二寸許に製作し、表に行軍十禁と題して「臨陣退縮者斬。姦擄平民者斬。造謠惑衆者斬。聚衆打降爲首者斬。誤遺火種驚衆者斬。遺失軍機者貫耳。高聲喧嘩者貫耳。擅自離營者貫耳。飲酒賭博者貫耳。不遵官長約束者貫耳。」との個條を列記し、裏に吉林驍勇軍左營正勇、左哨第頭棚徐臣良と書したり。此札によて之を考ふるも、吉林軍の慥かに今回の敵中に交りしと、判明にして、長將軍出

敵來攻の目的

攻勢防禦と專守防禦

敵の態勢

馬の説も、亦之に依て確めたり。抑も敵が今回來攻の目的は、海城の回復にありしか、將た偵察、若くは牽制にありしか何共定かなず。戰團前に於て既に然り、其戰團後に之を推すも、果して其意回復に在りとせんか、其攻撃の緩慢にして、其斷念退却の迅速なるは、如何にぞや益以て其所爲を解するに苦む。兵家に攻勢防禦の説ありて、專守防禦と相對す。敵は初めより、專守防禦を勉めたりしが、曩に鳳凰城の來襲あり、今又海城を攻撃す。彼今從來の常套を脱却して、攻勢防禦の利あるに出でたるは、少しく賞すべきに似たるも惜むべし、之が實施に至ては、依然たる防禦的態度を免れず、彼れが攻撃の目的なる海城を、眼前に置きながら、僅に郭外に出でたる我砲兵の良射擊距離内にも進むこと能はずして、徒に趨退巡し、一たび微弱の攻撃に遇へば、忽ち舊位地に退却し、到る處に樹木を伐り倒しては、我軍の方面に鹿砦を設け、土塀を毀壞しては、我軍を防禦すべき保障を作り、寸進尺退幾旬日を経て、漸く目的に近きつゝ、一旦敵に觸れては、仔細もなげに退却するは、其意と全く相反す。然れ共彼の將校が遺骸に纏へる一片の零紙は、圖らずも、我手に入りて、敵の進退は如何に奇なるも、其目的は正しく海城回復にありし事を證明したり。其文に曰く、十九日攻城、二十日奪地、廿一日滅賊、廿二日慶功、廿三日犒賞、廿四日偃武、廿五日修文、廿六日招兵、廿七日選將、廿八日全勝、廿九日凱旋、三十日過年と。此日課に依るに、

陽曆にて逆襲當日、即ち十七日は、清曆廿三日に當る、故に敵の海城逆襲の目的は、明瞭なるも、尙此舉の遷延せしを視るべし。

野津司令官の談

紅瓦塞戰一周年招魂祭、桂三師團長の祭文

戦争の當日、野津第一軍司令官は、桂師團長と共に、歡喜山上に在て、敵將長、依、韓等の輩が、徒に此地に彷徨しつゝ、蠢動するを下瞰し、紅旗の東に聚り、藍衣の西に群がるを指點し、且つ談じ、且つ笑ひつゝ、日を終へたりしは前記の如し。此時司令官は、役夫が運び來たる一椀の珈琲に喉を濕しつゝ、師團長に打ち向ひ、曰く、久し振にて、面白き演習を見物したりと。同夜師團長は、特に軍司令官を請じて、立食の饗應あり、超えて十九日未明を以て、野津將軍は、軍司令部に歸る。同月第三師團は、紅瓦塞戰團の一週月に當るを以て、海城南小門内に於て、戰死者の招魂祭を執行し、桂師團長は、先づ靈前に向ひ、祭文を讀む。曰く、維明治二十八年一月十九日、以三清酌庶羞之奠、祭下死三西征之役、軍人軍屬之靈嗚呼、軍人軍屬、遠涉海洋、遠踐山澤、當堅不撓、遇強不卻、或死三彈丸、或斃三瘧疫、人豈無家、親莫問兒、義勇奉公、不顧其私、是以戰野、虜必潰離、夏則炎天、冬則互寒、忠節盡國、不厭其艱、是以攻城、取之不難、魂魄在天、地無影迹、氏名在牒、容姿何覩、我武之揚、此靈惟藉、嗚呼哀哉、尙饗と。了て恭拜す。次に兩旅團長、次に閑院宮殿下より、佐官、尉官、相當官と、順次に參拜し、其間兵士は建制順序により、中隊宛廣

第二回の
海城逆襲

庭より參拜す。此日各隊より、思ひくゝの奉納物あり、追遠の切なる、斯の如し。死者は以て瞑すべく、生者は以て倍々奮勵、事に従ふや知るべきなり。越て一月廿二日に至り、敵は更に卷土重來したり。是即ち彼が第二回の海城逆襲にして、彼等は過ぎにし十七日の大敗に懲もせず、依將軍・長將軍・韓邊外等の面々は、大兵を以て、再び寄せ來りしなり。過日の役、我軍は其機會の未だ熟せざりし爲め、敵の追撃充分ならざりしとは、夢にだに知らざる彼清將等は、我を小勢と侮り、乾線堡なる其本陣を始めとして、各地の舍營を、其前日に出發し、今や數縱隊を作りて、海城指して盛返し、廿二日は、未明より我防禦陣地の前面に現はれ、而して其主力は、何れの地點に向ふや、我は前夜より偵察を怠らざれども、此日の早朝迄は、未だ分明の判斷を得ざりき。やがて同日の午前八時を過ぐる頃、敵の大部隊は、牛莊街道に接近せる小富屯・大富屯を自指して來集し、又長虎臺後、三里橋より前進して、双龍・歡喜兩山の中間より、海城に直入せんと、勢を示したる敵兵も、歡喜山に於ける我砲兵陣地を避けて、遠回し。沙河園の北裏を過ぎ、波羅堡子に前進す。別に一の縦列は、非常の延長にて、湯河堡子附近より、双龍山前の二台子に向ひて進む。我の豫定の前哨分擔を以て、敵の來襲に備ふ。如何なる地點に敵の來ると雖も、我防禦内には、一步も足踏させじと勇みぬ、要する所は、敵の主力を擊破して、全線一時に打壞ふに在り。而し

桂師團長の
佐藤大佐に
下せる
命令

敵の目的

て桂師團長の判斷は、敵の右翼を以て、其の主力の所在點となせしもの如く、佐藤大佐に下したる我逆襲命令に、貴官は歩兵第十八聯隊の第二大隊及び、第七中隊并に、歩兵第六聯隊の第一大隊・砲兵第二大隊を率ゐ、機に應じ、敵の右翼を逆襲すべしとあり。抑も我前哨の分擔は、既に前記の如く、第一の右翼、双龍山下より、歡喜山東までは、三好大佐之を指揮し、歡喜山下より牛莊街道までは、栗飯原大佐に屬して、大島旅團長之を指揮し、牛莊街道より、臈甲山下までは、塚本大佐、臈甲山下より、唐王山下までは、佐藤大佐の持場として、大迫旅團長之を指揮するの定めあり。大富屯及び、波羅堡子より、海城方向へ前進の衝に當る徐家園子は、栗飯原大佐の持場に係る。而かも大佐の持場中には、彼の歡喜山ありて、之を守るは最要の任務たり。此日大佐は、小原少佐の大隊と共に、同山に在り。藤本大隊は、徐家園子を防守す。又双龍山に向ふの狀ある敵兵は、僅に我力を割くの目的を以て、牽制を其任務とするものなること、此時の敵狀によりて、殆ど明白の事となりしも、之に應ずるの防備なくんば、我は此手より敗ることなきを保すべからず。三好大佐は、此方面を含て、他處に赴くを得ざるなり。大迫旅團にても、塚本大佐の持場は、徐家園子に近接して、同じく前面に敵を受く。獨り佐藤大佐の持場に至ては、遠く西南に延び、敵、營口街道より來じれば、一點の危険あることなく、隨て大佐の、其場に在るを要せざれ

は前記の命令を受けたるは、敵の主力此方面に向ふと思惟したればなり。

斯くとも知らぬ敵軍は、恐なる哉、主力を右翼に籠めて、愈々大小富屯より南し、密集せる横隊となり、次第に徐家園子方向に進み来れり。五人一幟、十人に一旗、旗幟の翻々たる、赤黒白黄相交り、七夕乞巧の短冊よりも、尙ほ美なり。衣服は垢染みたりと雖も、遠目には、さまで目立たず、紫色の後鉢巻、縮み、拾鎗、鳥銃、連發銃等、種々の火器を手々に把り、午前十時十五分、一千米突以上の遠距離より射撃を開始して、一步一發、二步一射、恐るゝに歩を進む。我は豫て極近距離に引付け、一時に掩撃の覺悟なれば、一向之に應せず、徐家園子の北西両面には、十九聯隊の藤本大隊は、防禦工事の中に隠れ、同村より西方に斗出せる防禦工事は、元と小高き處なりしを、豫て土民を雇ひ、削り均らして、平地とし、其南方地低きを幸ひ、工事の南方を小崖の如くに作れるなり。第六聯隊の第一大隊は、北向して崖の中途に伏臥す。岡本少佐は、缸瓦塞の負傷未だ愈えざれば、徳田大尉は、中隊長を以て隊長代理となり、第十八聯隊の牛島大隊と、第七中隊(寺田大尉)とは、此崖下に立ち、西向して待ち伏せしめたり。此手の砲兵は、兵頭少佐之を率ひ、徐家園子より後に放列を敷きて、頻りに敵の前進を妨ぐる如くに見せ掛け、發砲間斷なかりしも、敵は偏に徐家園子に突き入らんとし、横隊の西端は、牛莊街道の遙に南まで延長し、東端は

敵兵の旗

我軍敵を引付く

逆襲隊の指揮官

我伏兵突起す

波羅堡子より凹道を南進せる敵に連なりて、次第に迫り来る。臆病の清兵が、かく前進し来るは、一に徐家園子に強敵なかるべしとの臆想を恃みに、地物もなき平野を進み来れるなり。味方は、毫も彼等の眼光に觸れざるに、尙村端に向て、射撃間斷なく、而して歩する事頗る緩々たり。此の如きこと約二時間、幾萬の彈丸、硝薬を浪費し去りて、早や午后の一時を過ぎにけり。逆襲隊の指揮官たる佐藤大佐は、敵の來ぬ間に、晝食せんと、辨當出して、半食して未だ了らず、此時早く、彼時遅く、敵の前兵は、工事の一角に觸れんとす。時に一時十五分、此機失ふべからずと、辨當投げ捨て起ち上り、進めや打と號令す。満を持したる味方の兵士、現はれ出で、一齊射撃、第一には牛島大隊、工事の西端より突出し、續て出づる第七中隊、其次には、岡本大隊、呐喊の聲天地を動せり。之に驚く敵兵は、牛島大隊に突き掛けられて、其中央より二半に切斷せられたり。二百乃至、三百米突の近距離に引付けての一齊射撃、何かは以てたまるべき、其處にも一人、此處にも一人と倒れ伏す。這は叶はじと、敵は忽ち退却を始む。すは敵の退却ぞ、敵の敗北ぞと呼ははる將校の聲に、一層氣力を添へたる味方は、又更に呐喊す。第十九聯隊の藤本大隊も、引續き起ち上がる。佐藤大佐は、直に追撃を命じ、各隊は先を争うて突進す。塚本大佐は、自己の聯隊の第二大隊十八聯隊の第一大隊(二中隊欠)を指揮するの任務にて、藤甲山に在りしが、此有

様を見るより、直に山を馳せ下りて追撃す。是より先き、大島旅團長の、徐家園子の敵の近距離に逼れるを歡喜山より望み、且歡喜山北方の各村には、敵の大部隊伏在せずと判断しければ、急ぎ栗飯原大佐に山麓の小原大隊を引率して、徐家園子に進行せしむ。大佐未だ達せざるに、正面の敵は退却を始め、波羅堡子より南下せる敵兵も、同村内を経て、北方に退却す。歡喜山上の陣地より、或は沙河沿の敵砲を打破して沈黙せしめ、或は其東北に出没する敵兵を逐ひ散らし、或は羅家堡子の南北兩端に出で来る、敵兵を狙撃したる砲兵第一大隊は今しも、波羅堡子の北端に出づる敗兵を射撃す。發丸能く命中して、斃る者、逃ぐる者、其状いと面白し。牛島大隊に突掛けられ、東に割たる大部隊は、直に波羅堡子の西を過ぐ。其近きものは、歡喜山上より砲撃せらるゝが故に、大富屯の方向に退却し、西に割れたる多數の敵兵は、更に塚本大佐に追はれ、迂回して、漸く北方に逼る。而して彼等は皆遼陽街道に向ふ者の如し。牛島大隊は、二時に大富屯を占領し、他隊之に次ぐ。尋で皆其舊位置に復す。

大富屯占領

双龍山の三好大佐は、左翼の敵兵と、數時間對持したるに、敵は右翼の敗走を知りて、亦直ちに退却し、前方約二里の村落に停まる。初め第二大隊(富永少佐)の大半は、此日午前六時三十分、北門外に集り、七時三十分に至り、旅團長の直轄に移されたれば、聯隊長は、第二中隊(水原大尉)

二台子北端斥候の衝突

のみ引率して、前哨持場なる甜水溝に向ひ、八時過ぎに至て、同所に達する間もなく、双龍山に登り、敵狀を偵察す。此時第一大隊長内藤少佐より報告あり、曰く、今早朝より二個の將校斥候と、和尚溝及び、遼陽街道上、頭河堡に向け派遣せしに、和尚溝方面には、長嶺子に至るも、敵を見ず。頭河堡に出でし斥候(今村中尉)は、二台子北端に於て敵の歩兵二三十名、騎兵二三十騎と衝突し、暫時斥候戦を爲し、我兵負傷者二名、敵兵四名を殲し歸還せりと。此報告を受けたる後に、敵は間もなく三里橋子の北方高地に登り、砲四門を以て、我陣地に向ひ側射を開始し、九時五十分に至り、約四五千の敵の長縦隊は、柳河子より長虎臺に前進し、尋で頭河堡より沙河沿に、約一千人の敵の長縦隊進み来るを見る。三好大佐は、直に將校斥候(矢道中尉)を西芥塔堡子に出して、二臺子の方面を監視せしむ。十時三十分に至り、三里橋子の敵は、歩兵約四千名を以て、双龍山に向け行進せしむ。將校斥候、擊て其二名を斃し、又一名を傷ける故、敵は散乱して退却せり。既にして午前十時五十分頃、歡喜山に在る旅團の命令により、第五・第七中隊を、第二大隊の指揮下に復しければ、双龍山の中備兵は、完全の一個大隊のみとなる。是正に徐河園子方面に行進せる、敵の右翼の、盛に射撃する時なりき。三好大佐は、僅に一個大隊を以て五六千の敵を眼前に引受け、豫ての約束に基きて、滿を持して未だ發せず。敵の右翼、即ち我左翼の砲銃聲を聞きつ